

---

# 双六で人生を変えられた男

晃甫

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

双六で人生を変えられた男

### 【Nコード】

N2621Y

### 【作者名】

晃甫

### 【あらすじ】

神様の遊戯によって勝手に転生させられてしまった主人公。一応もらったチートじみた能力を引っさげ転生した『IS』の世界での苗字はなんと『更識』だった。

主人公は千冬、束と同世代。

妹を溺愛する重度のシスコン。

## #1 転生はその時点でフラグ（前書き）

どうもはじめまして晃甫といいます。

ISの二次小説読んでたらドツプリはまり衝動的に書いてしまいました……

## #1 転生はその時点でフラグ

『すまなんだ』

『……は？』

『すまなんだ』

『ちょっと待て誰だアンタ』

突然目の前に現れたおっさんがただでさえ禿げかけた額を地面に密着させてなにやら謝ってきた。

うん、早い話が

DOGEZA

『なんか分かんけど、とりあえず顔上げろよおっさん』

言われておっさんは顔を上げる。うわ、でこ真っ赤じゃん。

『で？　なんで俺に謝ってんだ？』

『……お主覚えとらんのか？』

『……何を』

『いや……、覚えていないのなら無理に思い出す必要もなかつ』

なんだよ気になるじゃねーか。

『それでなんじゃが……』

なにやらおっさんが人差し指同士をつんつんさせながらモジモジし  
だした。やめてくれ吐きそうだ。

『お主、転生してみぬか？』

『……はい？』

転生？ それって小説とかでよくあるパターンのやつやん。

……あれ、待てよてことは俺ってまさか。

『俺、死んでんの？』

『……うむ』

……orz

まじかよ。

『……なんで？』

『それがのう……神様同士で双六をやったんじやが、その止ま  
ったマスに人を一人転生させる、というものが……ちょ、待つのだ  
や！！ 思いっきり拳を振り上げるでない！！』

本気で殺つてしまおうかと思ったよ。つーかなんだそのふざけた  
双六は。 そんなんで俺殺されて転生させられるのかよ！！

『そんなふざけたもんで俺は理不尽に殺された』

『いや、あのほんとすいませんでした』

再びあの土下座スタイルで謝るおっさん。……え？　てことは  
コイツ神様？

『そうじゃ』

心を勝手に読むな。

『話戻すけど、転生って具体的には？』

『うむ、お主には「IS」の世界に行ってもらいたいのじゃ』

『小説じゃねーか』

『仕方ないのじゃ。くじを引いたらこれだったんじゃから』

くじ引きって。

つーかISってあの女尊男卑を体现したみたいな世界だろう。や  
だよそんなあからさまに嫌な思いするって分かってる世界は。

『心配無用。テンプレは弁えておるわ。お主には何か能力を授けよ  
う。そうすれば向こうの機械とも戦えるじゃろ』

おいそれ俺生身ってことじゃねーか！！

……ん？　あれならいいんじゃないか？

『じゃあ、とあるの一方通行の能力をくれ』  
アクセラレータ

『ベクトル操作か。いいぞい』

よっしゃ！

あれならずISに負けることはないだろう。  
反射してしまえば大抵の敵は倒せるし。  
なんか楽しくなってきたぞ。

『性別の希望はあるかの？』

『男に決まってるだろ』

『承知した。ではこれから主を転生させるぞい』

おっさんが言った途端、後ろに大きな扉がなんの前触れもなしに  
現れた。

これをくぐればいいって訳か。

『じゃあなおっさん』

『うむ。ほんとにすまんのだ』

『もういいよ。もう会うこともねえだろうしな』

そうして意気揚々と扉へ向かって歩き出そうとした瞬間。

足元に大きな穴が開いた。

『……へ?』

『達者でのお』

『こっちかよクソじじいッ!』

そうして俺の意識は闇の中へと沈んで行った。

というのが俺が五年前に体験した出来事だ。

五年後、つまり現在五歳の俺はしっかりとISの世界に転生すること成功していた。しかも何やら金持ちの家計らしく家も中々に豪奢なんだ。

ん? ISの世界に転生できたのかがどうして分かるのかって?

ハハハ、そんなこと簡単だよ。

「形無。こんなところにいたのか」



「あ、父さん」

目の前に現れた親父（呼び名は今のところ父さん）が部屋を抜け出した俺を見つけ出した。

「戻りなさい」

「はい」

あ、そうそう話の続きだったな。なんでここが『IS』の世界だと分かるのかっていうと。

俺の名前で一発でした。

俺の名前、かたなし形無  
俺の苗字、さらしき更識

あの（・・・）更識家に長男として生まれてた。

……それなんてフラグorz



## #1 転生はその時点でフラグ（後書き）

ちなみに主人公はこのあと生まれる妹を溺愛しますww

## #2 原作キャラとの遭遇はその時点でフラゲ（前書き）

基本的に亀更新です。

## #2 原作キャラとの遭遇はその時点でフラグ

さて、俺こと更識形無さらしきかたなしは無事に五歳になり、明日は幼稚園の入園式だ。

生まれてからこれまでのことは余り話したくない。前世で二十歳だった俺が零歳児からやり直して母親のおっぱいしゃぶるなんて羞恥プレイ以外の何物でもなかったしな。

いや実際転生してみte思ったけど、この家すごくね？ 完全に首相官邸かとおもったわ。

俺がそんなことを思っていると、唐突に俺の部屋の襖が開いた（ちなみに俺の部屋は十二畳）。

「形無。勉強は済んだのか」

「終わった」

俺に宛がわれた部屋に入ってきたのは俺の親父、更識楯無さらしきたてなし。暗部に対向するための対暗部組織『更識』の十六代目。つまり現当主だ。

「明日からお前は幼稚園に通うわけだが、」

一見とても厳しそうに見えるこの親父だが。

「大丈夫か！？ 苛められたりしたらすぐ父さんに言うんだぞ！？」

とんでもない親バカだったりする。

「大丈夫だって。何も心配いらないから」

「本当か！？ いや心配だ。明日の入園式、やはり俺も」

そんな親バカっぷりを遺憾無く発揮する親父だが、その言葉を遮るように部屋に入ってきた女性が親父の頬を思いっきりビンタした。

おい今のビンタなんか破裂音したぞ。

「あら楯無さん。明日は大事なお仕事があるのでしょ？ 入園式には私が行きますから」

「み、瑞穂！！ しかしだな……ッ！」

「タ テ ナ シ サン」

ゾクゾクッ！！ と背筋に何か得体の知れない悪寒が走る。

こえーよ、瞳から完全に光が消えてるよ。親父も完全に硬直してしまっている。

紹介が遅れたが、この大和撫子みたいな美人は俺の母親、更識瑞穂ずほ。ちなみに二三歳。さらしきみ

この更識家に十七で嫁いで十八で俺を生んだ若奥様だ。

「わ、わかった。形無の入園式はお前に任せる……」

「はい。任せてください楯無さん」

がつくりと肩を落とす親父。なんか哀愁漂ってんなあ。

そんなこんなで入園式。

俺はなにやら幼稚園の制服らしい紺色のブレザーに同色の帽子を被され、少し広めのホールの席に座っている。

どうやらこの幼稚園なかなかレベルが高い私立の幼稚園らしく、入園試験なるものまでやらされ合格したのがここに集まっている園児たちのようだ。

ん？ 俺は試験余裕だったよ？ だって精神的にはもういい年だぜ。イラスト見てなんの動物か答えるとか簡単すぎるわ。

「形無。緊張していない？」

「ん、大丈夫」

つーか隣に座ってる母さんの方が緊張してんな。まあまだ二三だし美人だから回りからちょー見られてるし仕方ないんだろうけど。

「母さんね」

「？」

「実は今緊張してるわ」

「知ってるよ！」

この人実はとんでもない天然だから困る。料理とか家事とかは完璧なんだけどな。

あ、なんか始まるっぽい。禿げたおっさん出てきた。

「えー本日は

」

割愛。

式が終わりました。

あんな長ったらしいおっさんの話誰も興味無いだろうし、もし書いたら軽く五万字は行くだろうからカットで。

そんなわけで現在俺は幼稚園のクラス分け、早い話が“ばら組”というクラスにやって来た。ちなみに教室の後方には親さん方が横並びしている。

クラスは全体で二十人という少人数制でそれが『ばら』、『きく』、『ひまわり』、『ふじ』の四クラス計八十人の構成になっている。



……なんか幼稚園児に混ざって座るのって恥ずかしいな。

俺の席はクラスのちょうど真ん中あたり。名前順で座席を決められるから『た』だとちょうどこの辺りになる。

先生もまだ来ないみたいだから暇なので辺りをキョロキョロと見回してみる。

やっぱりみんな幼いなあ。

ん？

おかしいな。

俺の見間違いか？

俺はごしごしと何度か目を擦ってみた。

……見間違いじゃない。

俺はその子のほうをジッと見つめてみた。

「……何なのかな」

するとムスツと不貞腐れたようにその子がこちらを睨んでそう言っ  
った。

腰まで伸びた髪、なにやらカタカタとノーパソを叩くその仕草。

ああ、これは間違いない。  
アイツだよ。

俺の座席の左隣に座るこの少女。  
左隣ということは名前順できに必然的に『さ行』になるわけだ。  
そしてその少女の左胸の位置に付けられた可愛いバラをモチ  
ーフにした名札に書かれていた名。

しなのの たばね

……。

え？ いきなり原作キャラとエンカウントとかこれ完全にフラグ  
建てちゃ（ry

### #3 お兄ちゃんになるのはその時点でフラグ（前書き）

たった一日でユニークが1000を超えた……だど！？

お気に入り登録してくださった皆さんありがとうございます！！

流石IS人気と言わざるを得ない。

### #3 お兄ちゃんになるのはその時点でフラグ

前回のあらすじ

何故か原作キャラとエンカウントしました。

「なんなのかなジロジロこっち見て。鬱陶しいから束さんの視界に入らないでくれる？」

……oh。

流星は『天災』だと言われるだけあって俺らみたいな凡人は眼中にないらしい。

どうでもいいけどまだこの頃はあのウサ耳（箒ちゃんレーダーだとか言ってたやつ）付けてないんだな。

あ、当たり前か。

まだ箒とか生まれてすらいねーんだった。

「ああ、悪かったな。綺麗な髪してたから見とれてた」

うん、あながち間違っではないない。確かに束の髪の毛は絹みたいにサラサラしてたんだから。

「……ふん」

その言葉を聞いた束は俺を無視して再びパソコンのキーボードを叩き始めた。

……この年で何をやるうとしてんだろうな？ まさかもうISの基礎とか考えてんのか？

とかなんとか考えてたらこのばら組の担任らしい幼稚園の先生が入ってきた。肩までのショートカットと黄色いエプロンがよく似合う先生だ。

「はい、今日からみんなの担任になりました。館加耶です、よろしくね」

館 加耶？

やかた かや

やかたかや

……おいこの人やまやの二番煎じ感がぶんぶん漂ってんぞ。

あれ時系列的にはこっちが先になるからあっちが二番煎じなのか？分からん……。

「じゃあみんな自分のお名前を他のみんなに教えてあげようねー」

というわけで名前順に自己紹介が始まった。みんなたどたどしくもすっかりと自己紹介をこなしていく。名前だけでいいって先生が言ってたのに何やら詳細な自己紹介を始める奴まで居たし。

「……は、はい。次の人」

見る余りにも詳しすぎて先生若干引いてるじゃねーか。

お、次の子が立って自己紹介を始めるみたいだ。

「お、織斑千冬です。よろしくお願いします」

……。

……聞き間違いだよきっと。うん、俺耳悪いんだきっとそうだ。

織斑なんて珍しい名字じゃないし。前の奴も名字は織斑だったし。あ、字が違うわ。あいつは織村だったな。

……完全に主人公の姉さんじゃねえか！！

いや違うと言いたいけどあの髪型と雰囲気は間違いなく将来『ブリュンヒルデ』とか呼ばれる織斑千冬だ。

なんなんこのクラス。原作キャラとのエンカウント率高すぎだろ。とゆうか俺完全になんかのフラグ建てちゃってるよ。主に死亡フラグとか。

「はい、次の人」

俺が沈んでいることなど露知らず、担任の舘加耶……やかや（今

命名）は自己紹介を進めていく。

「篠ノ之束」

「……………」

「……………」

俺と先生はそれだけ言って再びパソコンに向き合い始めた束に固まってしまった。この子ほんとに他人に興味ないんだな……。

なんとか先生が困りながらも自己紹介を続け出した。うん、頑張れよ先生。

あ、次俺の番だ。

「更識形無です。よろしくお願いします」

我ながら無難で面白みのない自己紹介だと思うが仕方ないだろう。人前で話すのとか苦手なんだよ俺。

「……………ん？」

自己紹介を終えて席についたところで気が付いた。

……………何だこの視線の数は（主に女子）。

周りの子からの視線が半端ないんだけどなんでだ。俺変な自己紹介してない筈だぞ？

主人公は例に漏れずそっち方面において鈍感野郎です。殴って下

さい。

その後恙無く自己紹介は終了し、簡単な説明と明日からの日程が伝えられてその日は解散となった。

原作キヤラであるあの二人とは、一言も会話をすることなくそくさと幼稚園を出た。

だって今関わったら間違いなく厄介事に巻き込まれるだろ。少なくとも中学生くらいまでは平穩に過ごしたいんだよ俺は。

入園式も終わり徒歩で自宅へと帰ってきた。やっぱ更識家ってデカイな。裏工作する暗部組織の対暗部組織とか言われてたからひっそりと暮らしてるとか一瞬でも考えた俺がバカだと思えるくらいにデカイ。

母さんと手を繋いで家の敷地内に入る。完全に日本風のこの家は門を潜ると庭園が広がっている。なんというか、どこかのヤクザ者の組長の屋敷みたいだ。

「ただいまー」



「形無っ！！」

帰ってきた途端に座敷から親父が飛んできた。どんだけ心配してんだよ。

「大丈夫かッ！？ 苛められたりとかしなかったか！？」

「大丈夫だよ。そんなに心配すんなって父さん」

「本当か！？ どうなんだ瑞穂！！」

相当心配しているのか俺が大丈夫だと言っているのにも関わらず母さんに確認を取っている。いや大丈夫だから肩を掴んでガクガク揺さぶらないでくれ。

「大丈夫ですよ楯無さん。苛められるどころかみんなの注目の的だったの。ねえ？」

「……？」

注目の的？ ああ、あの自己紹介の後になぜかバシバシと視線を集めたあれか。どういうわけかあのあと多数の女子が席に集まってきた大変だったんだよな。

「あらあら。形無は分かってないのね」

にこやかに微笑む母さん。できることならどういふことが説明して欲しいが、どうせ教えてくれないんだろうな。

「注目？ それは一体どういうことだ？」

親父……、俺は信じてたよ。親父も俺と仲間だってな……！！  
あ、母さんが呆れて信じられないくらい大きな溜息をついてる。

「それより楯無さん。今日は大切なお仕事があつたんじゃないんですか？」

そう。こんなにも親ばかな親父が何故俺の幼稚園の入園式に来れなかったのかというと、『更識』としての仕事があつたからだ。詳しくは知らないが相当大きな捕物であるらしく二、三日は家に帰って来れないと言っていた筈なのだが。

つまり、我が母が一体何を言いたいのかということ。

「……何で此処に居るんですか。タ テ ナ シ サン？」

いつの間にか地面に正座させられていた親父の身体はガタガタと震えていた。

これが更識の十六代目当主の姿とは到底思えない。完全に尻に敷かれてるよ親父。

「ぬ……」

「ぬ？」

「ぬけてきちやった」

テヘッと可愛らしく（実際はおっさんがやっているので全く可愛くはないが）舌を出してコツンと頭を叩く親父。

その後母さんからの連絡を受けた部下が親父を連れ戻しに来たの

は言っまでもない。

「あ、そうだ形無」

「なに？」

思い出した、とでも言うように手を叩いて母さんは。

「形無。あなたお兄ちゃんになるのよ」

「……ゑ？」

とんでもない爆弾を投下しやがった。

更識形無、五歳。

どうやら兄貴になるみたいです。

### #3 お兄ちゃんになるのはその時点でフラグ（後書き）

というわけで主人公千冬と同じクラス＆amp;・兄貴になる。  
もちろん妹で生まれてくるのは後の生徒会長ですよ。

長ったらしい自己紹介をしたという園児もできますww

#### #4 原作キャラとの絡みはその時点でフラグ（前書き）

ユニークがあつという間に2000を超えた……。

そしてお気に入り100件突破ありがとございます!!

#### #4 原作キャラとの絡みはその時点でフラグ

前回のあらすじ

我が母がとんでもない爆弾を投下しました。

母さんの爆弾発言から一夜明け、今日から幼稚園児としての生活が始まる。前世を計算に入れば幼稚園に通うのはこれが二回目になるわけなのだが、転生したからか原作キャラと遭遇したからなのか既視感みたいなものはなく、寧ろ新鮮な気持ちで俺は幼稚園の門をくぐった。

基本的には送迎バスが毎朝出ているのだが、あの親バカ（親父）のせいで俺は母さんと二人で通園することに。親バカもここまでくると尊敬に値するよほんと。

一体何の危険性が通園バスにあるってんだ。

「おはようございます」

「おはよう更識くん」

幼稚園の門をくぐり『ばら組』と書かれたプレートの教室へ向かうと、入口には黄色いエプロン姿のやかやが立っていた。

「早いね更識くん」

「俺母さんと来たから」

「あら通園バスを使つてないの？」

「……うん」

まあ悪いことじゃないんだけど毎朝歩いて通園は園児の体力的にはキツイんだよ。

今日は初めての通常日程ということで最初クラスのみんなで外に出て遊ぶことになった。

やはり幼いと順応性が半端ではないらしくほぼ初対面だというのにすぐに打ち解けて遊びだした。

子供つてすごい。

みんなで鬼ごっこをしたり砂場で城を作ったりと楽しく遊んでいるが、ただ二人。その輪に混ざっていない子たちがいた。

言うまでもない。

織斑千冬に篠ノ之束という原作キャラのお二人である。

千冬に関してはみんなに混じって遊びたいみたいだが、生まれもつてのその雰囲気のせいなのか中々馴染めず、束に至っては広場の日陰になっているところでノーパソをカタカタと叩いていた。

千冬はともかく束はなんかもう色々と規格外すぎるだろ。屋外でパソコンとかアウトドアなのかインドアなのかわからん。

はあ、と俺は小さく溜め息をつく。

前にも言つたが俺はあまり厄介事に巻き込まれるのは御免だ。た

だでさえあのクソジジイに勝手に殺され転生させられ、平穩などとは程遠い人生を送ることになってしまったのだ。

生まれてきて自分の名字が『更識』だったときはなんかもう色々  
と絶望したが、今は仕方ないと割りきって生活している。

別に更識家に不満があるわけじゃないし。

この幼稚園で原作キャラと遭遇したのは流石に予想外だったが、それはそれでいいかとも思う。関わらなければそれまでだからだ。

だが今の状況を見ると何だか切なくなってくる。

精神年齢が高いせいで千冬も束も手のかかる子供にしか見えない  
せいもあるのだろうが、なんかこう保護欲を掻き立てられるのだ。  
特に輪に入れずに涙目になっている千冬。

こんな子供をほっとけるほど、前世で俺は悪い教育をされた覚え  
はない。

という訳で。

俺は先ず織斑千冬を何とかするべく現在進行形で泣きそうになっ  
ている彼女のもとへと歩き出した。

うわ、間近で見たら涙腺が決壊寸前だよ。これ間一髪だよ。

「織斑……さん？」

どういうわけかさん付けで呼んでしまったが仕方ないんだ。やつ  
ぱり『ブリュンヒルデ』だよ、気安く呼び捨てできない雰囲気醸し



出してるよ。

「え……?」

いきなり見知らぬ少年に声を掛けられたせいで涙目だった千冬はキョトンだ。うん、可愛らしいです。

「えーと……」

「更識形無。おんなじクラスの」

どうやら名前が出てこなかったらしいので自己紹介をしておくことに。

「更識くん……」

「そ。一緒に遊ぼうよ」

「っ、うん!!」

言った途端にパアツと千冬の顔が晴れやかになった。やはりまだ子供、遊びたい時期なんだろう。

そうして笑顔になった千冬と俺は二人して近くの砂場に向かう。砂場には既に何人かの先客がいたが砂場自体が幼稚園児には余りあるサイズなので別に問題はない。

だが一応、子供社会の掟に従って。

「ねえ、ここ使っていい?」

と如何にも子供っぽく先客である園児に尋ねた。子供は純粹であるが故に残酷だ。一度嫌われてしまえばクラス内からの孤立は必至。

ここは平和的に行かねば。

「いいよー」

幸いにも先客の園児は友好的で、すぐに了承をくれた。それどころか『一緒にお城つくろうよ』と鶴の一声によって、俺と千冬はその園児たちの集団に混ざることが出来たのだ。

いやはや子供っぽくてすごい。一度仲良くなればすぐに打ち解けてしまふのだ。

大人にもこういうスキルが必要だよ、全く。

さて、千冬が無事に輪の中に入ることが出来たところでもう一人の問題児のところへ行きますか。

俺は砂場を一時離れ、大きな木の下でパソコンを膝に抱えている束のもとに向かった。

あ、気付いた。

……案の定、めっちゃめっちゃ嫌そうな表情かおしていらっしやる。

「よう」

「……（カタカタ）」

え、shika to?

「なあ」

「……（カタカタカタ）」

やばい、この子まじで俺のこと眼中どころか存在すらないことにされてるよ。

「篠ノ之」

こっちはさん付けしなくても呼ぶことが出来た。呼ばれた本人は本当に不愉快そう顔をしているが。

「……気安く私の名前を呼ばないで近付かないで話し掛けしないで」

……やっと反応してくれたと思ったらなにこの罵倒。どっかの標語みたいにきれいに罵倒されたのはこれまでの人生で初めてだ。

言って再びパソコンを叩き出した束は私に構うなオーラを全開にしているが、生憎そんなぐらいで引き下がるほど俺はチキンハートではない。

「どれどれ」

「っ!!」

束の所持しているノーマルの画面を覗き込む。液晶に映っていたのはやはり幼稚園児には到底理解出来ないような難解な数式やら理論やらで、何をしているのか知らないがこれがISに繋がるんだろ

うなとは何となく分かった。

「勝手に見ないで」

「お前難しい数式やってんなあ」

「！！……解るの？」

「まあ多少はな」

言っていなかったが前世の俺は現役バリバリの大学生だ。詳しく言えば工学部。数式や工学には少なからずの自信がある。

とは言っても、今パソコンに表示されていることの半分しか理解は出来ないが。

ほんとどんな頭脳してんだこの天才は。まあ一人でISの基礎理論やら開発やらをやってしまう程の人物なんだから俺みたいな凡人が敵うわけがないというのは分かってるけどさ。流石に幼稚園児に負けてるといふ現実を突きつけられると凹むわ。

「……、頭いいの？」

「篠ノ之には負けるけどな」

どうやら束は少しだけだが話をする気になったらしい。

「じゃあ、これどう思う？」

言っただ束はおずおずとパソコンの画面を見せてきた。ふむ、これって何かの設計図か？……いやいや、これどう考えてもISの設

計図じゃねーか。下の方にコアがどうか書いてあるし。ほんとに五歳児かこいつ。俺みたいに転生者ですとかいうオチじゃないよな？だがまあやはり根本的には幼稚園児だ。幾つか欠陥のようなものを見つけることが出来た。

「この三行目の項目とその下、あとここも。理論としちゃあ間違っちゃいないが現実的じゃないな。それだと燃費が悪すぎる」

「……ほんとに頭良いね。束さんもそう思ってたところなんだよ」

いや俺大学生ですから。なんてことを言うわけにもいかないのです。その場は愛想笑いで誤魔化すことにした。ちよつと喋り過ぎたかな。こいつ頭いいからもしかしたら俺の正体バレるかもしれん。

「……名前は？」

「は？」

「名前だよ君の。君、他の奴とは何か違うみたいだし名前くらいは覚えてあげてもいいよ」

「……そりゃどーも。更識形無だ。よろしくな」

「更識形無。私は篠ノ之束だよ」

俺が頭が良いというのが好印象だったのかは知らんが、無視されるということはなくなっただけだ。

結局のところ、こいつは自分のレベルに付いて来ることのできる話相手が欲しかったんじゃないだろうか。もしそうだとしたら俺はお角違いだなあ……。既についてくのがいっぱいいっぱいだったの

にこれから束は天才、いや天災と称されるほどの人間になっていくんだ。まず間違いなく俺なんかじゃついていけない。

はあ、またなんかいらんフラグを建ててしまった気がする。

まあ今回は自分で動いた結果だから文句を垂れたりはいしないが、それでもなんだかあ。

せめて中学生までは平穩に過ごしたいとか言ってた昨日の俺をぶん殴ってやりたい気分だ。

よお。俺だよ俺。

え？ 知らない？

しょうがねえなあ教えてやるよ。

俺の名前は織村一華。おりむら いちか

所謂転生者ってやつだ。なんでこの俺がこんな小説の世界に転生したのかってーと、神とか言う奴の話によれば神様同士で双六やってて止まったマスに人間を一人転生させるって書いてあったかららしい。その話を聞いた時俺はすごぶる興奮したね。だって転生かって明らかに主人公フラグだろ？ 俺はそれに選ばれたって訳だ！

つまり俺は選ばれた人種、これが興奮せずにいられるかってんだ。そしてテンプレ通りに神から能力も貰ってこの『IS』の世界に転生してきたんだ。

そしてこつちの世界に生まれ、すくすくと成長した俺はつい昨日幼稚園の入園式を行なった。そこで運命の出会いを果たすわけだよ。そう、この小説のメインキャラであり俺の嫁候補、織斑千冬と篠ノ之束だ！！

でもそこで俺はある間違いに気付いた。名前だよ。

俺てつきり転生したら主人公の一夏になってると思ってたんだ。いや何か字に違和感あるかなとは思ってたがまさか違ってたとは思いませんかった。

だがここで頭の良い俺は思い至った。もしも千冬と家族だったら、合法的に結婚ができないじゃないかと。

流石は神様だ。このことまで計算に入れて俺をこうやって転生させ、幼稚園で運命の出会いを果たしたわけだな。

というわけで先ずは彼女たちと親交を深めねば。そこで俺は自己紹介で彼女たちに自分のことをとても詳しく教えてあげた。実家がどれだけ金持ちで俺がどれだけ頭が良くて……（その他もろもろ時間にしてざっと十分）。これで彼女たちは俺に興味を持ってこのあと俺のところに来て来るだろうと確信していた。ついでに他の女子たちも。

ところがどうだ。他の女の子たちはどこの馬の骨とも解らない男のもとへと駆け寄り、嫁候補の二人は俺に何の挨拶もなくそそくさと帰ってしまった。

翌日に当たる今日にしてもそうだ。

クラスみんなで遊ぶことになったため俺は真っ先に二人を誘おうとした。しかし、二人はそれぞれ一人きりで過ごしており、それを邪魔するのは野暮だろうという気遣いによって俺は大人しく彼女たちを見守っていた。

ところが、ところだ。

現れたあの馬野郎（おそらく形無のことです）は彼女たちの思いなど無視してズカズカと踏み込んでいきやがった！！嫌がっている千冬を無理やり砂場に連れていき、遊びたくないのにも関わらず他の子供たちと城を作らせた。

束だつて一人がよかったのに、強引に会話しようとしてパソコンを奪い取ってやがった。

許せん。許せんぞ！！

俺の嫁候補たちに手を出しやがって。いずれ痛い目に合わせてやる。



「ん!？」

何やら得体の知れない悪寒が全身を駆け巡った。なんだ、誰かからの殺意を感じるんだが。

幼稚園から帰宅した俺は現在、更識家の中で一番広い広間に集まっていた。ちなみに親父に母さん、祖父に祖母、更識の部下総勢五十名が一同に介している。

こんな更識家が勢揃いして一体何をしているのかというと。

「では多数決を取る!!」

一際大きな声で親父が何やら半紙程度の紙を両手に持って叫ぶ。

「『海為』<sup>うみなし</sup>と『雪洞』<sup>ほんぼり</sup>と『姫無』<sup>ひめなし</sup>、どれがいい!!」

生まれてくるのが娘、俺から言えば妹であるということが検査で分かったため、どんな名前にするのかを話し合っていたのである。それだけのためにこんな大袈裟にやるのかと思うかもしれないが、母から聞いたところによると今回はこれでも規模も名前の案も少ないらしい。

俺のときは名前の案は二百を超え、最終的にも十九の候補が残っていたというのだから驚きだ。なかには『玉無』<sup>たまなし</sup>なんて案まであったらしい。

いやそれ男の俺につけたらダメだろう。

途中で眠くなった俺は母とともに退席したが、白熱する名前会議は、結局朝まで続いたらしい。



#### #4 原作キャラとの絡みはその時点でフラグ（後書き）

ということと二人目のちよつと残念な転生者が登場。  
妹の名前はもう少しあとで発表される予定。

## #5 お揃いの小物はその時点でフラグ（前書き）

日間ランキング……2位……だと？  
驚きを超えて恐怖してます（汗）

あとご指摘いただいたんですが主人公と千冬の年齢と楯無の年齢に矛盾が生じてしまったのは完全にミスです。すみませんでした。

## #5 お揃いの小物はその時点でフラグ

前回のあらすじ

原作キャラたちと絡んだら、得体の知れない悪寒が走りました。

一ヶ月後。

え？ 飛んだろって？

そこはあれだ。気にしたら負けってやつだ。

あの日以降、幼稚園では何かとあの原作キャラ二人と過ごすようになった。

俺が驚いたのは、原作では小学校から仲良くなる筈の千冬と束が僅か一週間で打ち解け、既に親友というレベルにまで親しくなっていたことだ。彼女たちに俺を足した三人は所謂『いつメン』というものになったらしく、つい先日その証として三人でお揃いのミサングを付けることになった。

あ、そのミサングは俺の母さんの手作りだ。最初は千冬が作ると豪語していたんだが、僅か一日で挫折したため母さんにその役を頼んだというわけだ。

天然というただ一点を除けば容姿、性格、技術もろもろパーフェクトな母さんは、たった数十分で三つのミサングを作り上げてしまった。

それを知った千冬が頂垂れていたがそこは置いておいて、三人お

揃いの赤いミサングを俺は右手に、千冬と束は左手に付けてそれから毎日幼稚園に通っている。

さて。

今日は日曜日。

つまり幼稚園は休みなわけだ。時刻はまだ早朝だが、この時間帯になれば更識家ではそれぞれの一日が始まる。親父を始めとする男衆は朝の鍛錬を始め、母さんたち女衆は全員分の朝食を準備するために大忙しだ。

じゃあ、俺は？

俺はまだ幼稚園児だ。朝食の手伝いくらい出来るのかもしれないが母さんたちのあの手際のよさを見ると邪魔にしかないんじゃないかと思う。

父さんたちの鍛錬に参加しようとした時もあったが、メニューの最初にあつた町内一周ランニングを見た瞬間に心が折れた。前世で別段体力に自信があつたわけでもない俺にとってあのメニューに付いていくのは不可能だ。

だって親父の部下たちメニュー終えたら所構わず大の字で寝てるんだぞ？

朝食食べる元気すら失ってんだぞ？

ということであることが全くとっていいほどない日曜日の朝。俺が一体何をしているのかというと。

「うーん、どうやって能力使うんだ？」

あの理不尽な神様から貰った一方通行の能力、『ベクトル操作』をマスターすべく頭を悩ませていた。

いや能力を使うのに演算ってのが必要なことは理解できるんだよ。でもさ、まず演算で何するんだ。

この能力を貰った時点で（おそらく）一方通行のこの能力が使える演算処理能力は俺の脳にある筈なんだが、如何せん発動させるまでが解らない。

「何を考えればいいんだ……」

頭を使うイメージで真似てみても、一向に使える気配はない。

結局、この朝は能力を使用することは出来ず、まずは理論立てをしつかりしないといけないことを学んだ。

何だよテンプレ的に能力貰ったんだから簡単に能力使えると思っただけだよ！

最近、わたしは幼稚園に行くのがとても楽しい。入園したばかりのころはみんなと一緒に遊べないことが悲しかったけれど、そんな私を助けるみたいに一人の男の子が話しかけてきてくれた。

男の子の名前は更識形無。

その日からよく形無と同じくして仲良くなった束の三人で遊ぶようになった。最初は束は嫌がっていたような素振りも見せていたけど、今じゃ三人でお揃いのミサンガを付けるくらいに仲良しだ。

私、織斑千冬は形無たちと友達になれて本当によかった。

だからこそ、今日が日曜日であることが嫌だ。普通の子なら休みだとはしゃぐんだろうけど、私にとって日曜日は幼稚園に行けない退屈な日なんだ。

自分の腕に付けられた赤いミサンガを見ながら、私は思う。

「はやく明日にならないかなあ……」

などと思っていると。

「ちーちゃんー!!」

家の外から私を呼ぶなんとも聞き覚えのある声が聞こえてきた。誰だと思つまでもない、最近仲良くなった、あの女の子だ。

私は二階の部屋の窓をガラッと開いて。



「なんだ束ー！！」

「遊ぼうよー！！」

「おまつ、まだ朝の七時だぞー！」

「束さんに時間という概念は通用しないんだよー！！」

「わたしをお前と一緒にするなっ！！」

全く、朝の七時から遊ぶなんてどれだけ元気なんだ。などと思いつつもわたしの身体は部屋を出て階段を降り、すっかり外へと向かっている。

そして伸ばした手は家の扉を開き。

「まあとりあえず、入って」

我が友達を家へと招き入れた。  
わたしにとって退屈でしかなかった日曜日が、一瞬で騒がしくも楽しいものへと変わった。

「あ、そうだ」

玄関に上がった束が思いついたように声を上げる。

「どうした？」

「えへへー、あのね」

その内容を聞いたわたしは、すぐに靴を履いて外に出た。

「……で？」

俺は今驚きを通り越して半ば呆れていた。時刻はまだ七時半。日曜日の七時半といえば、俺みたいな特殊な幼稚園児でなければ間違はなくまだ夢の中の時間帯だ。

しかし。

「おはよう形無」

「おはようかーくんっ!!」

……何故、この二人の幼稚園児は俺の家の門の前に立ってるんだ？

そもそも俺はこの二人に実家の場所を教えた記憶などない。何れは教えるつもりだったけど、一ヶ月やそこらで実家まで行くことなど

なかったからだ。

「何しに来たんだお前ら」

「遊ぼうよかーくん!!」

「今日は日曜日だぞ？それにまだこんな時間だし」

「束さんのにはかーくん家を探検したいな!!」

「うんまず人の話を聞こうか」

最初の頃の『私に近寄るなオーラ』は俺に対しては全くと言っていいほど無くなったけれど、そうしたら次はこんな風に向こうから絡んでくるようになった。

いや自分が招いた結果なのは分かってるよ？ 分かってるけどこ  
うも対応が違つとビックリするでしょうが。

「ごめん。迷惑だったか……？」

「……いや、そういうわけじゃないけど」

頼むからそんな潤んだ瞳でこっちを見ないで。  
罪悪感に磨り潰されそうになるから。

俺は幼稚園児らしからぬ溜め息をついて、

「ちょっと待ってて。母さんに聞いてみる」

そう言つて座敷のほうへと走っていく。

いや、あの天然母のことだダメと言うわけないのは判りきつていたが、形式上勝手にというのもマズイだろう。

俺は朝食の準備を終えた母さんのところに言つて友達が二人来たという旨を伝えた。

俺は『いいわよ遊んでらっしゃい』か『どんな子たちなの?』みたいな反応を予想していたんだが、流石は天然というか、我が母はそれを上回る発言をしゃがった。

「あら、なら一緒に朝食にしましょうか」

「……え?」

「形無朝食まだでしょう?」

「いやそうだけど……」

「大勢で食べたほうが楽しいじゃない」

「まあ……」

「呼んできなさい」

との事で二人を招き入れ、更識家の食卓につくことに。

千冬は見た目ヤクザみtainな更識家の男衆にビクビクしていたが、束は俺の隣でニコニコとかまぼこを頬張っていた。

朝食後は束がどうしてもというので俺の部屋に案内し、仕掛けよ

うとしていた小型カメラを見つけ出して壊し束を一喝。

どうやらこの家に辿り着いたのも束が俺に仕掛けたGPSのおかげだったらしい。

幼稚園児がオリジナルでそんなもん作んなよ。

その後も似たような流れを繰り返し、結果として幼稚園児は日曜日にも遊びたい盛りということを痛感する一日となった。

あと束の作る機器は危険。ほんとプライバシーとか丸裸にされるから。

## #5 お揃いの小物はその時点でフラグ（後書き）

この時既に呼び方は「千冬」、「束」。

彼女たちは「形無」、「かーくん」になっています。

そして次はさらに時間が飛ぶ予定（汗

## #6 神様の能力で悩むのはその時点でフラグ（前書き）

お気に入りにはあつという間に500件を突破しました。ありがとうございます。

あと幼稚園のころの席順が間違っていました。更識なので篠ノ之前にこなればいけませんでした。すいませんでした；

あとあとがきにアンケートみたいのあります。よろしければ意見聞かせてください。

## #6 神様の能力で悩むのはその時点でフラグ

前回のあらすじ

もう二度と束を俺の部屋にあげないと誓った。

突然ですが、小学生になりました。何故こんなにも時間をすっ飛ばしたのか、理由を言えば、特にこれといったこともなかったからだ。

あれから千冬や束とは完全に親友のような関係になり、今も手に付けている赤いミサंगाが何よりの証だ。

このミサंगाでの出来事と言えば、千冬のミサंगाが切れた時のことを思い出す。ミサंगाとは本来願い事をし、それが切れると願いが叶うという一種のおまじないみたいなものだ。だからミサंगाが切れたなら願いが叶うと喜ぶ場面なんだが。

千冬の場合、何故かこれまでにないくらい大泣きしてしまった。

理由を聞けば、自分のミサंगाだけ切れて友達ではなくなってしまうと勘違いしていたらしい。確かに普通なら不吉だとか思うかもしれないが、これミサंगाだぞ？

未来の『ブリュンヒルデ』もやはり今は幼稚園児だったことか。ちなみにミサंगाはすぐに母さんが新しいのを用意してくれたので千冬の泣き顔はすぐに晴れやかなものに変わった。



あ、これといった出来事あった。

「あーう」

母さんの腕に抱かれてこちらにジッと視線を向けてくる赤ん坊。

我が妹、更識姫無。

ヤクザみたいな更識家の部下も黙る一歳児である。

最近言葉のようなものが聞こえ始めた。

彼女の名前は親父の部下による多数決の結果、『ひめなし姫無』に決定した。親バカであるあの親父はどうしても女の子っぽい姫という字を入れたかったみたいだ。

それに対してまたバカな部下が今度は『むねなし棟無』なんて名前を候補に上げたもんだからその時の親父のキレっぷりはそれはもう凄かったらしい。

……俺のとき『玉無』とかふざけた名前出した奴の仲間だろそいつ。

「まーう」

いつの間にか母さんの腕から脱出を果たした姫無がハイハイで俺

の目の前までやってきていた。流石にまだ立つて歩くことはできないが、ハイハイが出来るようになってからは姫無の行動範囲が一気に広がり、忽然と姿を消すこともしばしば。

そんな時役に立つのが。

……本当に忌々しいことに役に立つのがあの束が制作したGPSだ。

これを姫無の服につけておくことでどこにいても常に把握することができる。

流石にこんなものを使うのはこの時期だけだが、やはりあまり気は進まない。

うん、やっぱりプライバシーって大事だよ。

歩けるようになったらGPS付けるのは止めてあげよう。……あれ。そしたら居なくなったら見つけようがないな。その時はその時だな。

「よつと」

俺は近付いてきた姫無の身体を抱き抱えてやる。小学生の身体で赤ん坊を抱っこするのは楽じゃないが。

「きゃはははっ」

こんな満面の笑みを向けられたらそんな小さなことはどうでもよくなってくる。

うん、妹万歳。

こんな可愛い妹は存在しているだけで正義に違いない。そうなのだ、異論を唱える奴には『玉無』の案を出した部下と同じ運命を辿ってもらう。

ああ可愛いなあ。

こんな可愛い子が成長して『人たらし』になるなんて全く想像が出来ない。いや、想像したくないがどんな妹であれ俺は妹を（家族として）愛します。

姫無に近づく奴がもしも現れたら更識の全勢力を持って排除するつもりだ。

……いやまず親父が黙ってないだろうな。あの親バカの代名詞のような人間だ。下手したら街が消し飛ぶかもしれん。いや冗談抜きで。

「……………」

姫無を再び母さんに預けた俺は自室に戻り座禅のようなスタイルで目を閉じている。

何をしているのか。

超能力者を使うための特訓に決まってるじゃないか。

幼稚園時代に初めて演算をしようと思っても全く出来なかったのはまだ記憶に新しい。あれから一年以上経ったのだから、多少なりとも進歩があつていいはず。

……………なんだが。

「……………何か起きる気配はなし、か……………」

あれから一ミリも前進していなかったりする。いや、頑張っではいるんだよ。小学校に上がってからは殆ど毎日こうして集中して取り組んでいる。

だがまるで俺のやる気と反比例しているかのように一向に兆しは見えてこない。

……………俺、才能無いんじゃないかな……………。

なんてことまで最近思うようになってきてしまっていたんだが、

ここで俺はふと気付いた。

俺がまだちっちゃいからダメなんじゃね？

よくよく考えてみれば、俺はまだ学園都市第一位の超能力を使うための演算を行う脳の大きさに至っていないから能力が使えないんじゃないだろうか。

一方通行ってどう考えても小学生じゃないし。もしこれが正しいとしたら俺は中学生、最悪高校生くらいになれば神から貰ったこの能力を使えるようになるかもしれない。

……でもこれが正しいなら俺はそれまで超能力が使えないんだよなあ。

『ベクトル操作』はあの時咄嗟に出たものだったが、いざとなつて考えてみるとこれなんてチート状態だと気付いた。やがて束が開発するだろう『IS』。女性しか動かせないと言うのだから俺にそんなものを動かせる才能はないだろう。動かせるのは主人公である一夏くらいだ。

だとするなら、もしも。極力避けたいが万が一ISと戦わなくてはいけないような場面になった時、この能力が使えなければバッドエンドまっしぐらだ。

つまり今現在俺には死亡フラグが立っていることになる。まるでどっかの未来のことが分かる日記にバッドエンド表示が出た時みた

いな。神様がくれたんだから使えない、なんてことはない（と信じたい）だろうが、使えなかったら……よそう、なんかほんとに現実になりそうで想像したくもない。

「はあ……」

まあでも、と俺は思考を切り替える。

「そこまで焦る必要もないのか……？ 束がISを開発するのつてもっと先の話だし」

それにこちらにばかり気を取られるわけにもいかないのだ。何故なら。

「形無。いるか？」

「いるよ」

「直に時間だ。準備しておけよ」

「はい」

襖の向こうから親父の声が聞こえてきたが、気を取られるわけにはいかないといった理由がこれだ。

小学校に上がった年から、更識家としての対暗部用の教育が始められたのだ。

対暗部というくらいなのだから、俺はてつきり情報戦みたいなのを勝手に想像してたんだが、実際はそんな生易しいもんじゃなかつ

た。

先ずは体力があつてこそ、ということでした。小学校低学年の子供がいきなりフルマラソンは無理だよ親父……。

それが終わつてからは更識家が発祥だという柔術、『更識流』の特訓だ。

柔術とは日本古来の徒手、あるいは短い武器による攻防の技法を中心とした武術だが、『更識流』はどちらかと言えばその中でも合気道に近い。相手を殺傷せずに捕らえたり、身を守ったりすることを第一とする柔術に加え、関節技や投げを取り入れているのだ。

その理由としては女でも体得するためには相手の力を利用することが必須、という考えと対暗部ということもあり如何に迅速に任務を遂行するかを突き詰めた結果、相手に情報を吐かせることが最速かつ的確という結論にたどり着いたかららしい。

まあ、そんな風に相手の戦意を喪失させて口を割らせるには高レベルの話術が必要になるんだけどな。

あ、やべ。時間過ぎてた。

俺は急いで部屋を出て屋敷の隣に用意されている道場に向かった。

「遅いぞ形無。二分三八秒の遅刻だ」

「いや父さん時計もってないじゃん」

道場内にも時計はない。

「腹時計だ」

「なんてアナログな」

「いいから。ほら昨日の続きからやるぞ」

「二の型からだっけ？」

「復習のために一の型からだ」

言われて俺は軽く呼吸を整えて、ゆっくりと瞼を下ろす。

小学生の俺にはまだまだ腕力なんてついちやいないが、この一の型は相手の力を利用するものだ。多分瞼を開いたら親父の右ストレートが飛んできてるんだろっなあ……。

覚悟を決めて、俺は目を見開いた。

「更識流一の型

！！」

ふんふんふんふん。



私は上機嫌でノートパソコンのキーを叩いていた。

何故私、篠ノ之束がここまで上機嫌なのか。それは今年、かーくと同じクラスになれたからだ。去年のクラス発表で私だけが違うクラスになったときは本気で学校中の精密機器に凶悪なウィルスをぶち込んでやろうと考えたが（それは形無によつて阻止されました）、今年は一緒のクラスになれたんだから過去のことはまあ水に流してやろうではないか。

へっへー。今度はちーちゃんがひとりぼっちだあ。

あ、でもちーちゃん寂しがってないかなあ。来年は三人一緒になれるようにしておこつと。

「さてと」

私はいつの間にか止まっていた自分の指を再び動かし、ウィンドウに表示された設計図に目を向ける。

「ふむふむ。これじゃまだ完成には程遠いなあ」

かーくんにも意見もらわなくちゃ。そう思うと自然と口元が緩む。かーくんは他の人間と違って頭が良い。それは私に付いてこられる時点で明らかだ。同じレベルで話ができるのがこんなに楽しいなんて、私は知らなかった。

できることなら、二人でこれを完成させてちーちゃんに使ってもらいたいなあ。

「よし、東さん頑張っちゃうぞー!!」



## #6 神様の能力で悩むのはその時点でフラグ（後書き）

ヒロインなのですが、千冬、束の他に誰がいいのでしょうか。

- ・やまや
- ・一夏ハーレム要員（その中の誰か）
- ・いや、もういらんでしょ
- ・その他

## #7 原作と違うのはその時点でフラグ（前書き）

アンケートにご協力してくださった読者様、ありがとうございます。

その中でも多数あったのが、

- ・ 姫無、簪
- ・ のほほん
- ・ ナターシャ、クラリッサ
- ・ もついないよ

でした。

まだまだアンケートは受け付けているのでよろしくお願いします

！！

## #7 原作と違うのはその時点でフラグ

前回のあらすじ

妹は正義！！

異論は認めない。

さて。俺こと更識形無は小学校二年生に進級した。これは前回も話したんだが、去年は俺と千冬が同じクラスで束が大暴走し、（本気で）学校が使い物にならなくなるところだった。

なんだパソコンのデータを完膚なきまでに破壊し尽くすウィルスって。しかも無差別。

そんなもんを何処にでもあるような小学校でばら蒔かれてはリアル警察沙汰だ。

……いや、束のことだから足がつかないように何重にも細工してるんだろうな。

取り敢えずそんなことになってはマズイので束の頭にチョップをかまし、そのウィルスを破壊させて一先ずは解決となった。

いや本気であればダメだろ。ウィルスに侵されたパソコンは完全に束の支配下に置かれ暴走し、二度と使い物にならないどころか破壊される前にそのデータは例外なく流出するらしい。

よかったそんなことにならなくて。

今年は束と同じクラスになったことで、あんなことは起こらない  
なと安心していた。

……安心、していたんだ。

しかし俺の安堵はクラス分けの張り紙を見た千冬の反応を見た瞬  
間に消し飛ぶこととなった。

『……だ』

『へ？』

『形無と違うクラスなんて、いやだ！！』

とんでもない駄々をこね始めた。

『いや千冬。小学校なんだからこついうのは当たり前……』

『いやなんだ！！』

うん、人の話を聞かないパターンのやつですねわかります。

がつくりと頂垂れている千冬の隣では、同じクラスになった束が  
ピョンピョン跳び跳ねていたが即座に千冬に蹴り飛ばされた。

うつむ。まさか千冬まで束みたいな駄々をこねるとは思っていなかった。

いや束の無差別テロみたいなのと比べれば全く持って可愛いレベルなんだが。

だけどころなると中々千冬は頑固なんだよなあ……。ミサンガが千切れたときに束が付いていたミサンガを寄越せと言い出したときのことを思い出すよ。

束からしたら『何その理不尽』てきな感じだったんだろうが千冬は必死だったからなあ。結局大泣きしてしまったが。

あの時は母さんが直ぐ様新しいミサンガを作ってくれたおかげで事なきを得たが、今回ばかりはどうしようもない。

『うつ……』

ガックリと膝を折って踞る千冬。やばい、泣き出しそうな気がする。

『……はあ』

俺は小さく溜め息をついて。

『千冬』

『形無い……』

あ、目尻に涙が溜まっている。

『別に授業を別々に受けるだけだろ。登下校だって一緒に出来るし、授業が終われば一緒に遊べる』

『そうだよーちゃん。私たち三人は『いつメン』なんだからっ』

『っ、束にもこの気持ちわかるだろう!?!』

『ふっふー。束さんはあの地獄のような一年をこれで乗りきったんだよ』

これ? 一体何のことだと思っていると、束はポケットから一枚の紙切れを取り出した。あれは、写真?

『束さん秘蔵のかーくん湯上がりプロマ……』  
『なにしてんだお前』

即座に没収。

おかしいな更識家に仕掛けられてた小型カメラや盗聴気は俺が全部処分した筈なんだが。

『ったく……、あれ?』

気付けば没収した筈の俺の写真が手から無くなっていた。  
あ、犯人はアイツか。

『千冬……』

『こ、これがあれば一年耐えられる!!--』

『んなもん無くて大丈夫だろうが』



『いや、絶対必要だ!!』

『返せ』

そして直ぐに焼却処分だ。ついでにもう一度屋敷内のカメラ類を洗いざらい探し出して壊しとかないとな。

『頼む!』

『……………』

そんな泣きそうな顔をしないでくれ。

俺が知ってる千冬はこんなすぐ泣くような女じゃなかった筈なんだが、これから変わっていくんだろうか。

『はあ。分かったよ……………』

これで千冬がいいと言ったから、ここは俺が退かないといけな  
いみたいだ。

でもいつかあの写真は回収するけどな。

ということがあった四月当初から早二ヶ月。この頃になるとクラス内に友達もできるようになり、休み時間にもなるとドッジボールやサッカーをしにグラウンドへと駆け出していく。

元気だなあ、なんて思う俺はもう思考がおじいちゃん化してしまっているのかもしれないが、実際否定できない俺がいる。

今は給食が終わったあとの昼休み。元気なクラスのみんなは拳つてグラウンドへと駆け出し、それ以外の生徒は図書室へ行ったり教室で一息ついたりと思い思いの時間を過ごしている。

そんな中、俺はと言うと。

「ねえねえかーくん。ここんとこのパーツって変えた方がいいかな？」

「そんなこと俺に聞かれたも解んねえって」

「嘘ばかり。ねえどう思う？」

「……変えると他のパーツと喧嘩して駆動率が下がるからオススメはしない」

「やっぱりねー。束さんもおんなじこと考えてたよ」

……なら俺に聞かなくてもよかったんじゃない？ という疑問は抱いても口には出さない。こんな風なやり取りは一度や二度ではないから、いい加減慣れてきてしまっている。

束は俺の意見を聞いて満足そうに頷いた後、再びパソコンの画面に視線を戻す。

最早言うまでもないかもしれないが、現在進行形で束が完成させようとしているのは『IS』だ。しかも既に基盤は半分ほどが完成し、理論な構造も纏まり始めている。

俺の知識の中では確か完成はもっと後のはずだったんだが、このスピードのまま順調に製作が進行すれば中学生あたりで完成してしまいそうだ。

これは俺にとってはとてつもなく都合が悪い。

なにせ俺が神様からもらった一方通行のベクトル操作はおそらくだが脳が成長しないと使えない。最低でも中学生くらいにまでは成長しなくては。こんな状態で束がISを完成させ、巻き込まれるようなことになったら間違いなく俺は死ぬ。

いやまじで。

そんな死亡フラグは御免な俺だから、一応毎日能力を発動させようと意識を集中させてはいるものの、やはり一向に成果は見られない。

もうなんかバッドエンドしか見えてこない。いつそ未来のことが分かる日記とかあればそれも回避できるのになあ。

と、そんなバッドな俺に、この後更にバッドなことが発生してしまっ。

昼休みも終わったため次の授業の準備をしているときのことだ。

教室に入ってきた担任の先生、駒田真子こまだ まこが何やら大量の書類を教

卓の上に置いて一言。

「えー、来週の授業参観についてですが……」

……ん？

## #7 原作と違うのはその時点でフラグ（後書き）

そんなわけで更識家の（いろんな意味で）すごい両親が小学校襲来（笑）

## #8 親バカな父はその時点でフラグ（前書き）

アンケート途中経過。

ナターシャ、クラリツサ、のほほんが強い……！！  
特にクラリツサ。なんでこんな人気なんだ……。

アンケート11月15日まで受け付けてます。

## #8 親バカな父はその時点でフラグ

前回のあらすじ

最悪の行事、襲来。

担任の駒田真子、通称こまこの言った言葉が一瞬理解出来なかった俺は、もう一度よく脳内で彼女が言った言葉を反芻する。

『来週の授業参観についてですが……』

授業参観。

ジュギョウサンカン。

それはつまりアレか。

我が子が一体どんな授業をどんな風にどんな子たちと受けているのかという学校生活の実態を知るために設けられた特別授業。

教室の後ろに親が並んで授業を観覧する、あれ。

ということは当然ながら、二人ともとは限らないが親が来るということになるわけだ。

……呼びたくねえええええッ！！

断言してもいいが、もしも俺の両親が来た場合、絶対に碌なことにならない。

親父が来たらあのウザイ程の親バカっぷりを所構わず遺憾無く発揮するだろうし、母さんはあの天然っぷりで教室を（別の意味で）支配下に置くだろう。二人揃っての襲来なんて論外だ。

これはマズイ。

というかこの事を親父たちは知っているんだろうか。知らなかったのなら九死に一生を得た思いだが、既に知っていたなら俺はもう授業参観当日休む。

頼むから授業参観があることを知らないでいてくれ。

そんなことを切実に思いながら、下校を終えて更識家の門をくぐると。

「おう形無！ 来週授業参観があるんだろうっ！？ 父さん仕事なんかすっぱかして行くからな！！」



……知っていやがった。

親父よ、仕事はすっぱかしちやいかなだろう。せめて片付けてと  
か言えよ。

残念なことに、本当に残念なことに既に授業参観があるというこ  
とを知っていたので俺はもう諦めるしかない。

……なんて言うと思ったか!!

俺は諦めない。平凡な小学校生活を維持するためにも、ここで母  
さんや、まして親父を学校に来させるわけにはいかない。  
どうにかして親父に用事を作らせないと……。

あ。

「父さん」

「ん？ どうした形無」

庭で何やら筋トレに励む親父に向けて、俺は口を開く。

「姫無がその日、遊園地かどこかに行きたいって言ってたけど」

一歳児がこんなこと言う訳もないし普通の人間なら信じる訳もな  
いんだが、俺の親父は折り紙つきの親ばかだ。  
それはつまりどうということかというところ。

「んなにいッ!？」

こついうことだ。

ほんと、親父が馬鹿でよかった。

俺はとりあえず親父が学校に来ることはなくなったと思い安堵している。

「こつしちゃんおれんツ！！ 今からすぐに遊園地に行こつツ！！」

「…………へ？」

今なんておっしゃいましたかこのバカは。

「何してる形無。すぐ姫無を呼んでこい！！」

「いやいやちよつと待って。そんないきなり…………」

「母さんは無理だろう。お腹の子のこともあるし」

いやそういうことじゃねえよ。

…………ていうか、え？

「お腹…………？」

「ん？ なんだ気づいてなかったのか、母さん妊娠してるんだぞ？」

「そういうことは早く言えよクソ親父ツ！！」

いやマジで知らなかったよ。时期的にはそろそろかなあとは思ってたけどまさかこんな形で知らされるとは夢にも思わなかった。

となるとまたあの更識家勢ぞろいでの名前会議が開かれるのか。今回は変な案出ないといいけど、出るんだろうなあ…………。

「早くしろ形無。日が暮れてしまっ」

「本気で今から遊園地行く気なのかよ……」

「姫無が行きたいと言ってるんだろ？ なら行くしかないじゃないかー！」

（もうダメだこの親ばかは……）

結局、午後三時から俺と親父、姫無は近くにあるテーマパークへと向かうことに。

こんなことになるならあんな事言わなきゃよかった。

ああ、神よ。何故俺はこんなにも慈悲深いのだろう。

本来なら八つ裂きにされるべきあの馬野郎（形無のことです）と同じクラスになったこともそうだが、束に執拗に付き纏う馬野郎をまだ一度もタコ殴りにしていないのだから。

俺も我慢の限界なんだが、必死に我慢している束を見ていると彼女の意志を尊重しなければ、と思うのだ。

だがもしもこの俺、幼稚園来からの幼馴染であるこの織村一華に彼女が助けを求めてくるのなら、俺は迷わずその手を取ってアイツをボコボコにするつもりだ。

俺が負けることは有り得ない。

何故なら俺は神に選ばれた存在。神が見方についているんだ。負ける道理が見つからないだろう。

それに神より賜った能力だってある。これを使えばただの一般人である凡人なんて俺の敵じゃねえ。

そう、この俺の超能力、『ダークマター未元物質』は最強だ！！  
俺はこのチカラで、この世界の頂点に立つ！！

そして、ついに来る授業参観当日。

俺にとってはまさに地獄と言えるこの日は、俺の心とは正反対に

快晴だ。

結局両親二人とも授業参観を知っており、そのためにわざわざ仕事を前倒しにしていたり楽しみにしていた両親に来るなどと言える筈もなく、何も言えないままこの日が来てしまった。

「なあなあ瑞穂。やっぱり男らしい感じのスーツのほうがいいかなあ!？」

「あらあら楯無さん。それはスーツじゃなくてツナギですよ」

「あ、いつけね(テヘツ)」

こんな光景を目の前で繰り広げられて拳を握り締めてしまう俺は間違っていないはずだ。

いやまじでもうアラサーのオッサンがテヘペロしても殺意しか湧いてこないからな。可愛さなんてマイナス値もいいところだ。姫無の満面の笑みでようやく相殺できるようなとんでもないものだから。

「いやあ瑞穂似合ってるよ」

「ありがとうございます」

いやいや母さん。確かに似合ってるけどもそんな真っ赤なドレス着て舞踏会にでも行く気ですかあなた。そんな恰好で行ったら間違いないく他の親父たちを落として帰ってくるよ。頼むからもうちょっと常識つてものを弁えてください。だいたい妊婦なんだろうが。大人し目の服選んでお願い。

「ん? どうした形無そんな浮かない顔して。あ、もしかして緊張してるのかあ?」

何を勘違いしたのか、いい笑顔で俺を見る親父。俺がこんな顔してる原因はあんたらが原因なんだぞ……。

「はぁ……、もおう学校行ってくる」

「おう。千冬ちゃんと束ちゃんたちと仲良くな」

本気で学校行きたくない。

授業参観の時間だけ保健室行こうかな。まあ、そんなことする度胸は俺にはないんだけどな。

こうなればもう腹を括るしかない。

「よし……、」

更識家の門を出て学校への道を歩きだした俺は決心した。

「絶対、授業参観中に後ろは振り向かない……!!」

こうして授業参観という名の生き地獄が待つ一日が幕を開けた。



## #8 親バカな父はその時点でフラゲ（後書き）

### 次回

最強（それはもういろんな意味の）な形無の両親、小学校襲来。

新世紀力タナシゲリオン

### 第九話

瞬間、心、折れて



## #9 平穩という言葉を使うのはその時点でフラゲ（前書き）

アンケート途中経過。

・ナターシャ	4票
・クラリツサ	4票
・姫無と簪	8票
・やまや	2票
・のほほん	2票
・一夏ハーレム4票（シャル1、ラウラ2）	
・いない	6票

見事に票が割れてます；

## #9 平穩という言葉を使うのはその時点でフラグ

前回のあらすじ

親バカが授業参観に来ることは子供にとって脅威以外の何物でもない。

ついにこの日、この時間がやって来てしまった。

いやまじで来てほしくないんだけど残念ながらあの両親は間違ったスタイル（前話参照）で来る気満々だったし。はぁ……、憂鬱だ。

「どうしたんだ形無。そをな腑抜けた溜め息をはいて」

「千冬か……」

教室に入って自分の机に突っ伏していたら既に登校していた千冬がこちらにやってきてそう言った。

「つかお前クラス違うのに毎朝うちのクラス来るよな。だったらあの写真いらないだろ。」

「いや、今日授業参観あるだろ……」

「なんだそんなことか。形無の両親はもちろん来るんだろっ?」

「……ああ」

「いいじゃないか。うちは仕事の都合で二人とも来れないんだ、羨ましいぞ」

「……出来ることなら代わってほしいよ」

「……？」

千冬は俺の両親のことは知っているが親父をなんかすごい鍛えてる人、母さんを何でも出来る完璧超人という認識でしかない。つまり知らないんだ。あの二人の本性と言うべきものを。

一体どうして親がこんなにも授業参観にこだわるのかが俺には理解できない。だって小学校の授業だぞ？ そんなの後ろで、しかも立って聞いて一体何が面白いつてんだ。子供が学校でどんな風に過ごしてるかなんて家庭で子供から聞いておけばいいじゃないか。

「おはようかーくんちーちゃん!!」

俺が再度『はあ、』と溜め息をついたのとほぼ同時に束が教室に入ってきた。

「ああ!! かーくん束さんが教室に入ってきた途端に溜め息ついたっ!!」

……もう束の性格がめんどくさく感じてきている俺は悪くない筈だ。朝からこんなワーワー誤解して言われたら本当にいつか束見て溜め息つく日が来るかもしれない。

「束、もうちょっとテンション下げてくれ……」

「溜め息つかれた上にジト目であからさまにイヤな顔されたっ!!」

がーん!! なんて擬音がまさにピッタリな表情で衝撃を受けて崩れ落ちる束はまあこのままにしておいて、俺は本題である授業参観の対策を立てることに。

先ず、授業参観は給食、昼休みを終えた後の五時間目。科目は算数だ。別に授業自体に問題はない。前世で工学を専攻していたくらいだから数学は得意だし、それ以前に今やってるのは掛け算だ。常識として出来なければ人間失格と言われても反論できない。

……問題は俺の席の位置だ。まだ席替えしていないため、あいうえお順で座っているわけだが俺は『さ』、位置は窓側から三番目の一番前だ。つまり、教卓のと真ん前。

いや普通なら嫌がる所なんだろうけど位置的には後ろに並ぶ親たちから最も離れているので俺にとっては好都合だ。

じゃあ一体何が問題なんだと言いたくなるだろうが、まあ最後まで言わせてくれ。

それは。

「かーくんかーくん!! 授業参観だつてさー!!」

……俺の右隣の席が、束だということだ。

どういうわけか『さらしき』と『しのの』の間には皿田やら篠田などの苗字が勢ぞろいしておりこういう構図になったわけだが、ぶっちゃけ束の隣は苦勞が絶えない。こんなにも気さくに話しかけ

てくる彼女だが、やはり他人には興味などないらしく会話をしよう  
ともしないのだ。しかも頭脳は既にそこらにいる教師など置き去り  
にしてしまうほどのもので、教師陣も束に強く言えない状態なのだ。

そんな他人に全くの無関心である束が唯一、会話をしているのが  
俺。

あとは言わなくても解るだろう。俺は教師と束とのパイプ役にさ  
れているのだ。

たかだか小学二年生の少女に頭が上がないというのもおかしな  
話だが、実際にそうなのだから仕方ない。

そんなわけで俺はよく先生たちに束への伝言などを預かったり、  
伝えてと言われたりするんだよ。

たとえそれが授業中であっても。

これが俺が問題だという点だ。

俺の席はさつきも言ったが一番前。しかも教卓に最も近い席だ。  
当然、先生との距離も最も近くなるわけで。そうすると授業の内容  
を理解できているかどうかを束に聞くように俺に言ってくるわけで。

そうなると俺は束は余裕で理解していると分かっている形式上  
聞いておかないといけないんだ。

するとどうだ。教室の一番前で先生と生徒が授業中であるにも関  
わらず話し合っている構図が出来上がってしまう。

うん。間違いなく目立つ。  
親さんたちの好奇の目に晒されることになる。

そんな目立つのは避けたい俺は、どうにかして授業参観に欠席できないものかと考えたりもしたんだが。

「はい皆さん席についてくださーい」

無情にも時は流れ五時間目の授業、算数の開始を告げるこまこの声が教室内に響いた。

朝の宣言通り、俺は後ろを振り向いていない。もし親父たちが居て、もし目線が合いでもしたらあの馬鹿は親バカっぷりを発動させるに決まっている。

ざわざわと教室内が落ち着きがないことから相応の数の両親が来ているんだろうなということは予想できる。

始まってしまった以上はもう受け入れて早くこの授業が終わるのを祈るばかりだ。

頼むから、なにも起こらずに終わってくれ……！！

しかし。やはり俺はそんなフラグをいつの間にか建ててしまっていたんだろうか。

授業開始早々、よく聞きなれた、だが今は最も聴きたくない声が教室内に轟いた。

「ここが形無がいる教室かあ、小学校なんて何年ぶりだろうなあ！  
！」

.....。

「あらあら楯無さん。あまり大きな声を出すと授業の邪魔になってしまいますよ」

.....。

「おっと。すまんすまん」

俺はこんな声知らないシラナイ。

え？ 誰の声？

心無しか後ろで小さななどよめきが起こった気がする。  
大体、予想はつくけど。

だが振り向かないぞ。この時間を無事に終えるためには、あの親バカとは関わっちゃだめなんだ！！

「お、形無！！ 来たぞー！！」

無視。

「形無、こっちだこっち」

聞こえない聞こえない。そしてあの言葉に返答、またはツッコミは厳禁だ。

「形……誰だお前」

「誰に話しかけてたんだてめえッ!!」

そいつ俺とは似ても似つかねえポツチャリ君じゃねえか。そんなのと俺を間違えるとか眼球腐ってんじゃねえのか。取り替えてやるうか？

「あ、そっちにいたのか形無」

「どう間違えれば俺とそいつが同一人物に見えるんだよっ!!」

「いやー、今日慌ててたからコンタクト付けるの忘れてきちゃってなあ」

「帰れ!!」

俺の無事に授業参観を過ごすという目標は、ものの五分で親父にぶっ壊された。しかも思いつき振り向いちゃったし。他の親さんからの視線がハンパないんだけどこれ。

……見ちゃったからもう開き直るけどさ、親父たち絶対その格好は間違ってる。

ツナギがダメなら普通はスーツとか来てくるだろ。なんで親父は袴穿いてんだよ。どこの武士だあんだ。

母さんも母さんで、ドレスは止めてって言ったけどなんで真っ赤な着物着て来てんだ。

二人そろったら完全にそっち系の人じゃん。俺もそうだと思われちゃうじゃん!!

しかもやっぱ母さん他の父親の視線釘付けにしてるし。



「……はあ」

俺は親父にツツコンだのを思い出し、自己嫌悪に陥りながら授業を受けることに。

案の定俺は注目を浴びちまったし、親父も親父で目立ってるし、母さんも視線を集めまくっている。ほんとに授業どころじゃないんだよ……。

だから呼びたくなかったんだよ、こうなることが分かってたから。

平穩つて、なんですか。

俺には一生、縁のないものなんですか。

「じゃあこの問題わかる人」

「……はい」

「形無、手を上げるんだ!! 答えは64だぞ!!」

「違つよ56だよ」

掛け算間違えるってどんだけだよ親父。

「更識さん授業中はお静かに……」

「あ、すいません」

もうほんと勘弁してくれ。

これ以上親父に授業を引っ掻き回されるのは御免だ。

そんな堂々と間違いを述べた親父を見てクラスの生徒や親御さんたちはクスクス笑ってるが、親父の隣の人物だけは全く笑っていなかった。

「タ テ ナ シ サン？ 授業中は静かにと、言っただしょう…？」

和やかだった教室の空気が、一瞬にして絶対零度に。

親父がカタカタ震えているのはこの寒さのせいなのかそれとも…。

「ちょっと、出ましょうか」

「みみみ瑞穂！？なんでそんな怖い顔して……」

「楯無さんのせいですよ……？」

どうやら母さんの逆鱗に触れてしまったらしい親父は、襟首を掴まれ引きずられるようにしてズルズルと教室の外に連れて行かれた。ピシャンツ、と閉まった教室のドアの先は、怖くて誰も覗けなかった。

「……もうほんと、勘弁してくれ……」

結局この後何事もなかったかのように授業参観は終了したが、俺の両親はクラス内で一躍有名人となってしまうた。そしてそれは俺も例外ではなく、散々質問責めにあうことになった。

……もう絶対に親は学校に呼ばない。そう心に誓った小学二年生の春だった。

## #9 平穩という言葉を使うのはその時点でフラグ（後書き）

毎日投稿しようと思うとどうしても短いし、長くしよつとすると時間がかかる…

どうすりゃいいんだー！

## #10 天才に想われるのはその時点でフラグ（前書き）

アンケート途中経過

- ・ 姫無、簪 13票
- ・ いない 8票
- ・ ナターシャ 4票
- ・ クラリツサ 4票
- ・ のほほん 3票
- ・ やまや 2票
- ・ 一夏ハーレム 6票（シャル2、ラウラ2）
- ・ 虚 1票

11月15日まで受け付けるのでまだまだ意見を聞かせてください。

## #10 天才に想われるのはその時点でフラグ

前回のあらすじ

授業参観なんて消えて無くなればいいんだ。

さて、あの授業参観からさらに月日が流れ（ツツコンだら負け）、桜は散り、緑の葉は赤や黄に染まり始めた今日この頃、我が更識家に新たな家族が加わった。

さらしきんざし  
更識簪。

うちの部下を黙らせる姫無をも黙らせる最強の0歳児だ。

うん。いやもうね。

姫無も可愛いけど簪もヤヴァイ。可愛さが留まるところを知らないとは正にこのことか。

そして簪が生まれる少し前、例の如く家族総出の名前会議が開かれた。俺こと形無、姫無と『無』という字が付いているから今回もそっいつ名前になるのかと思いきや、そっいつ類の名前候補は驚くほど少なかった。

ただ、前回の姫無の時に却下されたことが諦められなかったのか『棟無』が再び案の中に紛れ込んでいたが、親父が即刻削除した。ついでにこの案を出した部下は一ヶ月間絶食の刑に処された。

というわけで最終的には『簪』、『小鳥遊』、『轍』などが残ったが、多数決の結果最も多かった『簪』に決定したというわけだ。

「あうあう」

まるでオットセイかなにかのような声を上げている簪を、姫無があやしている。姫無も簪も祖母の血を濃く受け継いだのか透き通るような水色の髪色をしている。俺はそんな明白な水色じゃないがやはり少しは祖母の血が流れているのか、紺色の髪の色だ。まあそれは置いておいて、姫無ももう二歳だ。言葉も話せるようになって、一緒に居る時間も増えた。

立派に育って兄さん嬉しいよ。……二歳じゃまだなんとも言えないか。

家族がまた増えたことで、親父の最早病気とも言える親バカっぷりは更に加速。更識家の十六代目だったのに今やその威厳は俺の中から消し去られようとしている。

仕事ほっぽり出して娘と遊ぼうとする父親なんか尊敬出来るわけねえだろ。

まあそんな体たらくっぷりを見せられて、我が更識家最強との呼び声も高い母さんが黙っているはずも無く、授業参観の時のように襟首ひつつかまれてオハナシされることもしばしばだ。

そんな光景も、もう見慣れたもので『またかよ』くらいにしか思わなくなってきたている自分が居る。慣れって怖い。

……そう、本当に慣れって怖い。  
だって、神様おっさんから貰った一方通行の超能力、使えない期間が長すぎてなんかもうこのままでもいいやあ（ヤケクソ）的考えに至ってしまったているのだから。

いや超能力、使いたいよ？　つか使えなかったら俺この世界で生きていけないし。こんな束やら国家間の謀略のせいで死亡フラグ建ちまくる世界で丸腰じゃ殺してくださいって言うてるようなものだ。

もちろん俺はそんな自殺志願者ではない。故に今も毎日かかさず演算を試みてはいるものの、やはりというかなんとというか、うんともすんとも反応しない。

これじゃ間違いなく能力が開花するより先に俺の心が折れる。  
というか既に折れ掛けた。

だから演算をしようとするときも『どうせ今日も無理なんだろうなあ、』的諦めが思考の何処かに少なからず存在している。  
これじゃお先真っ暗だよ。妹達の花嫁姿を見る頃には俺遺影になつてるよ。

と、こっちがこんなお先真っ暗（比喻でもなんでもなくリアルに）状態だから、必然的に更識流のほうの修行には力が入るわけで。小学二年生ながら親父の部下の下のほうになら勝てるくらいにまで成長している。こっちが案外順調だから、能力のほうもなんとか諦めずにやっついてられるんだ。だっていくら一方通行の『ベクトル操作』があるとは言ってもまだ使えないし、なによりも能力に依存しすぎてあんなひよろっちいモヤシにはなりたくない。どうせならしっか



りと筋肉つけないじゃないか。

「形無」

「父さん」

「今日は四の型を教えてやる。道場にこい」

普段はダメ親父全開な我が父だが、こういうときはなにやら精悍だ。仕事してる時もそうだが、いつもこのくらい真面目なら母さんのオハナシも受けなくて済むのに。

俺はそんなことを思いつつも、足早に親父の後を追いかけた。

……何故だ。

必要な条件は全てクリアしている筈だ。

転生者って時点でもう既にフラグは建ってるはずだし（主にハーレム）、名前だってこの世界で重要な意味を持つ名前だった。

幼稚園も原作キャラ二人と同じでもうこれは運命だと思ったし、なんと俺の家の近所にはあの五反田家の食堂まであった。

小学校に上がっても千冬、東とは同じクラスになったし、これはもう間違いなく俺は彼女たちにフラグを建ててていると思った。

……思ってたのに！！

クソ、今思い出しても腹が立つ。あれは小学校に入学して千冬、東と同じクラスになり、二人でなにか話していた所へこれからよろしくなと話しかけに行った時のことだ。

『よう』

『……』

『小学校でも同じクラスになったな。また一年間よろしくな。千冬、東』

『またお前か……』

『東さんに話しかけられないでくれるかな。馬鹿と残念なのが感染したらヤだし』

『おいおい二人ともツンデレだな。ま、すぐにデレしてくれるとは思うが。』

『そんなつれないこと言うなよ。俺たちの仲だろう？』

『お前と友達のなった記憶はない』

『……（がん無視）』

ガラッ

『はー、今日から小学生かあ』

『形無ー!!』

『おはようかーくん!! ちよつと今から束さんとかーくんを別々のクラスにしたこの学校に特製のウイルスをぶちまけてくるから!!』

『千冬、とりあえずソイツ押さえて』

『わかった』

『離してちーちゃん!! こんなの横暴だよ、不公平だよ!!』

『何が横暴だよ……。クラス分けなんて運みたいなものだろ』

『きつとかーくんと束さんを引き離すために学校側がなにか巨大な陰謀を』

『あるわけないでしょうが』

なんて楽しそうにこの俺を差し置いて嫁たちと会話してやがるのは馬野郎。千冬たちにたかるハエみたいな奴だ。

っーかこいつ!! こいつが俺の計画を台無しにしてやがるんだ!!

本当なら幼稚園の時点で二人から、

『私、大きくなったら一華くんのお嫁さんになる!!』

みたいなイベントを発生させてラブラブになる筈だったのに、二人の近くにはいつもアイツがいて俺の邪魔をしゃがる！！

いつもいつもいつもだ！！ もう能力使ってアイツぶっ飛ばそうかと思つたよ。まあ、まだ使えないんだけどな。

そんなアイツはどうやったのか東にゴマをすって近づき、パソコンを見ながら時々アドバイスしているが、お前何様のつもりだよと言いたい。

お前が偉そうにアドバイスしてる相手はのちの天才科学者、篠ノ之東なんだぞ？ お前なんかが気安く話していい相手じゃねえんだ。千冬だって『ブリュンヒルデ』と称されることになる最強のIS操縦者だ。本来ならお前なんか同じフィールドにすら立てない人間たちなんだ。

ま、俺は彼女たちと同類、所謂天才つてやつだからいいんだけど。

更識形無。

ここまで俺をムカつかせたのはお前が初めてだ。いいだろう、認めてやるよ。お前が俺にとつての障害であるってことを。

俺はそんな怒りを込めて、自宅の部屋で口を開く。

「更識形無。ムカついた、テメエじゃ俺の足元にも及ばねえってことを教えてやるよ」

某常識が通用しない人のセリフを言つて、俺は不敵に笑う。ぶっ倒す。……能力が使えるようになったらな。

「ん!？」

ゾワゾワつと悪寒が全身を駆け抜ける感覚に俺は身震いした。なんだ、なんか前にもこんなのがあった気がするぞ。

誰かに恨まれてんのか？

そんなことした記憶はないんだけどなあ。

「どうした形無。集中力が乱れているぞ」

「あ、ごめん」

「さあ続きだ」

俺は気を取り直して再び親父の前に構える。

しかし今のは一体なんだったんだ？

「ふむふむ。かーくんはこんな修行してるのかぁ。なんか漫画の主人公みたいなことしてるねえ」

かーくんの家にこっそり仕掛けた（大部分は形無によって処分された）超小型カメラによって撮影されているかーくんの修行を見て私は素直にそう思った。

しかもあれはどう見ても私と同じ小学校二年生の少年がやるような修行じゃないよかーくん。普通の子供がやったらソッコーで病院送りだよ。

「ふふ。やっぱりかーくんは面白いなあ」

こんな厳しい修行もこなして、私と同等、もしかしたらそれ以上の頭脳を持っている。そしてなによりも、優しい。

むりやり家に押し掛けても意見を求めても、最後は結局了承してくれるのだ。これを他の子にもやってるのは納得いかないけど、それもかーくんだし、と言ってしまえばそれで納得できてしまう。

「また明日、かーくんにコレのアドバイスもらおうと」

目の前にあるノートパソコンに表示された設計図のようなものに視線を移し、彼との会話を想像して頬が緩むのを自分でも自覚する。

「~~~~~、明日まで我慢できない。今からかーくん家に行こう！

！  
「

即断即決が心情の私はノーパソを小脇に抱えて外へ飛び出した。  
彼の家の門で困惑する少年は、結局話を聞いてくれるのだろう。  
それを考えると、どうしようもなく私は嬉しくなるんだ。

## #10 天才に想われるのはその時点でフラグ（後書き）

多分次から中学生……；

早くIS発表させないと話進まないし（汗



## キャラ設定&おまけ（前書き）

昨日は更新出来ず申し訳ありませんでした；  
今回はキャラ設定とおまけです。若干これからのネタバレが混ざってます。

あと前々から言われていた形無と姫無たちとの年齢の矛盾ですが、ここで強引に直しました……。すいませんでした；

そしてアンケートですが、大勢の読者様ご協力ありがとうございました！！

### 最終的な結果として

・ 姫無&簪	14票
・ 必要ない	9票
・ クラリツサ	6票
・ ナターシャ	5票
・ のほほん	4票
・ やまや	2票
・ 虚	1票
・ 一夏ハーレム要員	7票（シャル2、ラウラ3）

という結果でした。

わざわざアンケートにご協力してくださった読者の方々の意見は本当なら全て採用したいところですが、今回はこの中で多かったのを採用、または少し変えて採用させていただくことにします。

ありがとうございました。

## キャラ設定&おまけ

更識形無

- ・身長 167cm（中学生現在）
- ・体重 52kg（同）
- ・容姿 中の上、上の下

神様たちのお戯れ、双六の出マスに書かれた『人間を転生させる』という理不尽な理由によって『IS』の世界に転生させられてしまった今作品の主人公。

紛れもない日本人だが、外人である祖母の血も若干ではあるが流れておりその影響が紺色の髪色をしている。

裏工作を実行する暗部組織に対抗するための対暗部組織『更識』を要する更識家の長男として生を受けた。

幼稚園入園時に原作キャラである織斑千冬、篠ノ之束と出会い数日の後友達となる。以来『いつメン』とまで呼ばれるようになり、お揃いの赤いミサガをそれぞれ腕に付けている。中学生になった今でも一日の大半はこの二人と過ごすことが多い。

性格は基本的におおらか。死亡フラグやその他もろもろのフラグ満載のこの世界を生き残るためあまりフラグを建てないようにと決意し転生したが、生まれてきたのが『更識』の家であった時点で挫

折した。そして幼稚園で千冬、束と知り合ったことが止めとなり、原作とは関わらずに生きていくという選択肢は切り捨て、今はいかにして女尊男卑になる世界を生き抜くかを目下模索中。

神様からもらった超能力、アクセラレータ一方通行の『ベクトル操作』は脳がまだその段階まで至っていないのか使える気配が全くと言っていいほどない。

そのせいか父から指導を受ける『更識流』の柔術に力を入れるようになり、小学校低学年の時点で父の部下の下のはうの人間ならば倒せるほどの成長を見せる。

本人曰く、  
『能力に依存しすぎて一方通行のようなヒョロモヤシにはなりたくない』とのこと。

姫無や簪には更識家に代々仕える布仏家の専属メイドがつくようになる（小学校に上がると）が、形無は自分のことは自分で出来るとメイドを拒否したため専属の付き添い人はいない。

……というのは建前で、自分の身の回りの世話をしてもらうのが恥ずかしいというのが本当の理由だったりもする。

小学校を卒業後、千冬、束とともに近くの中学校へと入学する。

重度のシスコン。

というか妹は正義というよくわからない理屈を持っており、二人の妹のためなら素手で戦車と闘うくらいに愛している（家族として）

更識楯無

34歳。

更識家の16代目。

つまり現当主。形無、姫無、簪の父であり更識家の大黒柱的な存在である。更識家の部下として実に百数十人を従え、裏工作をする暗部組織に対抗するため仕事に出ていることも多い。

しかし、最早病氣以外の何物でもない親バカであり、我が子の為なら例え国の未来が掛かっていたとしてもすっぱかして子供を取るほどの救いようなない親バカ。

それ故に妻である瑞穂からのお話（という名の折檻）は日常茶飯事となっている。

だが部下からの信頼は厚く、また妻である瑞穂も仕事に対しての心配はしていない様子。

更識瑞穂

31歳。

17歳という若さでこの更識家に嫁いできた若奥様。大和撫子のように長く美しい黒髪とどう考えても20代前半にしか見えない美貌を併せ持ち、炊事洗濯なんでもござれの完璧美人。  
パーフェクトウーマン

しかただ一点。  
彼女自体がとてつもない天然ということだけが形無の悩みの種になっている。

更識家の全家事を一任しており、楯無の部下からは『姉さん』と呼ばれている。

## 織村一華

形無と同じく、神様たちのお戯れである双六の出マス『人間を一人転生させる』が理由でISの世界に転生させられた（一華を転生させたのは形無を転生させた神様とは別人）。

## 通称、残念君。

転生という二次小説にありがちな展開が実際に起こったことにより自分を主人公だと思っている。故にどこその主人公が所持しているフラグ体質やチート性能など備わっていると信じて疑わず、これまで生きてきた。

転生、というのはやはりフラグなのか容姿はそれほど悪くはない。本当の一夏くらいの長さの茶髪をワックスで立たせている。だがその容姿をもつてしても、残念な性格を補えてはいないようだ。

幼稚園入園時に千冬、東と同じクラスになったことでフラグが建つと考えていたが、形無の存在によりその妄想は呆気なく破壊された。

以来形無をなにかと敵視するようになり、事あるごとに馬野郎と罵っている。

小学校を卒業後、千冬たちを追って同じ中学校に入学することに。  
転生する時に神様から『ダークマター未元物質』の能力を授かるが、どうにもまだ使えないようだ。

五反田食堂の近くに家があり、親父さんとは顔見知り。弾とも馴染みである。

おまけ

「お兄ちゃん」

「ん？ どした簪」

自分の部屋で自由な時間を過ごしていると、ノックもせず簪がトコトコと部屋に入ってきた。これが親父なら締め出すところだが、簪なら話は別だ。むしろ歓迎する。

明日から簪は幼稚園児だ。よほど楽しみなのか既に制服を着て黄色い帽子をかぶっている。

うん。可愛い。

「……似合う?」

その場でクルッと一回転しておずおずと訪ねてくる簪。思わず抱きしめたくなる衝動に駆られたがなんとか我慢して俺は満面の笑みで答える。

「よく似合ってるよ」

「へへ……そつかあ……」

よほど嬉しかったのか満面の笑顔でそう言う簪。やばい、俺の『抱きしめたくなる症候群』が再発してきた。いかんいかん。

「兄さ……」

俺が必死で自分を鎮めていると、今度は姫無が部屋に入ってきた。例の如く、ノックをせずに。

なんなんだ一体。この子らは俺の部屋に入り慣れているのか。そんな感じのはいり方だぞ。

「おう姫無。どした?」

「……兄さんに教えてもらいたい所があって（簪も来てたのね）」

「お、いいぞ。どこだ?」

「このルートの計算なんだけど」

……………。

あれ、おかしいな。姫無はまだ明日小学校に行くようになるんだけどな。なんでもう数学勉強してんだ？

まあ俺は教えることはできるが普通の中学生には無理だぞ。

というわけで俺はこの部屋で姫無に数学を教えることに。

「……………む」

そんな光景を見て面白くないのか簪はその小さな頬を膨らませて  
いる。

（お姉ちゃんに……………お兄ちゃん、取られた……………）

始めは些細な嫉妬から。

それがやがて、とある感情へと変わっていくなんて、このときは  
まだ思いもしない二人。

更識形無。 14歳。

更識姫無。 6歳。

更識簪。 5歳。

更識家は今日も平和だ。





## キャラ設定&おまけ（後書き）

次回はもう中2の主人公と体育祭です。（あくまで予定です）

## #11 学校行事はその時点でフラグ（前書き）

お気に入り1200件突破ありがとうございます！

皆様に頂いたアンケートの結果、姫無簪の妹コースと余計なヒロインは増やさないという方向にすることにしました。

人気の高かったクラリツサ、ナターシャは出しますがフラグは建たない……予定です。

## #11 学校行事はその時点でフラグ

「……ん、」

瞼をゆつくりと持ち上げて、自分が目覚めたということを知覚する。ベッドの上でまだ余韻にひたりたいところだが、それをする二度寝してしまいそうなので睡魔を払い伏せて身体を起こす。

「ふあゝあ……」

ぐいつと腕を持ち上げ、背筋を伸ばす。凝り固まった筋肉がほぐれていく感覚が何とも心地よい。

「朝か……」

更識形無。

十四歳になりました。

……いや、分かってる。言いたいことは分かってるよ。なんでいきなり小二から中二までとんでんだよサボってんじゃねえってことだろ？

……大して原作に絡むようなことが無かったんだよ。

普通に千冬、束と学校でつるんで家じゃ更識流と超能力が使えるようになるための修行。あとは愛すべき妹たちとの触れ合い。そんな毎日を過ごしてたらいつの間にか中二になってた。

この六年で俺は身長も伸び、体格もゴツくはないがそれなりの筋

肉がついて男らしくなった。

更識流の修行も大分進み、今じゃ親父ともいい勝負が出来るくらいには成長している。まあ、まだ勝ったことは一度もないけど。

「……ん、」

布団から出ようと身体を動かした瞬間、何かが俺の腰辺りに触れた。

……………。

嫌な予感がしてならない。ようやく覚醒してきた意識を自らの布団に向けると、明らかに自分以上の体積のふくらみがある。

「……………」

ガバツ、と。

俺は無言で自分の布団をひっぺがした。

「……………すう、」

視線の先には、丸まったまま気持ち良さそうな寝息を立てて眠る我が妹。

更識姫無、六歳である。

「またかよ……」

ここ最近、というかほぼ毎日。形無の布団にこうして姫無は潜り込んでくる。

というのも、姫無が幼稚園半ばまでは形無と一緒に寝ていたということが関係している。小学校に上がる前に姫無には自室が与えられ、身の回りのことは自分でするようにと言われていたのだが、如何せん自室で一人寝るのは慣れないらしく、結果こういうことになっているというわけだ。

まあ、何だ。

慕ってくれているというのは兄として非常に喜ばしいことなんだが、寝るくらい一人で出来ないと心配になる。小学一年だし、これから直していけばいいと思うが。

「ほら姫無、起きろー朝だぞー」

「……んにゅう」

「……………」

はっ!!

いかんいかん。寝顔が余りにも可愛いんで思わず食い入るように見つめてしまった。ここは兄としてしっかり妹に自分の部屋で寝るように言わねば。

……少し寂しいような気もするけど。

「姫無。ひーめーなーしー」

「んん……、あ、兄さんおはよう」

まだ眠いのか眼をこすりながらゆっくり起き上がる姫無。

ぐはっ!!

いかん、なんだこの可愛い生き物。抱き締めたくなっちゃうじゃないか。

「……たく。自分の部屋で寝てくれていつも言ってるだろう?」

必死に平静を装ってそう言う俺に、姫無は笑って。

「兄さんと一緒じゃないと寝れないんだもん」

「そんなだと将来困るぞ?」

「いいもん。兄さんが一緒に居てくれるから」

決定事項ですか。

ニコツと笑ってそう言われてしまうと何も言えなくなってしまう。このやり取り、最早毎日の恒例になってしまっている。

「はあ、取り敢えず居間に行くぞ。母さんが朝食作って待ってる」

「うんっ」

そう返事をした姫無はベッドを降り、俺の隣を歩いて居間へと向かう。これもまた、習慣化しつつあったりするのだ。

居間の前までやってきた俺たちは障子を開き、朝食が並べられた居間へと足を踏み入れる。

「おはよう」

「おはよう」

「おう形無、姫無。なんだお前らまた一緒に寝てたのか」

「あらあら。姫無は本当にお兄ちゃんが好きなのねえ」

「うん！」

「……（本当は困ってるが好きと言われて悪い気はしないので何も言えない）」

「お姉ちゃん……また……」

既に食卓についていた簪が頬を膨らませてこっちを見ている。

……なんだ、その俺が悪いみたいな目は。

「ふふんっ」

姫無は姫無で自慢気に簪の隣に座ってるし。

「お姉ちゃんばかり……ずるい……」

「悔しかったら簪も兄さんの部屋で寝ればいいじゃない」

「……まだ、無理だもん……」

簪はそう言って下を向いてしまった。何故無理なのかというと、それは我が父親に原因がある。

俺の目の前で味噌汁を啜るこの親父は、周知の通り病氣レベルの



親バカだ。それはもう、夜子供と一緒に寝ないと不眠症になるくらいに。

故にこれまでは親父と母さん、姫無に簪の四人が一部屋に集まって床についていたんだが、つい最近姫無が自立（とは言ってもあの有り様だが）し、三人で寝るようになったのだ。

そんな状態で簪までもが一人部屋に移ってしまったたらきつと親父は寂しさで死ぬ。ウサギみたいに。いや全く可愛くはないけどな。そんなわけで簪はそっちの部屋を抜け出せないのだ。いや簪まで来られたら俺の寝るスペースなくなるから。……イヤではないけど。

「ほら二人とも早く食べるよ」

「「はい」」

言われて姫無たちは箸を取り食事を始めた。俺も黙々と食事を続ける。食事の最中は誰も喋らないし、テレビも消してある。更識家の家訓の一つだが、食事中は静かに、というものがある。

命に感謝し、口に運ぶことに話し声は無用というのが理由らしい。喋っていいのは『いただきます』と『ご馳走さま』だけだ。

「ごちそうさま」

俺は箸を置き、手を合わせる。食器を下げた居間を出た俺は自室へと戻った。

現在時刻は午前七時四十分過ぎ。丁度いい頃合いだろう。

部屋へと戻った俺はクローゼットから学生服を引っ張り出して袖を通す。真っ黒な学ランは流石に五月半ばのこの時期になると少々

暑くなってくる。

「もう五月も半ばかあ」

壁に掛けてあるカレンダーに視線を移しそう溢す。早いものだ、新しいクラスになってからもう一ヶ月以上経つのだ。

二年生に進級し新しくなったクラスにも慣れ、友達も大勢できた。これはとても喜ばしいことだ。充実した学校生活が送れているという実感もあるし、これと言った不平不満もない。

……あるとすればむしろ『ピンポン!!』……もうそんな時間か。

思いつきり和風な屋敷のこの更識家に鳴り響いたインターホンの音を聞き、俺は大して教科書も入っていない薄っぺらな学生鞆を手にとって自室を後にした。

「親父、母さん行ってくる」

「おう形無。気をつけてな」

「行つてらっしゃい」

親父たちにそう言って、俺は玄関を出て門をくぐった。

「おはよう形無」

「おっすかーくん!!」

そこに居たのは中学校の学生服に身を包んだ美少女と言っても過

言ではない二人。

織斑千冬。

篠ノ之束。

『いつメン』と呼ばれるメンバーだ。

彼女たちも中学生だ。小学校の頃とは比べものにならないくらい成長している。特にあの双丘。千冬も束も立派に成長中のようだ。

特に束。あれはもう中学生というレベルを完全に逸脱している。凶器だ。

「おはよう」

まあ、そんなことは決して口には出さないけどな。

彼女たちとは幼稚園からの知り合いだからかれこれ十年近くの付き合いになる。早いものだ。最初はなるべくフラグを建てないように原作キャラとは関わらずひっそりと生きていこうと心に決めていたのに、それを一瞬にして破壊したのが何を隠そうこの二人だ。

幼小中と同じ学校に通う俺たち三人は中学でも有名になりつつある。

千冬は剣道部の二年生エースという肩書きとそのクールビューティさで同性からの支持が多く。

束については言うまでもないがその頭の良さで、中学では自他共に認める天才だ。

そして俺なんだが……正直有名な理由がイマイチ解らん。勉強は前世の記憶があるから並よりは出来るが束には遠く及ばないし、運動も更識流を修行しているからこれも並よりは出来るが千冬ほどの

センスはない。

形無は周りにいる連中が凄すぎて若干ハードルが高くなっています。

それに見た目だつてこの二人に比べたら見劣りしまくる。

「……………」  
「……………」

なんか千冬たちがジト目でこっち見てくるんだけど。何これ怖い。

「…………形無」

「はい？」

「お前今間違つたこと考えていなかったか？」

「いや、別に」

「…………まあいい。それよりも、形無はどれに出るか決めたのか？」

「はい？」

「…………まさか忘れていたわけじゃないだろう？」

忘れる？

俺何か忘れてたか？

「体育祭の競技のことだ。今日のHRで個人競技を決めると先生が

言っていただろう?」

「あ」

「東さんも初耳だけど」

「お前はパソコンずっと触ってたからだろ」

体育祭。そう言えばそんなこと担任の先生が言ってたなあ。

因みに我がクラスの担任の教師の名前は中田<sup>なかた</sup>加奈<sup>かな</sup>。やまやの二番煎じすぎる名前の持ち主だ。

「体育祭、かあ……」

いや別に体育祭は嫌いじゃないんだ。むしろ身体動かすの好きだし。むしろ授業潰してやってくれるんだから願ったり叶ったりなんだ。

……でもさ。

こういう行事があると病気なオッサンが絶対来るんだよ。

「親父……来るなって言っても絶対来るよなあ……」

親バカ日本代表、更識楯無。

あの親父が来ると碌なことにならない。

事実、去年の体育祭だってそうだったのだ。

子供と一緒に走りながらビデオカメラ回したり、最早騒音レベルの応援したり。

最終的に変質者扱いされて職員室に連行されてたからね。母さん完全に他人のフリしてたからね。

「お父さん……去年すごかったな」

「……言うな」

千冬の同情がつらい。

「でも競技か。何に出るか全然考えてなかったなあ」

「あ、じゃあさかーくんかーくん！ 束さんと一緒に二人三脚出ようよー！」

「却下」

「即答！？ 酷いよかーくんそれは横暴だー！」

束と二人三脚？

勝てる気がしない！！

「あのな、束。去年の体育祭思い出してみろ。お前プログラム一番のラジオ体操で日射病になって保健室に運ばれたじゃねえか」

「う……」

束は外、もつと言えば太陽の下で動き回るのが致命的に苦手だ。故に体育の成績だけは他と比べて低い。

「こ、今年は大丈夫だよー！」

「週末の最高気温三十度近くまで上がるらしいぞ」

「……………」

押し黙る束。どうやら無理だと悟ったみたいだ。

「な、なら形無。私とはどうだ？」

何やら鼻息荒くして聞いてくる千冬だが、コイツも大切なことを忘れている。

「確か二人三脚のあとすぐに部活動対抗リレーだろ。そっちに間に合わなくなる」

「う……………」

しかし二人三脚か。

それが一番個人競技の中じゃあ簡単そうかなあ。転ばなきゃいいだけだし。

「ま、ペアは学校で探せばいいか」

そんな風に適当に考えつつ、俺たち三人は中学校へと通学路を歩いていった。

……………まさかのペアに驚くことになるのは、今から約八時間後のことだ。





#11 学校行事はその時点でフラゲ (後書き)

次回 新世紀カタナシゲリオン

アイツ、襲来

## #12 帰宅部でその運動神経はその時点でフラグ（前書き）

体育祭が終わればそろそろ束がISを完成させそうなので、やっ  
とIS出せるかなあ……。

圧倒的にISよりも妹たちのほうが出番多いだろうけど。

## #12 帰宅部でその運動神経はその時点でフラゲ

前回のあらすじ

体育祭って、完全に親父の暴走フラゲやん。

そんなわけで現在六限のHR。俺は自分の教室の席に着き、教壇に立つて何やら力説を始めた体育祭実行委員の話を聞いていた。

「いいか！！ 我々赤組は今年こそ総合優勝を勝ち取る！！ その為には団体競技はもちろん、個人競技でも上位に入賞することが優勝のための必須条件だッ！！」

こんな風に如何にして優勝するかを熱く語っているのはクラスが新しくなって俺の初めて友達、相模<sup>さがみ</sup>だ。サッカー部に所属している相模は当然のようにイケメンで、こういう人を纏める仕事は得意な人間だ。

こういう人の前に立つという点においては千冬も相模以上の素質があるんだが、彼女は現在部活動で行う体育祭の仕事の打ち合わせに招集されていてこの教室に姿は見られない。

本来なら部長を含めた三年生が招集されるんだが、どうやら千冬は二年生にしてその地位にいるようだ。

さて、相模の話に耳を傾けようか。俺は頼杖について、教壇のほうへと視線を移した。

「というわけで、俺たち体育祭実行委員のほうでどの個人種目に誰が出るかを決めさせてもらった！」

ざわつ、と教室全体がどよめいた。

無理もない。みんな仲の良い友達同士で参加しようとしていたのだ。それを向こうで勝手に決められたとあつては文句の一つも出てくるものだ。

「なんでだよー」

「私たちもう何に出るか決めてたのに」

「こつちで決めさせてくれよ」

などなど様々な文句が発せられている。

まあ俺としても出来ることなら自分で出る競技を選びたかったが、あの親父が来る時点で俺の体育祭には暗雲しか立ち込めていない。どの競技に出ようが待っているのは羞恥のみだ。

だから別に俺としてはどれでもいいんだが。

「まずはポイントのかい団対抗リレー。出るのは俺、更識、織斑に織村の四人だ」

なんだあれに出るのか。まあ走るだけならいいか。

「次に騎馬戦。これは男子全員参加な」

騎馬戦か。

まあ全員参加なら仕方ない。ケガしないように逃げ回ろう。

「んで200m走。これは50m走のタイム上位二十人な」

俺のタイムは六秒前半。上位二十人どころか陸上部に混じってトッパ三に入っている。

「んで二人三脚。これはもうペアをこつちで作ったから、この紙を見て出るようになってる奴は確認してくれ」

クラス全員に紙を配る相模。前の席の女子から回ってきたその紙には。

『更識形無・織村一華』

……………。

もしかしたら偶然かもしれないし、相模にも悪いかなあとか思ってたここまで何も言わなかったが、もう限界だ。

「相模」

俺は拳手して立ち上がる。

「ん？ どうした更識」

「ちょっと言いたいことがある」

「なんだ」

「なんで俺全種目出ることになってんだよッ！！お前ですら二人三脚はエントリーしてねえのに！！」

「お前の運動神経がいいからに決まってるだろうが。帰宅部のくせになんだそのデタラメな運動能力」

さらつと相模に返され、俺は言葉に詰まってしまった。

今相模が言ったが、俺は中学ではこれと言った部活に所属していない。所謂帰宅部というやつだ。入学当初は千冬に熱心に剣道部に勧誘されたが、俺には更識柔術の修行もあるし、超能力を自分のものにするための訓練する時間も必要なのだ。部活に割ける時間は残念ながら無いに等しい。

「デタラメとか言っな！」

「だからたまには学校にその運動能力で貢献しろってんだよ」

相模から折れることはなさそうだ。

結局、俺はこういう押しというか頼みみたいなものには弱い。最近つくづく思うが。

「……はあ、わかったよ」

「よし。じゃあそんな感じで頼むわ」

相模がこう言って会を締め、この日は解散となった。今日の授業はこれで終わりなので、机の横に掛けてあった中身が入っていない学生鞆を担ぎ、教室を後に

「あ、待つてよかーくん東さんを置いていかないで！！」

しようとした所で、天才（災？）科学者に捕まった。

「いやあずつと熱心にウィンドウ見てたから邪魔しちゃ悪いかなあ」と

「うそだ。東さんの目は誤魔化せないよかーくん。絶対先に帰ろうとしてたでしょ」

「……、いや？」

「その間は絶対そうだった！！」

いやだつてさっきの体育祭云々の話とかクラスでしてるときも全部無視してひたすら空間投影式のウィンドウ開いてISの開発してんだぞ。集中してるところに声掛けるなんて野暮なことできるわけないじゃないか。

因みに束のこのIS開発だが、実際のところもうすぐ完成というところまで来ている。幾度となく質問や提案されてISの設計に少なからず関わってしまったので分かることだが、下手したらこれ中学卒業までに完成してしまうかもしれない。

……原作って高校生のときじゃなかったか？

「まあいいや。帰ろうかーくん」

「おう」

？

何か今日はやけに上機嫌だな。何か良いことでもあったのか？

上機嫌で俺の腕に自分の腕を絡めてくる束を見てふと思ったが、聞くのもなんだか憚られたのでそれ以上は聞かず、そのまま俺たち二人は教室を後にした。

今、私はすごく機嫌がいい。理由は簡単で、かーくんと二人つきりで帰れるからだ。

さっきかーくんにスルーされて帰られそうになったときは本気で泣きそうになったけど、この後のことを思えば何てことはない。なんてったって今日はかーくんと二人“きり”で帰ることが出来るのだ。



いつもならかーくんとちーちゃんと三人で帰るんだけど、生憎今日ちーちゃんは部活動の打ち合わせか何かで下校が遅れる。これは思ってもみなかったラッキーだ。

ちーちゃんには悪いけど、今日は東さんがかーくんを一人占めしちゃうね。

ぎゅっと絡めた腕の力を強めると、困った顔をしながらもかーくんは受け入れてくれる。それが私にはたまらなく嬉しいんだ。

「かーくん」

「ん？」

「東さん将来は女の子が欲しいなあ」

「ぶはっ！？ いきなり何言い出すんだお前は！！」

照れてるのか焦ってるのか、かーくんの顔は真っ赤だ。

でも気付いてる？

何気無く言ってみた私の顔だって、かーくに負けないくらいに真っ赤なんだよ。

憎い。

今の俺の心境を率直に述べるとこの一言に尽きる。

先程終わった体育祭の種目決め。俺は運動神経がいいから当然のごとく全種目出場だ。ま、俺がいれば総合優勝なんざ楽勝だよ。

だが。

同じクラスにいる馬野郎と二人三脚だけは願い下げだ！！

何で俺があんな帰宅部の陰キャラと一緒に走らにやなんだ！！

しかもあんな奴のどこがいいのか、俺の嫁は馬野郎と腕を組んで二人で帰りやがった！！

憎い！！

これが妻を寝取られた夫の心境ってやつなのか！！

……見てろよ。

俺がお前よりも優れてるってことを、体育祭で思い知らせてやる。

嫉妬の炎を燃やし、俺は体育祭での活躍を誓った。

「じゃあバイバイかーくん!!」

「おう、また明日な」

束と別れた俺は家の門をくぐり、玄関の戸を開く。

「ただいまー」

「あら。お帰り形無」

「ただいま母さん」

「今日も部屋で修行するの？」

「うん。集中したいから今日も誰も部屋に入れないように頼むよ」

「分かったわ」

そんな会話の後、俺は自室へと向かいその戸を開く。学生鞆を適当に放り投げ、学生服を脱いで部屋着に着替えて母さんの言う『修行』の準備を始める。

この修行だが、言ってしまうえば超能力を制御できるようにするための訓練だ。

小学校の六年間、全くと言っていいほど使えなかった超能力。一

時期はほんとに才能ないんじゃないかと思えたと挫折しそうになったが、中学生に上がるのと同時期に一方通行の『ベクトル操作』を行うための演算を脳が出来るようになったのだ。やはり脳の容量が足りなかったみたいだ。

いやさ。

自分であのオッサンにこの能力くれってお願いしといて言うのもなんだけど本当に『これなんてチート』状態だよ。

だってデフォで反射に設定しとけばほぼ殺されることはないんだぞ。この安心感は半端ない。一方通行が能力に依存しちまうのも無理ないな。

流石に常に能力を展開しておくのはまだ厳しいので必要時のみだが、いやはや使えるようになって良かったよほんと。これまで諦めずにやってきたことが報われた。

このままでIS完成してしまったら万が一ISとの戦闘になった時俺の前には死の一択しかなかったろうし。

「さて、」

俺は脳に意識を向け、演算を開始する。  
今日は何のベクトルを操作してみようか。

やっぱ男ってこういうのに憧れるよな。  
マンガの主人公みたいだし。

そんなことを考えつつ、俺は意識を集中させていく。  
『ベクトル操作』を完璧に使いこなせるようになる日も遠くはなさ

そうだ。

そして週末。

いよいよ、それぞれの欲望渦巻く体育祭開幕である。

#12 帰宅部でその運動神経はその時点でフラゲ（後書き）

次回。

新世紀カタナシゲリオン

瞬間、心重ねられず

### #13 騒々しいのはその時点でフラゲ（前書き）

体育祭開幕です。

### #13 騒々しいのはその時点でフラグ

前回のあらすじ

結局、俺は頼まれたら断れない。

体育祭当日。

どうせなら大雨でも降って延期、もしくは中止になってほしかったが、そんな俺の切実な願いなど知るかとはかり上空には澄んだ青空が広がっていた。

天気、快晴。

体育祭、決行。

親父、始動。



いやいや。

親父、始動とか言ってるけど俺としてはホントに笑い事じゃないんだよ。まじで体育祭がカオスになる未来しか見えてこない。

「母さん！！ 写真撮るなら最新のデジカメか、昔ながらの一眼レフかどっちがいいかな！？」

「あらあら。いいんじゃないですか？……どうでも」

「どうでも！？ 母さんそれは酷いカウンターだぞ！！」

「楯無さんはしゃぎすぎです。子供よりもワクワクしてるじゃないですか」

「当たり前じゃないか！！ なんてったって年に一度の行事なんだぞ！！」

「どこにワクワクしすぎて前日一睡も出来ない親がいるんですか」

母さんのが呆れたように親父に言う。母さんの言うとおり親父は一睡も出来なかったのか目の下に隈を作っている。なのにこのハイテンションっぷりは一体何なんだ。睡眠をとらなかったくらいじゃ今の親父は止められないってことなのか……！

「ん、おお形無早いな！ さてはワクワクし過ぎて寝れなかったんだなあ？」

「アンタみてえなのと一緒にすんな」

「酷い！！ 親に対してこの言い草、母さんどう思う！？」

「自業自得です」

「母さんまで!!」

……取り敢えず朝っぱらからカオス全開のこの親父が鬱陶しくて仕方がない。なんだこのテンション。遠足前日の小学生でもこんなワクワクしてないぞ。

「……はあ、取り敢えず落ち着けよ親父」

「体育祭だぞ、これが落ち着いていられ……」

「母さん」

「うん取り敢えず落ち着こうな」

ガクガク震えながら即座に食卓につく親父。やはり今でも母さんがこの更識家で最強の座についている。そのオハナシはこれまで何度親父の心をへし折ってきたかわからない。

先程までのハイテンションぶりが嘘のように大人しくなった親父はそのまま手を合わせ、食事を始めた。

さて。

「なあ姫無。いい加減俺の腕から離れてくれないか」

「いや」

居間に入ってきたときから実はずっと腕にくっついていた姫無に離れるよう進言するが即座に拒否されてしまった。

毎度の如く俺の布団に潜り込んでいた姫無をどうにか起こしここまで来たはいいが腕にくっついたまま離れる気配が微塵も感じられない。

いや嬉しいは嬉しいんだけどこれじゃ飯が食えない。今日は体育祭だからいつもより早く学校行かないといけないし、余り時間もないんだけど。

当然のようにくっついて離れない姫無に母さんたちも何も言わないし、困ったなあと俺が思っていると。

ひしっ

「……………」

空いていた腕のほうに、もう一人の我が妹がしがみついていた。

「…………簪？ 何をしてるんだ？」

「…………お姉ちゃんばかり、ずるい…………」

「いやずるいとかじゃなくてな、飯が食べられないんだ」

「…………食べさせて…………あげる…………」

顔を赤くしてそう言う簪。うん、それは俺としてはとても嬉しい

提案なんだけどな。両腕でしがみついているのにどうやって俺に食べさせるっていうんだ。

「む。何言ってるの簪。それは私の役目よ」

「……お姉ちゃんばかり……私だって……」

俺を挟んで姉妹で口喧嘩みたいなのを初めてしまった。  
頼む。誰か助けてくれ。

「姫無、簪。お兄ちゃんが困ってるでしょう?」

「だってお母さん、簪が……」

「お姉ちゃんが……」

「そんなことしていると嫌われちゃうわよ?」

シュバツ!!

一瞬にして俺の両隣から妹たちが居なくなり、黙々と食事を開始していた。なんつー速さだ。そして母さんグツジョブ。

「いただきます」

そして俺もようやく食事にありつく。やっぱり日本人は白米と味噌汁だよなあ。何かこう安心する味だ。

「……おっと」

こうしちゃいられない。何せ今日は登校してから割り当てられた

教室で体操服に着替えなければならないのだ。故にいつもよりも十五分は早く家を出なければならぬ。起床時間がいつもと変わらない俺は、必然的に朝食の時間を削るしかないのだ。

俺は急いで食事を喉に通し、ごちそうさまと告げて居間を後にする。部屋に戻って制服に着替え鞆を手に取り家を出た。

「おはようかーくん」

「おはよう。今日は千冬はいないんだな」

「うん。なんか剣道部とかの運動系部活は朝から機材とかの運び出しやらされてるみたい。ちーちゃんまで行くことなかったのに」

つまらなさそうに言っ隣を歩き出す束。昨日あんな爆弾発言をしてくれやがったわりには全くもって普通だ。まあ俺も冗談だとは分かってるから気にはしてないが。

「あ、なあ束。今日のプログラムとか持って……」  
「ないよ」

だよなー。

言い出してから気付いたけど完全に聞く相手間違えた。こいつがプログラムなんか持つてるわけない。なんせ去年は一日中保健室で過ごした奴だからな。ただでさえ出ないと言い張っていた束を俺と千冬で説得し参加させたらあのザマだ。

きっと今日も参加する気はないんだろう。

「あ、でもかーくんの活躍はちゃんと見届けてあげるからね」

嬉々と言う束だが、『あ、』と思い出したかのようにみるみるその表情を曇らせていき。

「でも二人三脚のペアがあいつなんて……」

眉間に皺を寄せながら本気でイヤそうに言う束。名前を言うのもイヤなのかアイツ呼ばわりだ。まあ、他人に興味を抱かない束にアイツとして覚えられているという点においてはそれなりに興味の沸く人間なんだろうが。

「ああ織村か。アイツ何かと俺につつかかってくるんだよなあ」

「ほんと鬱陶しーよアイツ。私にベタベタ触ってくるし、吐き気する」

束にとってアイツ、織村一華は汚物か何かと同レベルの存在みたいだ。

確かに『織村一華』なんてちょっと出来すぎた名前だよなあ。千冬が弟と読みが同じだって言って本気で嫌がってたっけ。

……まさか俺みたいな転生者とかじゃないよな？

あるわけないか。まだ原作前だし原作まで生き残れなかったモブキャラなんだろう。

そんな残念なモブキャラである織村だが、実は幼稚園のころからずっと一緒だったらしい（俺は記憶に全く残っていなかったが千冬たちが覚えていた）。

初めて話をしたのは俺が中学に上がってからだ。その時は『俺は

お前と違って選ばれた人間なんだ。嫁は誰にも渡さん！』とかなんとか言っていたが、何のことだか俺にはさっぱりわからん。

……と。

そんなことを考えていたらいつの間にか学校の正門前までたどり着いていた。

グラウンドのほうを見てみれば幾つものテントがトラックを囲み、その上には世界各国の国旗が張り巡らされている。

「じゃあ、男子は更衣室で着替えだからまたあとでな」

「え？ 東さんももちろんついて……」

東が言い切るよりも早く、俺は彼女の頭に拳骨を降り下ろした。

「いったあ！！ かーくんそれは暴力だよ！？」

「馬鹿者これは愛のムチだ」

「あ、ああ愛の！？」

ん？

何故そこで反応するんだ。取り敢えず気持ち悪いから頬に手を当ててくねくねすんのやめろ。

「形無！」

東がくねくねしていると前方から俺の名前を呼ぶ聞きなれた声が響く。

走ってこっちに向かってくる体操服姿の少女の名は。

「おー千冬」

「おはよう形無。……ところであの馬鹿はどうしたんだ？」

「あー、気にするな。病気みたいなもんだ」

「？　そうか。所で、今日は頼むぞ形無。赤組が優勝出来るかどうかはお前の活躍次第なんだからな」

「そんな大袈裟な……」

「大袈裟なものか。形無が一番の主力なんだ。まずは騎馬戦からだが頑張ってくれ」

それだけ言って千冬は本部のほうへと走り去っていった。

やれやれ、やっぱり剣道部だけあって千冬も生粋の体育会系だよなあ。あんなやる気満々なの久しぶりに見たぞ。

「さて、」

俺は未だくねくねしている束を放置して、指定された更衣室へと向かった。



『これをもちまして開会式を終わります。第一種目、男子による騎馬戦に出場される選手のかたは、至急入場ゲートにお集まり下さい』

開会式の司会を務めていた三年生の女子のアナウンスにより、現在俺は入場ゲート裏で競技の開始を待っている。

この騎馬戦はこの学校でもやるような至って普通のものだが、ただ一つ違うのは奪うのが頭に被った帽子ではなく、タモさん風のサングラスだということだ。

どうやら帽子だとゴムを使ったり手で押さえたりといった反則行為も多く、また時間もかかるため時間短縮の狙いもあってこのサングラスを奪い合うというふうに決定が下されたようなのだが……。

なんでサングラス！？

もうほんとこの学校バカなんじゃないかと思う。だいたい考えてもみる。三人に担がれている上半身裸の男子がサングラス装備って、しかもそれが東西で何十人と腕組んで睨み合ってるて。シニールすぎるだろうが。

なんか残念なアンダーン君みたいじゃねえかよ。

「……なあ相模」

「うん？」

現在俺を担いでいるうちの一番前に位置する相模に俺は話し掛ける。

「このサングラス……取っていいか？」

「だめだ」

「だって明らかにおかしいだろうが！！ その上視界最悪だし！！ 委員会もちつとましなもんチョイスしろよッ！！」

「そんなこと言つなよ。……似合ってるぞ（ププッ）」

「よしお前あとで殺すからな」

必死に笑いを堪えている相模に死刑を宣告して、俺は審判に指示され入場ゲートをくぐって所定の位置につく。

あ、因みに赤組と白組、どっちがどっちかを判断する基準は騎馬を作っている男子の先頭が被っている帽子の色だ。

そこは帽子被るんかいッ！！

「はぁ……、なんかもう帰りたくなってきたよ」

「なこと言つなよ更識。堂々としてりゃいいんだよ。ほら、あいつみたいに」

「ああ？」

溜め息をつく俺に相模は顎でとある人物のほうを指し示す。  
そこに居たのは。

なんか誇らしげにサングラスかけて胸を張りながら腕を組むクラ  
スメイト、織村一華の姿。

「……なんであいつはあんなにも誇らしげなんだ」

「サングラス似合ってると思ってんじゃねえの？」

「あれで髪オールバックにしたら完璧タリだぞ」

「確かに……っと。そろそろ始まるっばいぜ更識」

言われて正面に向き直ると、審判であろう女子が空砲のピストル  
を今正に頭上に持ち上げようとしていた。

それを確認した男子たちの表情が引き締まる。闘い前の血がスー  
ツと引いていくような感覚を覚えながら、俺は空砲が鳴るのと同時  
。

「形無いッ！！ やっちまえええええッ！！」

親父の喧しすぎる応援に、思わず落っこちそうになった。

「……あんのクソ親父……！！」

「更識！！ 来るぞ！！」

今すぐにも親父に文句を言いに行きたいところだが、敵がそんな時間をくれる筈もなく、雪崩のようにこちらに襲いかかってきた。

……だめだ緊迫した場面なんだろうけど皆が着けてるサングラスが全てを台無しにしている。

気を取り直し、俺もその流れに乗って白組たちが向かってくる方向へと走り出した。

狙うはサングラス。帽子よりは取りやすいだろうが如何せん視界がモノクロだ。下手に動いてサングラスを自ら落とす、なんて可能性もある以上下手に突っ込むのは愚策なんだが。

「うおおおおおッ！！」

クラスメイトである織村一華は愚直なまでに真っ直ぐ白組の密集地帯へと突っ込んでいった。

あ、騎馬のスピードについてこれずに後ろの騎馬役やってた相撲部のやつがコケた。それが影響して他の二人の騎馬もバランスを崩す。

大きく揺らぐ騎馬。  
そして。

織村<sup>バカ</sup>一華は顔面からグラウンドに激突した。

パリンッ、という何とも小気味のいいサングラスの割れる音が青空の下響き渡る。

「……………」

俺や相模だけでなく、観客含めた全員が言葉を失っている。  
否、この場合何て言ったらいいのかわからない、というのが正しいのかもしれないが。

そんな状況の中、織村はゆっくりと立ち上がり、鼻を擦りながら一言。

「……………くっ、この俺のスピードに常人では付いてこれないか」

「……………」

会場、絶句。

こうして波乱の体育祭は幕を開けた。

# 13 騒々しいのはその時点でフラグ（後書き）

次回

新世紀カタナシゲリオン

晴れ、逃げ出したい

#### #14 拳動不審はその時点でフラグ（前書き）

昨日更新出来ず申し訳ありません；

プライベートが忙しくなってきたから毎日更新、というのは  
難しくなるかも……

なるべく早く更新できるように努力しますが。

そしてお気に入り登録1500件突破ありがとう！！



## #14 拳動不審はその時点でフラグ

前回のあらすじ

体育祭がカオスの予感しかない。

そんなこんなで始まってしまった体育祭。俺が出場する最初の競技でもある全学年男子参加の『騎馬戦』で、同じクラスである織村一華が自滅した。なんとも言えない雰囲気グラウンドを支配しているが、そんなことは気にせず再びサングラスをかけた闘いが始まった。

「形無右から来てるぞ!!」

「了解!」

騎馬の先頭を務める相模の報告で俺は右前方から鼻息荒くしてやってくるデカイ白組へと視線を向ける。

いや、まじでデカイな。

三年生か? 下の騎馬今にも潰れそうになってんだけど大丈夫か?

「グラスン寄越せやガキい!!」

オイオイ俺のことガキ呼びわりですか。

「寄越すわけないでしょう……が!!」

俺は突き出された腕をいなし、逆に相手のサングラスへと腕を突き出す。

「うお!?!」

まさかカウンターを食らうと思っていなかったのかバランスを崩す三年生。それを俺が見逃す筈もなく。

「よいしょつと」

すかさずサングラスを奪い取った。サングラスしてたら太ったエグイルのアシミたいだったけどサングラス取ったらクロちゃんじゃねえか。

「さすが更識。この調子で次行くぞ」

相模がそんなことを言っているが、正直俺はあまり目立ちたくない。

何故かと言うとだ。

「おお形無!! 見事な切り返しだあ!! そのまま全滅させてしまえッ!!」

……あのクソ親父が五月蠅くなるからだ。

頼むから身を乗り出して手をこっちに振らないでくれ。関係者だと思われたくない。

「……はあ、」

既に暴走気味の親父に溜め息をもらしつつ、俺は次の騎馬からサングラスを奪うべく進んでいった。

結果から言えば、俺たち赤組は白組に勝利した。この騎馬戦は時間制限がないため相手の大将となる騎馬を倒した方が勝ちになるんだが（大将はサングラスの淵が金色）それを赤組が先に討ち取ったのだ。

俺は別段活躍する、というわけでもなく向かってくる相手を迎撃していたから余り目立っていない……だがあの親父のせいで全て台無しだ。周りからの視線が痛い。

ほんと、帰りたくなってきた。

「お疲れ形無し」

「おう千冬。サンキュー」

退場ゲートをくぐると千冬がタオルを渡してくれた。今日は日中三十度近くまでになるって言ってたが、既に暑い。俺の額にも大粒の汗が浮かんでいる。

「流石だな。最後まで脱落せずに相手の騎馬を十一も倒すなんて」

「数えてたのかよ。……それはいいんだがアレがなあ……」

「……やはり凄かったな、楯無さん」

「もう勘弁してくれ……」

親父をこういう行事に連れてきたらダメだということを再認識する。次からは来ないように言うか？

……ダメだなあの親父のことだ何があっても来るだろう。

あの親父は子供のためなら平気で国の重要案件をすっぱかすような親バカだ。それこそ母さんが止めてもきつと止まらない。

結局、こういう結果になるってわけかよ。

「あ、そろそろ私も行かなくては」

「次は千冬が出るのか？」

「ああ。借り物競争だからな」

『またな』と言って入場ゲートのほうへと走り去っていく千冬を見送って、俺は指定されているクラスの待機場所へと歩いていく。

すると。

「おい」

すたすたすた。

「おいってば」

すたすたすた。

「待てよおい」

すたすたすた。

「待てつつつてんだろぅが馬野郎ッ!!」

……、馬野郎？

何だよその呼び名は。

ようやく足を止めた俺に満足したのか叫んだ少年、最早言つまでもないだろうが織村一華は得意げにこちらに向かってきた。

「さっきはラッキーだったな」

「……は？」

ラッキー？ 一体何の話をしているんだコイツは。などと考えていると、更に織村の口から言葉が吐き出される。

「俺がアイツらの気を引いたおかげで幾つかサングラス取れただろ」

アイツらつて、ああ。

白組のことを言ってるのか。いやいやアレは完全にお前のミスだしアレのお陰でサングラスを奪えたなんて俺だけじゃなくきつとコイツを除く赤組の全員が思ってると思うんだが。

「そんなMVP並に活躍した俺に何か言うことはないのか？」

……？

俺は織村の意味の分からない発言に思考がストップしそうになる。言うことって『鼻痛くないか？』とかでいいのか？ アレは絶対に痛いだろうからな。

「……………」

「何かあるだろう？」

訳が分からず黙りこくっている俺にイライラしてきているのか足の爪先を執拗に地面にトントンと叩きながら織村が言うが。

「……悪い。何のことを言ってるのか俺にはさっぱりわかんねえ」

しょうがないだろ。

分からないものを言えって言われても言えるわけがない。

と、そんな俺の態度が気に食わなかったらしい織村が再度噴火。そして。

「千冬と束から手を引くって言えよ!!」

今度こそ、俺の思考が停止した。

「この際だから言わせてもらうが、いい加減に嫁達アイツらを解放してやれ!!自由になさせてやれよ!!」

「……………」

アレなのか。

俺の周りにはまともな人間というのが一人としていないのか。

第一、俺は千冬や束に手を出した覚えなんてこれっぽっちもないし、ましてや縛り付けている事実などどこにも存在しない。

であるにも関わらずこんな根も葉も無いことを真剣に訴えてくる目の前の少年。

結論。

コイツはアブナイ人。

こういう人種とは関わらないのが一番、そう思い至った俺は踵を返して再び待機場所へと向かって歩き出す。

「あ、待てよ！！ 自分の立場が悪くなったからって逃げんじゃねえ！！」

逃げてないし立場を悪くした憶えもない。

背後でぎゃーぎゃーと喚く織村を無視して、俺は待機場所へと戻っていった。

騎馬戦を終えた俺は、現在進行形で行われている借り物競争を各クラスに宛がわれたテントの下で相模と二人で観戦していた。

この借り物競争のルールはこの学校でもやっているような普通の借り物競争と同じだ。

ただし。

借りてくるものがとんでもなくハードルが高いことで有名だ。



……ほんとにまともな競技が最初の準備体操くらいしかないのかこの学校は。

去年の例で言えばブルドッグ、ポケベル、自分と身長がミリ単位で同じ人などなど。中にはスキー板などそれ絶対学校にねえだろという物まで出題されていた。

「お、次に走るの織斑じゃないか？」

「ん、ほんとだ」

スタート位置についていた千冬を相模が発見する。スタートの合図である空砲が響き、千冬を含めた六人が一斉に走り出す。

やはりと言うべきか千冬がダントツに速い。他の五人にみるみるうちに差をつけていく。そこらの男子なんかよりよっぽど速い。

そうして一番に紙を取った千冬は　　。

「……？」

何だかいきなり顔が赤くなった。

一体何を出題されたんだと俺が思っていると。

「……え？」

何故か一目散に千冬がこっちに走ってきた。こっちな借り物があるってことなんだろう。俺は後ろを振り返って近くに何かあるのかを確認してみる。

しかし、背後はフェンスしかなくこれといった借り物のお題に出されそうな代物は見受けられない。

何がお題なんだ。

なんて安易に俺が思っていると。

ガシッ

「……え、」

「い、いくぞ」

千冬が俺の腕を掴んで強引に立たせる。

……今年の借り物競争って個人名まで書かれてんのか？ それとも俺に関係するお題なのか？

尚も腕を引かれたまま走る俺は千冬とともにそのまま一着でゴール。親父が何か喚いてたけどどうせ碌でもないことだろうかスルーしておいた。

一着の旗を貰って前方を歩く千冬。なんだかまだ顔が赤いようだが、一体何が書いてあったんだらうか。

うつむ、気になる。

「なあ」

「ひゃいつ!？」

軽く肩を叩くとビクツと上ずった声を上げた。

「な、なな何だ形無!？」

「その紙に何を書いてあつたんだ？」

右手に持っていた紙を見ようと俺がそれに手を伸ばすと。

サッ

「……、」

避けられた。

スッ

サッ

「……なあ」

「何でもない! 大したものではなかつたんだ!！」

いやいや、その挙動不審っぷりじゃあ説得力0だぞ千冬。

「そ、それよりももうすぐ徒競走じゃないか!？」

「いやそれまだ時間あるから」

「アップは必要だ！！ さあさあ、もう行ったほうがいいぞ！？」

ダメだ。

こうなったらテコでも千冬は動かないし譲らない。

「……………はあ」

小さく溜め息を吐いて俺は内容を諦めた。だって今の千冬顔赤くして瞳潤んでんだもん。なんかこれ以上踏み込んだらヤバい気がしたんだ。

しょうがないので、そのまま俺はクラスの待機場所へと戻ることにした。

しかし、一体何があのかの紙には何を書いてあったんだ？  
気になるなあ。

「ふう、」

形無が去っていったことを確認して、私は安堵の息を漏らした。  
キツく握り締められた右手の中にあつた紙に視線を落とし、ゆっくりと折り畳まれたそれを開き。

そこに書かれていたのは。

『想い人』

カアツ、と顔が熱を帯びていくのを感じる。  
こんなもの形無に見せられるわけがない。

見られたら最後、私は恥ずかしさで死ぬかもしれない。  
少なくとも、今はまだ。

「全く、罪作りの男だ……」

ポツリと千冬の口から漏れたそれは、誰に聞かれることもなく青空の中へと消えていった。



#14 拳動不審はその時点でフラゲ（後書き）

次回

新世紀カタナシゲリオン

せめて、無事に終わって

#15 弁当タイムのあーんはその時点でフリゲ（前書き）

やつと一夏、箒が登場。

一言も喋りませんがww



## #15 弁当タイムのあーんはその時点でフラグ

前回のあらすじ  
体育祭は荒れに荒れる

「ふう、」

徒競走を終えた俺は再びテントの中へと戻ってきていた。結果は一位。いやあやっぱ親父との修行で体力ついてんのかね、余裕だった。

一位のバッジを胸につけて帰還すると既に走り終わっていた相模がスポーツドリンクを放り投げてきた。相模の胸にも一位のバッジが付けられている。流石サッカー部だな。

「お疲れさん」

「おう。流石だな相模」

「当たり前だろ。サッカー部がそこの奴に負けられるかよ」

いや俺の隣走ってたのサッカー部だったけど。思いっきり帰宅部に負けてたけど。

あ、だから何か絶望した表情で二位のバッジ貰ってたのか。確かに帰宅部にサッカー部に負けたら立つ背が無いよなあ。

「お前に負けた中田めちゃくちゃ落ち込んだぞ」

「いやそれを俺に言われても」

「まあ更識は帰宅部にカウントしちゃいけないよな。運動部にカウントしてもそのチートな運動神経なら間違いなく上位だろうし」

「買い被りすぎたって」

「どこの世界に一〇〇メートルを十秒フラットで走る帰宅部が居るんだよ」

え、此処にいますけど。

……やめろそんな『人外』のものを見るような眼でこっちを見るんじゃない！！

俺の場合は帰宅部って言っても家で更識流の柔術アやってるし、一方通行のベクトル操作もあるからスペック的には完全に人外クセラレタなんだろうが、そんなこと俺は決して認めないぞ。

「お、次走るのアイツじゃねえか」

手で日差しを作りグラウンドのほうを見る相模が言うので、俺もそちらに視線を向けていると。

「……うわ、」

思わず口に出てしまった俺は悪くない。

いやだつてさつき『俺の嫁たちから手を引け！！』的なことを堂々と言い放ちやがった非常に残念でアブナイ性格の持ち主、織村一華なのだから。

「アイツも黙つてればイケメンなのに、口を開いたらホントに残念な奴だよなあ」

相模が苦笑しているがそんな生易しい性格してねえぞアイツは。  
良いのは多分容姿<sup>ルックス</sup>だけ。中身はなんだかよくわからん奴だ。難しい問題をスラスラ解いていたかと思えば基礎を全く知らなかったり、運動もまた然り。

周りからも認められて『天才（災）』と称されている束とは違い、織村の場合は自称天才。はつきり言つて束とはレベルが違う。

以前俺と束がIS開発の設計図を二人で見ながら話をしていた時、アイツが我が物顔で話に割つて入ってきたことがあった。俺は何かと思つて話を聞いてみれば、どうやら織村も工学には強いのか設計図らしきものを見てペラペラと自慢気に束に向かってここがどうだのこれはああだの話し出したのだ。

あ、束はガン無視してたけどな。

それに気付いてか気付かずかは分からんが話し続けた織村は『まあ、つまる所』と一拍おいてから。

『束には俺の頭脳が必要なんだ』

……ええ。

今の束のガン無視をどう都合のいいように解釈したらそんな事が言えるんだ。もし俺が束にガン無視されたら完全に心が折れ……たりはしないな。だって束だし。未だに俺の部屋に隠しカメラとか平気で仕掛ける奴だし。

でもこれが姫無や簪だったら俺はもう生きていけない。姫無たちに無視されるとか、考えるだけで寒気がする。

話が逸れたが、まあつまり何が言いたいのかと言うとだ。

俺アイツのことはどうも好きになれん。  
というか嫌いの部類に入るな。

小学校の頃まではこうまで露骨なナルシストじゃなかったと思うんだが（形無は中学まで織村の存在を気にも留めていないので覚えていない）、こんな俺毛嫌いされてたのか？

俺何かしたか？

「はあ……」

「どうしたよ更識。じじいみたいな溜め息ついて」

「午後からの一発目でアレと二人三脚しなきゃいけない俺の身にもなってくれ……」

「ああ……御愁傷様」

「……っ！かこの組み合わせにしたのお前たる相模」

「（ギクッ）……え？ いやその……待て待て待て！！ 何だその高々と掲げられた右拳は！！」

「そっ！いや俺騎馬戦のときお前に死刑宣告出してなあとと思って」

「ストップストップ！！ 一回落ち着こう更識、早まるなまだ間に合う！！」

「間に合わないから」

直後、テント内に鈍器で殴ったかのような鈍い打撃音が響いた。

さて、午前中の競技が全て終了したので現在俺たちはブルーシートの上で弁当タイムだ。

俺たち、というのは親父に母さん、姫無簪と千冬と束、それに一

夏と筭たちである。今日は土曜日だから小学校も幼稚園も休みだからな、やっぱり賑やかなほうが楽しいし。

でも束、お前は今まで一体どこで何をしてたんだ？全く見当たらなかったんだが。

「しかし流石だな形無！父さんは鼻が高いぞー！」

「俺は親父のせいでテンション低いんだが……、母さんちゃんと親父を見張っててくれよ」

「あらあら。じゃああとでオハナシしないといけないわね」

「すまん形無父さんちよつとはしやぎすぎたかもしれん」

「いやちよつとじゃねえし」

母さんお手製のおにぎりを食べながら俺は小さく溜め息。いやおにぎりはすごい美味いんだけど親父の暴走が俺の中で味を台無しにしているんだ。

「……お兄ちゃん、これ……」

「ん？ ウィンナーか」

隣に座っていた簪がおずおずと先端に均等に包丁を入れた赤いウィンナー、俗に言うタコさんウィンナーを箸で差し出してきた。

「ありがとな簪」

差し出されたウィンナー。これは食べると言っているんだろうから俺は素直に受け取ることにする。なんたって愛する（家族として）妹からのお願いだからな。断るわけがないじゃないか。

「それじゃ遠慮なく」

そして俺は、簪が箸でつまんだままのタコさんウィンナーを手で取って自らの口に放り込んだ。

だって箸渡しは行儀悪いだろう？

「……………」

「……ん？」

えーと、簪？

なんでそんな『嘘でしょう……？』みたいな絶望した表情で俺を見てるんだ？

俺が何かマズイことしたのか……？

因みに今の簪は右手で箸を持ってタコさんウィンナーを何故か俺のほうへ近づけ、左手はそれに添えるように少し下に置かれている。これは言うなれば『あーん』スタイルみたいなんだが……………

そういうことかぁ！！

俺はバカか！！

どっかの鈍感主人公みたいなことしてしまったが普通に考えれば分かるだろう!!

「かか簪!？ 悪かった、だからそんな顔しないでくれ!!」

既に目尻に涙を溜めていた簪を宥めるべく俺はあたふたと画策するが。

ふにつ

生暖かい何かが俺の頬に触れた。

……何故だろう。

とてつもなく嫌な予感がするんだが。

恐る恐る俺がそちらに顔を向けてみれば。

「……………」

「えーと……、姫無？」

顔は笑顔だが無言で俺の頬に玉子焼きをぐいぐい押し付けてくる姫無の姿が。

「兄さん、あーん」

「ひ、姫無？ なんでそんな笑顔で背後にどす黒いオーラを纏ってるんだ？」

「あーん、でしょ？」



「敢えて言おう。  
ガチで怖いと！」

六歳でこんな殺気混じりのオーラを出せるなんて姫無、恐ろしい子。いや、そんなこと言ってる場合じゃないな。右も左も箸片手に『あーん』なるものをさせようとしてくる我が妹たちに挟まれてしまつて完全に逃げ場がない。

いや、嬉しいか嬉しくないかつて聞かれたらそりゃ嬉しいって答えるさ。答えるけど、それはあくまで自宅内の話で、尚且つ姫無簪が普通の状態だつたららの話だ。

俺はこんな冷や汗まみれの両手に花状態は望んでない。

「ほら、あーん」

玉子焼きをぐいぐいと尚も押し付けてくる姫無をまず満足させるべきだろうか。

……いや、そうしたら完全に簪が泣く。既に目は潤んでいてここかのチワワみたいになってしまっているんだから、限界はかなり近いとみてまず間違いないだろう。

ならまずは簪のタコさんウインナーに手を出すべきか？

……いやそれもダメだ。

そうすると姫無の機嫌がますます悪くなる。最悪口を聞いてくれないかもしれない。もし万が一そんな事態になれば俺は間違いない寂しさで死ぬだろう。

どっちを取ってもバッドエンドしか見えてこないこんな状態を、一体誰が予想しただろうか。

まあ確かに昔バッドエンドしか見えなくなりそうだと言った記憶はあるが、まさかそれが体育祭の昼休みに発生するとは夢にも思

わなかったよホント。

しかしどうするよ。

どーすんの俺。

この状況を誰も傷付けずに打破するには、一体どうしたらいいんだ。

「形無」

すると、そんな状態の俺を見かねてか正面に座る千冬が声を掛け  
てきた。

助けてくれるのかと思ひ俺は心底安堵した。流石は『いつメン』、  
仲間がピンチのときに必ず駆けつけてくれるヒーローよろしく、俺  
を窮地から救い出してくれるのはさながらホントにヒーローみたい  
だ。

だが。

「その、まあなんだ……このエビフライも、なかなかだぞ……？」

ずっと、とエビフライを箸でつまんで俺のほうへと差し出してく  
る千冬。

……こいつ火に油どころか原油一斗缶まるごとぶち込みやがった。

「……千冬さん。兄さんは私の玉子焼きを食べるんだから邪魔しないでください」

「ほう。言っじゃないか姫無。だが形無はエビフライのほうを食べたそうぞ?」

「……お兄ちゃんは……私のを、食べるの……」

ダメださらにカオスになってる。左右正面から箸を差し出されるなんて経験、きっと俺が世界初なんじゃないだろうか。

どうにかしてこの場を収めて脱出しなくては。俺は助けてくれそうな人物を見回してみるが。

……ダメだまともな人種がない!!

親父はなんかニヤニヤしながらこっち見てるし母さんも傍観を決め込んでいるのか頬に手を当てニコニコ微笑んでいるだけ。箒も一夏も今のこいつらを止める術は持っていないだろうし。

畜生ここに俺の見方はいないのかよ!!

「かーくんかーくん」

と、そこに今まで黙々と箸を進めていた束がようやく口を開いた。彼女の弁当箱は既にからっぽになっており食材の類は残されていない。

ということとは、この『あーん』に参加されるということはないと

いうことになる。

「束……！」

俺は珍しく頼りになりそうな束を正直見直した。だからこそ、俺は束が次に言った言葉が一瞬理解できなかった。

「かーくんには食べ物なんかじゃなくて、私を食べて欲しいな」

……え？

その言葉に俺だけでなく千冬の動きまでもが完全に止まる。姫無簪の意味が分かっていないように頭上に？マークを浮かべ首を傾げているが、親父たちはニヤニヤ顔がヒートアップしている。

俺が甘かった。

篠ノ之束は『天災』なんだ。

こいつは何の躊躇いもなく、炎の中に核ミサイルをぶち込むような人間だった。

「……はあ」

俺は完全に脱力し大きな溜め息を吐き出す。こうでもしないとや

っ  
て  
い  
ら  
れ  
な  
い  
。周  
り  
で  
姫  
無  
た  
ち  
が  
頻  
り  
に  
何  
や  
ら  
騒  
い  
で  
い  
る  
が、俺  
と  
し  
て  
は  
早  
く  
解  
放  
さ  
れ  
た  
い  
一  
心  
な  
の  
だ  
。

結  
局、千  
冬、姫  
無、簪  
の  
を  
三  
つ  
同  
時  
に  
食  
べ  
る  
と  
い  
う  
こ  
と  
で「  
応  
こ  
の  
騒  
動  
は  
終  
息  
し  
た  
。

そ  
し  
て、午  
後  
の  
か  
ら  
の  
一  
発  
目、二  
人  
三  
脚  
が  
始  
ま  
ろ  
う  
つ  
て  
い  
る  
。

## #15 弁当タイムのあーんはその時点でフラグ（後書き）

一応これからの展開ですが、ISが発表されたら形無たちはIS学園へ。

そこでクラリッサやナターシャたちと出会っ予定です。

次回

新世紀力タナシゲリオン

織村、退場

## #16 天災が見当たらないのはその時点でフラゲ（前書き）

遅くなって申し訳ありません。

これで体育祭は終了。次から皆さんお待ちかね（？）のIS発表に話が進んでいきます。

## #16 天災が見当たらないのはその時点でフラグ

前回のあらすじ

弁当食べるのにあんなに冷や汗をかくなんて思ってもみなかった

さて、現在俺は騎馬戦のときと同じく入場ゲート裏で整列し、午後からの第一種目である『二人三脚』の開始を待っている。

もう言うまでもないのかもしれないが、うちの学校で行われる二人三脚が、そんじょそこらで行われているような二人三脚であるはずがない。

先ず、前提が間違っているのだ。

通常の二人三脚は二人の右足と左足を紐で縛り肩を組んだり背中に手を回すなり、協力して完走を目指すものだが、生憎うちはそんな生易しいものじゃない。

二人の足を縛っているのは、チタン製のロープ。つまり、人間程度の力では絶対に切れたりほどけたりすることのない紐だ。これにより、紐に関連したりタイアは皆無となる。



次にコース。通常の二人三脚であればグラウンドに描かれたトラックを一周、というのが定石だが、うちは校外を走る。交通機関も利用する。ゴールは学校から凡そ三キロ離れたテーマパーク。昔俺と親父、まだ赤ん坊だった姫無の三人が行ったところだ。

そんなわけで最早ミニマラソンのような二人三脚。ゴールまでの道順は特に定められてはいない。更に交通機関の利用も自由。もちろんそこは自己負担だが。去年はタクシーを使う強者までいたような気がする。

とまあ色々言ったが、つまりこの二人三脚、めちゃくちゃ時間かかるし体力的にもキツイってことだ。去年は最後のペアがゴールした時はスタートから二時間以上かかっていた。

当然それに比例して得られる点も高いんだが、はっきり言って割に合わない。

太陽が丁度真上を通過しようというこの昼休み明けの時間帯だ。暑い、ひたすらに暑い。ただ立ってるだけなのに汗が滲んでいる。

そんな過酷な二人三脚をだ。

「……………」

「なんだよじろじろこっち見るな馬野郎」

俺はこんな残念な奴と走らにやいかんのか。死ねる。相模に殺意を抱けるレベルだぞこれ、なんせ相模本人はのうのとテント下で情眠を貪ってやがるんだから。

「……はあ」

今日一日でもう何度目になるかわからない溜め息が俺の口から漏れる。

もうこうなったら腹をくくるしかない。

「おい馬野郎」

「あん？」

馬野郎って前々から思ってたけど何処から来た渾名なんだ？

「俺の足を引っ張りやがったら承知しねえからな。精々必死に走れよ」

……………。

いや、うん。もう織村がこういう奴だったのは分かってるんだけどさ、何でこんなにも上から目線なんだ？俺はそこまで気にしないけど他の奴らはそうとは限らないんだからもう少し友好的になってもいいと思うんだが。

「いいか。俺はこの二人三脚、絶対に勝たねばならん理由があるんだ」

おいなんか饒舌に語り始めたぞ。  
どうしようこれ内容聞いた方がいいのか？なんかそんな雰囲気な

んだが。

「その理由……聞きたいか？」

聞きたくないです。

「ふん。お前ごときに教えるわけないだろ」

それは良かった。

こっちとしても好都合だ。二人三脚前から何も疲れることもないだろ。

「……だがまあ、一応お前にも関係なくはない話だからな、仕方ないから教えてやるか」

「いや俺は別に……」

「お前がどうしてもって言うからだぞ？心して聞け」

いやまずお前が人の話を聞けよ。

……ダメだコイツ全然人の話聞いてねえ。

「俺はな、決めてるんだ」

どうしよう話し始めちゃったぞこれもう収集つかねえよ。

「この二人三脚で一位を取ったら、彼女たちに嫁に来てもらうってな」

「……………は？」

彼女たち            というのはまあ間違はなく千冬と東のことだろうな。これまでも散々アプローチしてたみたいだし。

だが、それが上手く行った試しはこれまで一度もないように思うんだ、うん。千冬には本気でイヤそうな顔をされ、束に至っては取り合おうともせずにガン無視。

なのにこつても自信満々に言い放てるコイツ、織村のこの自信は一体どこから来ているんだ。

「俺の夢を叶えるため、そして彼女たちと一緒にするため！！この二人三脚で俺は一位にならなければならんだ！！」

「……言いたいことは分かった。いや分からんけど。でもさ、その嫁がどうとかって千冬たちには了承は得てんのか？」

もしも、千冬たちがそれを了承しているのなら俺は別に何も口出しするつもりはない。まあ、多分そんなもの取っていないんだろうけど。

「彼女たちは恥ずかしがりや、もといツンデレだからな。好きな相手の前じゃ素直になれないのさ」

なんてめでたい思考回路の持ち主だ。織村にはマイナス思考とかネガティブ思考とかそういうものが備わってはいないらしい。

「というわけで、足引っ張んじゃねえぞ馬野郎！！」

「はいはい……」

うんざりだ。

これから俺はこんな残念な人間とチタン製のロープで足を縛られて校外を走らなきゃいけないのか。

見せしめもいいとこだろ……。

『二人三脚に出場される選手の方々は北門に移動してください』

入場ゲート裏で待機していると体育祭の実行委員が拡声器を使って俺たちに指示して移動を促す。

うん。移動してから足縛ってくれる？

歩き辛くてしょうがないんだがこれ。隣の奴は歩幅合わせようともしないし。

「ちよつ、歩幅合わせてくれよ」

「あん？ お前が俺に合わせればいいだろうが馬野郎」

「……………」

此処はキレてもいい場面なんだろうか。

俺滅多に怒ったりしないけど中々にフラストレーションが溜まってきたような気がする。

と、そうこうしているうちにスタート地点である学校の北門に着。周りをザッと見渡せば二百人、百ペアくらいはいるだろうか。

周囲は人でごった返しているのでこの暑さと相まって熱気が半端ない。

うわ俺の前に居るの相撲部だ。汗臭いからちよつと離れ……しま

った織村の足に縛られたままだった。

『それでは、位置について』

体育祭実行委員の制度がピストルを高々と掲げて耳を塞ぎ。

『よい、ドン！！』

パン！！ という小気味のいい発砲音とともに、総勢一〇〇ペアを超える生徒たちが一斉にスタートした。俺たちもその流れに乗って走り出す、が。

「おい馬野郎出遅れてんじゃねえか！！」

「織村出す足が逆だ逆！！」

スタートダッシュは完全に失敗。最後尾のほうに一気に下がってしまった。

「チッ、馬野郎のせいで遅れちまったじゃねーか！！」

「お前のせいだよ！！」

いつまで足を逆にしてんだ。普通お互いに確認し合って進むだろうが。一人で走りだそうとしてるコイツを誰か止めてくれ。

そんな開始直後から仲間割れ寸前の俺と織村はやっこの思いで北門を出て、ゴール先であるテーマパークへと向かう。

だが今まで組んだこともないような人間同士、そんなに上手くい

くはずもなく、壊れかけのロボットのようにカクカクとゆっくり進んでいく俺たち。

「このままじゃ一位どころかゴールできるかどうかも怪しいなあ……」

「おいブツブツ言っていないでちゃっちゃと走れよ!」

「いやもう優勝は無理だと思うぞ? タクシーでも使えば話は別かもしれないが、それも誰かやってるだろうしな」

「ぐぬぬ……こうなったら逆転のためにはアレを使うしかないか……」

なんか一人でぼやいてる織村は放っておくとして、これからどうしようか。

実質的に一位はほぼ無理だと言っていいだろう。既に俺たちの周りには誰も居ないし、最後尾であることも間違いない。

だがこの二人三脚の配点は高い。一位は取れないまでも、なんとかして得点圏内でゴールしたいところだが。

となると。

(能力……使うしかないのかなあ……)

全く気乗りはしない。

隣の織村にバレることになるし広まれば面倒なことになる。

しかし解決策がそれ以外に思いつかないのだから仕方ない。

（走るようにしてベクトルを操作すれば……いけるか？）

そんなことを考えている俺の隣で、織村がおもむろにズボンのポケットの中に手をつ込んだ。

そこから取り出されたのは。

「携帯……？」

「ああ。これでへりを呼ぶ」

とんでもないことを言い出した。

「はあ！？ それルール違反だぞ！！」

「はん、んなもんバレなきゃいいんだよバレなきゃ」

得意気に言い張る織村だが、コイツは二人三脚における監視の厳しさを理解していない。スタートからゴールまでの区間の至るところに監視カメラと監視員がつき、生徒たちに不正がないよう目を光らせているのだ。

それを織村は何のことないと言つように携帯を取り出し、あまつさえへりを呼ぼうとしている。

バカだろ。



「あ、もしもポールか。至急へりを一台用意して……  
…って何だお前ら！！ 離せ、離せよ！！」

携帯を使用した瞬間、学校の教員数人が一気に織村を取り囲み、  
持っていた携帯を直ぐ様取り上げた。

「携帯の使用、及び交通機関以外の移動手段の使用はルール違反だ」

「ああ！？ 知るか、俺には果たさねばならない約束があるんだよ  
！！」

両腕をガッチリとホルドされた状態で教員に食って掛かる織村  
に対し、教員たちは数秒目配せして。

「更識・織村組。ルール違反により失格とする」

「なっ！？」

「はあ……」

俺は織村が携帯を取り出した時点で薄々こうなるんじゃないかと  
は考えていたためそれほどの驚きやショックはないが、織村は信じ  
られないものを見るかのように啞然としている。

「ふざけんな！！ 失格なんて俺は認めねえぞ！！」

いやもう失格でいいよ。

これ以上織村と一緒に居ると頭が痛くなってくる。

「教員に反抗。これもまたルール違反だぞ織村」

「うるせえ！！俺には待つてる人がいるんだ……あいつらのためにも、俺は一位でゴールしなくちゃならないんだよッ！！」

足をチタン製のロープで繋がれたままなので織村の叫びがダイレクトで俺の耳に届く。耳キーンてなるからやめてほしい。

「……（すっ）」

すると教員は無言で織村に向けて何かを差し出した。  
トランプのようにも見えるその特徴は、真っ赤であるということ。

レッドカードだ。

意味は言うまでもない。退場である。

バツンッ、と俺と織村を繋いでいたロープを教員の一人が切り、織村を拘束して学校へと引きずっていく。

「なっ、離せ！！」

「織村、お前は一発退場だ。以後一切の競技への参加は認められんしグラウンドへの進入も禁止だからそのつもりでな。ああ、更識はクラスのテントに戻りなさい」

それだけ言って教員たちは織村と教官室のほうに消えていった。

「はあ、出る意味なかったじゃねえか……」

今日一番の溜め息を吐いて、俺はとぼとぼと待機場所であるテントへと戻っていった。

もう織村と関わらないようにしようと思いつきながら。

二人三脚を失格になった俺はテントに戻って身体を休めることにした。当然そこで惰眠を貪っていた相模に多大なるダメージを与えてからだ。本当は身体よりも精神が疲れているんだが、このうだるような暑さのせいで体力とやる気も汗とともに外へ流れてしまっているかのようだ。

結局一位でゴールしたのは我らが赤組の三年生で、時間は三十分

と少し。例年に比べれば速いタイムだ。

そんなこんなで残されている競技は残り一つ。体育祭の花形と言っても過言ではない、団別対抗リレーだ。

この競技だけは他の学校とルールは同じで、赤組と白組から選出された生徒各十二名がリレー方式でトラックを一周ずつ走るものだ。例年この競技の盛り上がりは半端ではなく、しかも今年は稀に見る混戦でこれに勝った組が優勝だというから生徒たちの応援も最高潮に達しようとしている。

そんな中、テントから出た俺はというと。

「形無。大丈夫か？」

「まあ、二人三脚は参加してないも同然だからな。体力的には余裕だよ」

「そうか。ならいいんだが」

現在俺はトラックの内側で千冬と会話中だ。選手に選ばれてしまった俺たちは四〇〇メートルを走るわけだが、こんな大声援の中を走るのは正直気が引ける。

盛り上がるのはいいことなんだが。

……親父も盛り上がっているのが問題だ。

「形無い！！一位を取るんだ一位を！！」

お前どつからそんなもん持ってきたんだとツツコミたくなるような代物、チアリーダーとかがよく使うポンポンを上下に振る親父はリレー開始前から既に暴走モードに発展。  
勘弁してくれ。

因みにこのリレーにも選出されていた織村がレッドカードで一発退場を食らってしまったため、相模が二回走ることに。御愁傷様だな、ほんと。

「む、どうやら始まるみたいだぞ」

「お、」

赤組の第一走者はサッカー部の相模だ。彼は二回走らなくてはならないためにこの走順に宛てられたんだが、スタートダッシュには持つてこいの人物だ。因みにもう一回はアンカーである。

『位置について、よい』

ドンッ！！ という言葉と同時に赤組と白組の第一走者がスタートする。

流石は抜擢されるだけのことはあり、二人とも俊足だ。

「流石はサッカー部一の俊足。はえーなあ」

白組の第一走者もバスケット部のレギュラーだが、やはり相模のほうが速くトラック半周の時点でメートル程の差をつけている。

「頑張れよ千冬」

「ああ、なんとしてもトップで帰ってくる」

赤組の第二走者は千冬。正直相模から千冬へのバトンリレーは最強だと思つ。なんてったって千冬は女子で学校一の運動能力を持ってるからな。

「織斑！」

「任せろ！」

パシッ、と相模からのバトンを受け取った千冬は直ぐ様加速。みるみるうちに白組の女子を引き離していく。

これはもう赤組（俺たち）の圧勝だろう。

そう思っていたんだが。

「……まじか」

相模と千冬が作ってくれた約半周もの差が、第十走者にバトンが渡る頃には差がなくなり、あろうことか白組に逆転を許してしまっ

た。

第十一走者の俺は小さく溜め息。

「はぁ……、これ一番プレッシャーかかる場面じゃないか？」

赤組のアンカーは相模だから滅多なことでは負けなと思うが、如何せん彼は既に一周走っている。その疲れを考慮するなら、ここは俺がもう一度逆転するのがベストだろう。

「じゃあない、頑張るか」

少しだけずるさせてもらおうか。バトンを受け取った俺は足の裏にかかるベクトルを操作、流石に原作の一方通行アクセラレータのように弾丸の如く突っ込むみたいなのはせず、以下にも走っていますという感じでスピードだけ上げている。うん、まあ五十メートル五秒フラットくらいかな。

「うぉ！？」

前方を走っていた白組の男子がそのあまりの速さに驚愕しているが、無理もない。こんなの普通の男子中学生が出せる速度じゃないからな。

あっという間に俺は白組を抜き去り、再び赤組が一位に。

「流石『究極の帰宅部』だな更識！！」

「お前次にそれ言ったら殴るぞ！！」

アンカーとしてスタンバっていた相模と軽口を叩き合いながらバトンパス。さっきの疲れを感じさせない走りを見せる相模がそのまま逃げ切って赤組が勝利し、総合優勝が決定した。

「お疲れさま」

「おう千冬。お疲れ」

走り終えた俺のところに千冬がやってきて労いの言葉を掛けてくれた。

「しかしまあなんだな。形無の運動能力は最早人外だな」

「お前には言われたくないんだけど」

ん？

そういえば。

「束はどうしたんだ？」

「二人三脚が始まるまでは一緒にいたんだが、また日射病で保健室にでも籠ってるんじゃないか？」



「んっん」

千冬の予想通り、束は保健室の一番端のベッドの上に居た。  
だが具合が悪く寝込んでいるとかいうことではなく、寧ろ今の束には一種の達成感に満ちた表情を浮かべている。

束の視線の先には、空間投影式のディスプレイ。その画面の中央に表示されているのは『complete』の文字。

束は『うん』と軽く背筋を伸ばして。

「できたっ」

#16 天災が見当たらないのはその時点でフラゲ（後書き）

次回

新世紀カタナシゲリオン

終わる平穩

## #17 ISの完成はその時点でフラゲ

前回のあらすじ

体育祭は散々だった

体育祭が終わった次の日、つまり日曜日。俺と千冬は束に呼び出されて朝早くから篠ノ之道場へ足を運んでいた。昨日の疲れからかまだ睡魔が俺を誘惑してくるがなんとか振り払い、道場内へと足を踏み入れる。

「お、形無君に千冬ちゃん。おはよう」

「おはようございます柳韻さん。相変わらず早いですね」

「はは。道場師範たるもの毎朝の道場掃除は日課みたいなものだからね。もう当たり前になってるよ」

この人は束、篁の父親でありこの篠ノ之道場の師範も務める篠ノ之柳韻さんだ。俺も小学校のころから稽古をつけてもらったりと色々お世話になっている。

……中学で帰宅部だということは伝えていない。

「どうだい形無くん。また稽古しようじゃないか」

俺の専門は更識流の柔術で、それは柳韻さんも当然知っているがどうやら俺は剣の筋がなかなか良いらしく、事あるごとにこうし

て稽古に誘われている。

誘って貰えるのは光栄なんだが、この柳韻さん。たとえ子供であっても全くと言って言いほど容赦がない。当時小三だった俺は柳韻さんの竹刀に叩きのめされたのは苦い思い出だ。あの時はまだ超能力が使えなかったし。

「いやあ、折角ですけど今日は束に呼ばれて来たので遠慮しておきます」

「ああ、そうだったね」

思い出したように言う柳韻さんは一拍おいて。

「……束が少しずつだが他人に心を開くようになってきたのは君たちのお陰だ。これから、束のことをよろしく頼むよ」

「……はい」

「分かりました」

俺と束は柳韻さんの言葉に確かに頷き、道場を後にして束の私室へと向かう。

「束の部屋に来るなんて久しぶりだな」

「そうなのか？ 私はしょっちゅう来ているが」

「あんな、千冬は女で俺は男だ。俺は気にしないけど普通この年頃の男は頻繁に女の部屋に出入りしたりはしないって」

「むう、そういうものか？」

「そういうもんだ」

「なら形無は束の部屋に入るのに緊張とかしているのか？」

「いんや全然。自分ん家となんら変わらん心境だ」

「ならいいじゃないか」

「俺ん家に盗聴器とか仕掛ける奴の家に進んで来ようとは思わないだろ……」

だいぶ数は少なくなったが、未だに束は俺の部屋に盗聴器などを仕掛けている。一体どうやって毎回仕掛けているのか非常に気になるどころだが問い詰めたところではぐらかされるのは目に見えているので、最近は反論の余地なく拳骨を束の頭にお見舞いしているが。

「つと、ここだな」

階段を上がって一番奥の部屋。ドアのやや上に『束』というニンジン型のネームプレートが掛けられた部屋の前に到着した俺と千冬は、数回のノックをしたあとドアノブを回し

「かーくん!!」

ドアを開けた瞬間に、サッと身を屈めた。

「ぶへっ!!」

「うわっ!？」

俺が身を屈めて飛び掛かってきた束を避けたために後ろに居た千冬と束が正面衝突。そのまま束が押し倒すような形で廊下にバタリと勢いそのままに倒れ込んだ。

「ひどいよかーくん！！ 束さんの愛をきちんと受け止めてよ！！」

「断固として断る」

千冬を下敷きにしたままの束が顔だけをこっちに向けて何やら言ってくるが、俺は押し潰されるのはゴメンだ。

「束！ さっさと降りろ！！」

「っつんっ！！」

千冬の拳骨が束の頭部に振り下ろされた。

「うう、ちーちゃんの愛が痛い」

ぶたれた箇所を両手で擦りながら涙目で嘆く束を千冬は見事にスルーして、俺と共に部屋に入っていく。

「で、今日私たちを態々呼んだ理由はなんなんだ？」

ピンクで統一されたなんとファンシーな部屋の、これまたファンシーなもこもこベッドに腰を下ろした千冬が早速今日の本題になるであろう話題を切り出した。

これまでも何度かこうして俺と千冬が束の部屋に呼ばれたこと

はあったが、どれも凡人には理解できないようなびっくり発明品を見せられ自慢気に紹介されるという類のものだった。

今回もそういったものである可能性は高いが、俺は心の何処かで言い知れぬ不安を感じていた。

もしかして、ISが完成してしまったんじゃないだろうか。

その線である可能性は高い、というかほぼ間違いない気がする。

だとするなら非常にマズイことになる。

いや、前々から何れそうなるであろうことは原作知識から理解していたが、いざ目の前に迫られてみるとやはり不安が大きい。

だって女尊男卑なんだぜ？ 俺これから社会的地位が急降下していくんだぜ？

「ふっふーん」

そんな俺の心情など全く気にかけない千冬は立ち上がってふふんと鼻を鳴らして。

「ついに完成したんだよ！ あれが！！」

あれ、とは最早聞くまでもない。束が幼稚園の時から構造を練り

画面に出力し、何年もの歳月を経て製作した束の大発明。

「名付けてインフィニット・ストラトス!!」

……ああ。

やっぱり予想通りだったか。

ばばーん!! という文字が束の背後に見えるような気がする。  
束が手元のディスプレイを叩くと、空間投影式の画面が頭上に現れた。

「これは……束と形無が二人で話し合っていたものか!？」

「そうだよちーちゃん。束さんとかーくんの合作、謂わばこれは愛の結晶!!」

「いや違うからな？」

大体、合作なんて言っているが九割九部九厘は束の頭脳が造り出したものだ。俺はそれに少し口添えをしただけ。合作なんて大したことはしていない。

「……これは一体どういう代物なんだ？」

ああ、そうか。

千冬は俺たちの会話に混ざってこなかった（ハイレベルすぎて混ざってこれなかったというのが正しい）から、これが一体どんな物なのかをいまいち解っていないんだ。

「これはねちーちゃん。『IS』ってものだよ!」



「IS……？」

「そう。正式名称はさっき言ったけど『インフィニット・ストラトス』。この束さんの頭脳を総動員して開発した、宇宙空間での活動を視野に入れたマルチフォーム・スーツなんだよ」

誇らしげに言う束からは『すごいでしょ！　誉めて誉めて！』  
というようなオーラがさつきから全開だ。

いや確かにスゴい。

こんな代物、中学生が作れるレベルを遥かに超えているし、実際原作ではこれを発端として世界の軍事バランスは崩壊したのだ。

「……そんなものを作ってどうしようというのだ？」

ふむ。千冬の言うことも最もだ。

実際これが開発されて男からしたら良いことなんて一つもないしな。

だけど何年も束と過ごし、僅かではあってもこのISの開発に携わった俺から言わせて貰えば、開発した理由なんて言うまでもないし、確認するまでもない。

認めて欲しかったんだ。

周囲の人々から、認めて欲しかったんだよ束は。

天才であるが故の孤独というものののだろうか、俺みたいな凡人にはきつと完全に理解することは出来ないんだろうけど、それでも大事な仲間がどんな想いでコレを作っていたのかが解らないほど、俺はバカじゃない。

束はその頭の良さ故に周りを突き放した。自ら。

それは同年代の子供たちがバカっぽくて一緒に居る気になれなかったというのも理由の一つに確かにあるが、本当は怖かったんだ。周囲から拒絶されるのが。自分の頭脳の異常さは自身もよく解っている。だからこそ、拒絶されるのを恐れた。

そして結論に至る。

拒絶されるのが怖いのなら、自分から拒絶してしまおう。

そうすれば他人のせいで自分が傷つくことはないのだから。

そんな考えを持っていた束の前に現れたのが、当時幼稚園児だった俺だ。

俺の頭の良さはあの時の束にとっては衝撃的だったらしい。なにせ異常だと思っていた自分の理論に付いてこれる幼稚園児が居たんだからな。

そこで束の指針は大きく変わる。

周囲を突放すのではなく、認めさせよう。

自分の存在を無視できなくなるくらいの発明をして、世間に認められよう。

そういった考えの結晶と言えるのがこのISなのであり、決して

俺と束の愛の結晶なんかではない。

「すごいな……」

主なスペックを目にした千冬は思わずそう漏らす。

宇宙空間での活動を想定というが、間違いなくこれは地球上で最強の兵器になるであろうことに彼女も気付いたのだろう。基本性能、特性、装備、活動時間。どれをとっても現存するどの戦略兵器よりも上だ。それも圧倒的に。

「……で？ 完成したはいいがこれからどうするんだ？ まさか完成させて終わり、じゃないんだろう？」

「あつたりまえだよかーくん！！ 直ぐに日本政府とかにこのこと言っただよー！！」

「それで？」

「バカバカしいって一蹴された……」

当然といえば当然の反応だな。

いきなり宇宙空間で利用できる飛行パワードスーツを女子中学生が開発しましたなんて一報を入れて信じるほうがどうかしている。

「まあそれが普通の反応だな」

「だからね」

……………なんだかすごく嫌な予感がするんだが。

「これから日本に発射されるミサイルの雨を、このISを使って迎撃させようと考えたの」

あ？ まさかのこのタイミングで？

#17 ISの完成はその時点でフラゲ（後書き）

次回

新世紀カタナシゲリオン

決戦、太平洋上空（泣）

#18 勘違いはその時点でフラグ（前書き）

遅れてすみませんでした；  
今日から12月ですね。

## #18 勘違いはその時点でフラゲ

前回のあらすじ

まさかの爆弾発言に俺、絶句

東は俺と千冬の目の前で、とんでもない事を言い出した。

「私のISがすごいってことを証明するために、日本を射程圏内とする世界のミサイル基地のコンピュータを一斉にハッキングしたの」

「…………え？」

なんとか硬直から立ち直った俺は冷や汗をたらたらと流しながら束のほうを見る。彼女からは『してやったり』的な悪どい笑みが零れているが、そんな悠長なことをしている場合じゃないだろう。

というかこれってまさか『白騎士事件』か？ 白騎士事件ってISの発表から一ヶ月くらい後だったと記憶してたんだが、どうにもイレギュラー因子（俺）がいるせいで少なからず原作に影響を及ぼしているらしい。

「た、束！ 何てことをしているんだお前はっ！！」

俺に遅れること数十秒、ようやく復活した千冬が発した第一声はそれだった。無理もない。この話が本当だとしたら、世界各国の軍事基地から発射された数千発ものミサイルが日本に向かってくるというのだから。

「今すぐに止める束！！」

「うゝん、それがもう無理なんだよちーちゃん」

「なっ！？」

「だって、もうミサイルは発射されちゃってるんだもん」

流石といふかなんというか、この天災は行動が異常に早い。これがISの価値を見せつけるためのマッチポンプだというなら、やっぱりこの後の展開は原作の通りに進んでいくんだろうか。

「  
場所は？」

俺はとりあえず、ミサイルの着弾地点として設定されている場所を束から聞くことに。

マッチポンプならば、束が日本各地に着弾地点を分けるようなこととはしない筈だ。出来るだけ派手に、かつISがどれほど優れているのかを世界に見せつけるためには、着弾地点は一ヶ所に指定されているはず。



「ミサイルの着弾地点に指定したのはどこなんだ？」

「国会だよ」

サラツとなんとはなしに束は言ったが、それを聞いた千冬は血の気が引いていくかのように顔色が悪くなっていた。俺はなんとなく予想はついていたので千冬みたいに驚きはしないが、それでも目の前にいる少女の規格外さを改めて思い知らされる。

僅か十四歳、中学二年生の少女が全世界の軍事基地のコンピュータを手玉に取り、あるうことが日本の中心である国会に向けてミサイルまで発射させてしまうのだから、異常なまでのその手腕に舌を巻くばかりだ。

……おっと。

そんな悠長なことを考えている場合じゃなかった。このままじゃ日本の中心地が消し飛ぶことになってしまう。比喻でもなんでもなく、リアルに。

「ど、どうするんだ！？ このままじゃミサイルが日本に……！！」

「大丈夫だよーちゃん。そのために、このISがあるんだから」

言って束は空間投影式のディスプレイを見ながらカタカタとキーを叩き、何やら新しいフォルダを呼び寄せる。

ああ、成程。

アレを呼び出すつもりなんだな。

束が数年の歳月を掛けて製作したIS、その雛型にして第一世代

型IS。

「ちーちゃん、これに乗ってミサイルを迎撃しちゃって！」

「なあっ!？」

突然の迎撃宣言に驚愕する千冬だが、直後に現れたISを目に  
して息を呑んだ。

「……これは……」

「東さんが丹精込めて造った第一世代型IS、『白騎士』」

白騎士。

そう呼ばれたその機体は、白すぎるほどに純白の機体だった。  
宇宙空間での活動を想定していたためかやや無骨なナリをしてい  
るが、これからフィッティングなどを経てよりフォームはシャープ  
になっていくんだろう。

「さあさあちーちゃん。この白騎士に乗ってミサイルをぶっ飛ばし  
ちゃおう！」

「そんなこと出来るわけがないだろうっ!？」

うん。まあ千冬の言うことも最だな。

いきなり見たこともないような機体出されてハイ乗ってミサイル  
を撃墜してくださいって、これなんて無理ゲー状態だよ。俺だっ  
たらそんな自殺行為は絶対御免だ。

だけど。

これは千冬が乗らないといけない機体だしなあ。ていうか千冬が乗らないと日本が終わる。俺は男だからISには乗れないし、束が乗ると思えない。

「千冬」

「形無……？」

「これは、お前にしか出来ないことなんだ」

「形無にも出来るだろう！？」

「それは……」

「無理なんだよ。ちーちゃん」

俺の言葉を次いで、束が変わりに話し出した。

「どういつわけか、このISは女性にしか動かせないんだよね」

「女性だけ……？」

「そう。だから残念だけど、かーくんにはこの白騎士に乗ることはできないんだよ」

「……そういうことだ」

実際に男性がISに乗れないということが分かったのは完成間近になってからだ。起動実験という名目でまだ未完成ながらもある程度の性能は既に出来上がっていた白騎士を起動させようと俺が機体

に触れても、何も起こらなかった。束が触れると通常通り起動したんだが、やはり俺は何度触れても機体はうんともすんとも言ってくれなかった。

やっぱり男である俺にはISの適性は備わっていないらしい。

というわけで、日本を守るためには千冬がこの『白騎士』に乗るしかないのだ。

本当なら千冬をそんな危険地帯になんて行かせたくないし、出来ることなら俺だけでミサイルを撃墜してやりたい。

でもそれは俺の我が侭であるし、何より束のISを世間に認めさせるためにはISに乗れる千冬が大々的に活躍しなくてはならない。

心苦しいが、千冬に頑張ってもらうしかない。

「千冬……」

「……分かった」

暫しの沈黙のあと、覚悟を決めたらしい千冬が一言呟く。その表情に戸惑いはない。

「束。コレはどうやって装着するんだ」

「これはちーちゃんが乗ることを想定して造つてあるからフィッティングまではすぐに出来るよ。あとはちーちゃんの思う通りにこの白騎士が動いてくれる」

「ふむ。よし……、」

瞳を閉じ、白騎士へと手を伸ばす。そしてその手が白騎士の機体に触れた瞬間、目映い光とともに千冬は世界で最初のIS、『白騎士』を身に纏った。

「どう？　ちーちゃん」

「……まるで生身のようだ。こんなにも動きがスムーズなものなのか」

「まだまだ改良の余地はあるけど、ミサイルを叩き落とすくらいなら造作もない筈だよ」

流石は織斑千冬というべきか。普通の人間が初めてISに乗ったらこんなふうにいきなり自分の手足のように動かすことなど不可能だろう。

「行けそうか？」

「やってみなければ分からないが、最善は尽くすつもりだ」

手を開いたり閉じたりして感覚を確かめながら言う千冬からは、隠しているつもりのようだ。がやはり僅かな不安感を感じとれる。

後の『ブリュンヒルデ』と言っても今はまだ十四歳の中学二年生。IS搭乗時間0の状態でいきなり危険な行為をしようとしているんだから無理もない。

だが、そんな危険地帯に千冬たった一人で行かせるほど俺は腰抜けではないし、最初から覚悟は決めていた。

「俺も行く」

「「え？」」

俺のいきなりの発言に、千冬だけでなく束までもが素っ頓狂な声を上げた。

「か、かーくん？ かーくんはISに乗れないんだよ？」

「わかつてる」

「連れていけるわけがないだろう！？」

「大丈夫だ」

はあ。本当なら、千冬や束にだってこの超能力のことは黙っておきたかった。そうすることが俺にとっても彼女たちにとっても最善だと思っていたからだ。超能力なんてオカルト紛いのものを誰が信じる、言ったところで一笑に臥されるのがオチだ。だから俺は本当に必要なとき以外このチカラを使うつもりなんてないし、二人にだって話すつもりはない。

……そう、思ってたんだけどなあ。

千冬は俺と束を信じてISに乗ってくれた。もしかしたら死ぬかもしれない位危険な場所へ、恐怖を押し殺してそれでも行くと言ってくれたのだ。

なら、俺だけのうのと待っているわけにはいかないだろう。

本質の部分で行かないほうが良いというのはわかっている。原作通りだとしたら二千発以上のミサイルを千冬は撃墜し、無事に帰還

するだろう。マッチポンプなのだから、束のハッキングしたカメラが俺の能力を捉えて全世界に中継してしまうかもしれない。

だからどうした。

大事な仲間が戦おうとしているんだ。高見の見物なんぞしてられない。

幸か不幸か、俺にはISにも引けを取らない超能力がある。核ミサイルをモロに受けようが身体には傷一つつかないような代物だ。普通のミサイル如きでやられることはないだろう。

大体、あの時この二人に関わった時点で原作と無縁な生活なんて無理だと分かっていたじゃないか。なのに二人に能力を隠して生活しようなんて、何を中途半端なことをしてるんだ俺は。

決めたんだろ。

だったら、貫き通せ。

「形無、大丈夫とは一体どういう意味だ？」

訝しげに尋ねてくる千冬。束も流石に理解出来ていないのか首を傾げて俺の返答を待っているようだ。

そんな二人に、俺は先ほどまでとうって変わった笑みを浮かべて言った。

「俺ってちょっと特殊なんだよ」

「……それにしても未だに信じ難いな」

「何がだ？」

「形無が超能力者だってことだ！！」

現在地点、国会上空。

束が言うにはあと十分もすればミサイルの雨がこの国会を襲うようだ。束はこれを回線をハッキングして全世界に中継しているため全世界が知っており、また東京都近辺の人間たちは軒並み避難している。

千冬は白騎士を纏った状態で上空に待機し、俺はというとオペラ座の怪人のような仮面をつけて真っ黒なスーツを身に纏っている。



……うん、何故にこうなった。

正体がバレると面倒だというのはわかる。だからってなんで束が取り出した変装グッズが仮面で千冬がスーツをいやに推してくるんだ。

因みに俺は飛べないので国会の正門前に立っている。

「ほんとはもっと早く言わないといけなかったんだろうけどな」

「……いいさ。形無も私たちを信用して話してくれたのだろう？」

「……ああ」

「ならば私たちも形無を信じるさ。私の背中、預けるぞ」

そう言って微笑む千冬。嗚呼、仲間ってこういうことを言うのか。互いに信頼できる、命を預けることができる。

そんな人たちに巡り会えて、きっと俺は幸せだ。

だから、千冬を全力でサポートする。間違っても、ミサイルに撃墜なんてされてしまわないように。

「時間だ形無……くるぞ!!」

「ああ！」

束が設定したミサイルの到着時刻数分前に達し、俺と千冬は揃って空を見上げる。

すると現れたのは数えきれないほどのミサイルの雨。予想はして  
たけど生で見るとこれ確実に東京どころか日本が消滅できるレベル  
だぞこれ……。

「これは束のISを世間に認めさせるってのが目的だ。だから千冬、  
お前が頑張ってミサイルを撃墜しろ」

俺はベクトル操作によって一気に国会の屋根まで飛び上がり、

「お前が危ないようなら俺もサポートするから」

「了解！」

千冬は近接型ブレードを展開し、ミサイルへと突き進んでいった。

……うわ、すげ。

アレって本当に第一世代型か？ 千冬が乗るとなんかもう第三世  
代くらいの機動性がありそうな感じなんだけど。

あれってハイパーセンサーついてんのか？ ていうかもし備わっ  
てないのにあの動きができるってんなら俺はもう千冬を人間だとは  
思わないぞ。

目の前で次々とミサイルを迎撃していく千冬の能力に俺は感嘆し  
た。IS搭乗時間が0でこれだけ乗りこなせるって流石は原作キヤ  
ラだな。圧倒的だ。

「ッ、形無……！」

なんて思っていたら一発のミサイルを撃墜し損ねたらしく真っ直ぐこっちに向かってきている。

これ着弾したら間違いなく首相官邸とか跡形もないサイズだな。

「任せろっ」

俺は演算を開始、一方通行のベクトル操作、中でも基本的な『反射』を設定する。

更に足にかかるベクトルを操作することで上空高く飛び上がり、ミサイルのもとへと飛び込んだ。

グシャ、つと。

俺の身体に触れるか触れないかというところで空き缶を踏み潰すかのようにミサイルが先端からひしゃげ、その場で爆発した。

遠目で見ていた千冬が驚いているのがこの位置からでも見て取れる。

そのまま落下した俺はタンツと国会の屋根に着地し、千冬が迎撃に間に合わなかったミサイルをことごとく落していく。とは言っても数にして凡そ五百、残りの二千発近くのミサイルは千冬がたった一人で撃ち落としてしまった。幸いなことに周囲の人間が避難していたため破片などで負傷するような人間もない。

「……ん？」

上空を眺めていた俺は新たにやってくる飛行物体を見つけて目（と言っても仮面を付けているので視界は良好ではないが）を細めてそれを注意深く見つめる。

「あれは……ミサイルじゃないな。てことは……」

東が全世界に中継してるこの映像を見て『白騎士』を捕獲、もしくは撃破しようと考えた各国が送り込んだ軍事兵器か。

戦闘機なんか送り込みやがって此処で戦争でも始めようってのか？  
まあ、こんな鮮烈な映像見せられて平常でいられる訳がないってのは分かるけど。ISの存在を認めてしまったらこれまでの軍事兵器なんて足元にすら及ばないからな。

「千冬。あれも撃墜していいぞ」

「人が乗ってるだろう？」

「お前なら死者を出さずに機体だけを破壊することもできるだろう？」

「……ふむ。やってみるか」

「そうしてくれ。……って、え？」

何故か白騎士だけではなく、俺にまで戦闘機やらが接近してきている。

……ああ、まさか俺もISに載ってると思われてんのか？ いやいや確かにミサイル迎撃してたけど流石に仮面つけて黒スーツ着てる奴がIS装着してるように見えるか？

普通は見えないだろ……。

「はあ……、」

つつい溜息が口、もとい仮面から漏れる。

此処まできてまさか溜息が漏れることになるうとは思っていないが、向かって来てしまっているものは仕方ない。捕獲なんてされるのはまっぴら御免なので、ここはちょっと痛い目を見て貰うことにしよう。

正当防衛だよ。せいとーぼうえー。

タンツ、と屋根を蹴って俺は戦闘機正面へと飛び上がる。

「!？」

操縦者がなにやら仰天し慌てふためいているが、そんなことはお構いなしに俺は機体を力の限り殴り付けた。

それだけで戦闘機はベコベコとひしゃげ、爆発。操縦者は一早くパラシュートで脱出したようだ。

「さあて、」

上空に視認できる多くの戦闘機に目を向けて、俺は小さく口元を釣り上げる。

「わざわざ演出ゴクロー。華々しく散らせてやるから感謝しろ」

……やべ、なんか思考が若干一方通行化してきた。  
アクセラレータ

この日、ISは世界中に嫌でもその存在を認めさせ、同時に『白騎士』と『黒執事』という名が知れ渡ることになった。

.....『黒執事』？

#18 勘違いはその時点でフラグ（後書き）

次回

新世紀カタナシゲリオン

IS学園の中心で哀を叫んだヲトコ

## #19 天災の失踪はその時点でフラグ（前書き）

お気に入り2000突破ありがとうございます!!

あと前回の後書きでIS学園で、と書きましたがすいませんミスです。



## #19 天災の失踪はその時点でフラグ

前回のあらすじ

白騎士と共に『黒執事』の名が知れ渡ること……orz

あの事件            とうか千冬と俺が計二千五百発近くのミサイルとアメリカを始めとする各国が送り込んだ軍事兵器を片っ端から轟沈させた『白騎士事件』……… もとい『黒白事件』<sup>くくぱく</sup>が起きた日、束の開発、製作したISは全世界にその名を轟かせることとなった。

国会上空で次々にミサイルを迎撃する二人の映像は束がハッキングした衛星によって生中継され、その映像は各国に想像以上の衝撃を与えたようだ。

それもその筈、従来の軍事兵器を凌駕するその圧倒的な性能が明らかになったからだ。

そんなISが世界の目に晒されて、おいそれと平穏がやってくるわけもなく。

宇宙空間での活動を想定して開発されたISは宇宙進出よりも寧ろ飛行パワードスーツとしての軍事的な活用を唱えられるようにな

り、まず世界的な条約が締結されることとなった。

アラスカ条約。

正式名称『IS運用協定』。

IS条約とも呼ばれるこの条約は、軍事運用が可能となったISの取引を規制すると同時に、ISの技術を独占的に保有することとなっていた日本への情報開示とその共有を定めた協定だ。

始め日本はこの条約の締結に異論を唱えようとしていたらしいが、某やクザ国とヨーロッパ諸国に圧迫されて結局締結することに。

そして『黒白事件』から約一年半後、このアラスカ条約に基づいて設立されたのが、『IS学園』だ。

条約に基づき日本に設立されたこのIS学園はその名の通りIS操縦者育成用の特殊国立高等学校で、学園の土地はあらゆる国家機関に属さず、いかなる国家や組織であろうと学園の関係者に対して一切の干渉が許されないという国際規約のもとで存在している。

つまりこのIS学園に在籍、又は関係している以上、その個人に対して国家は手出しが出来ないというわけだ。

ただこの規約に各国は反発しているという訳ではなく、他国とのISの比較や新技術の試験に適しているため、そういう意味では重宝されていたりもする。

そんなIS学園が完成し、いざ来年から開校となったのは俺がま

だ中三の冬だった。世間では既に女性にしか起動させることができないISのせいで男女のパワーバランスが逆転し、徐々に女尊男卑の世界へと成りつつある今日この頃。

俺は平凡な受験生活を送っていた。

女生徒の間では既にISに関する事前授業などが行われるようになり、最近発表されたIS学園の倍率はなんと前代未聞の一万倍超え。

定員が二百人であるのに対して志望者が二百万人を超えるほどの超難関だ。

そしてそのIS学園を受験するための条件はISの適性があること。

そして、『女性』であるということ。

というわけで世界的に注目されているISだが、我々男子からしたら特に興味を持つということもなく、肅々と受験勉強に取り組んでいる。

だってそうだろう。乗れないものに興味を持つことは難しい。どれだけ想像しようが、それが決して実現されることはないんだから。

始めは憧れを抱いていた男子も居なかったわけではないが、それもISが発表されて一年以上経った今ではすっかりいなくなってしまった。

勿論それは男子である俺も例外ではなく、迫る受験日に向けて目下勉強中なのだ。

「形無」

「ん？ どうした千冬」

現在四時間目、科目は受験も近いということで自習になり、各々が机をくっ付けて総力戦で苦手科目を勉強したりする者達もいれば、一人で黙々と勉強を進めるものたちもいたりと思いきいの勉強方で自習している。

そんな中、俺と机をくっ付けて化学を勉強していた千冬がふいに口を開いた。

「形無は受験先、決めたのか？」

「ああ。学費が安くて就職のいい藍越学園を受けるつもりだけど」

「……IS学園を受験しようとは思わないのか？」

「男の俺が受けられるわけないだろ？」

俺は実家からの交通も良くて学費も安い、おまけに就職先も多い藍越学園を受験しようとしている。確か原作で一夏が受けようとしてた学校だ。ここ、確かに凄く学費が安い。

俺としては姫無や簪の学費を払わなくてはいけない親父たちに余り迷惑を掛けないように、という考えからの決断だ。

「しかし、アレだけの力があるんなら……」

「俺はあの能力を見せびらかすつもりなんてないよ」

千冬はIS学園を受験する。簡易適性試験においても高い評価を

受けていた千冬なら、倍率一万倍だろうが落ちることはないだろう。なんてったってあの白騎士を操縦していたんだしな。

でも俺は違う。

『黒白事件』の時だって超能力を使っただけでISに乗っていたわけではない。

……世間ではスーツ型ISなんて噂されてるけど。

とにかく、俺がIS学園になんて行けるわけがないんだ。というかあんなフラグまみれの場所に行きたくないんだ。

「しかしだな……」

「はいはい。この話はこれで終わり。これ以上喋っていると他の迷惑になるだろ」

「むう……」

そんな頬を膨らませてこっちを見つめてきたってダメだからな。ちよっとドキッとしたけど、それとこれとは別問題だ。

「そついや束ってどうしてるんだ？」

「私には喋るなど言っておいてお前は普通に喋るのか……。さあな、もともとアイツは自由奔放というかなんというか、掴み所のない奴だからなあ。三週間程前にやる必要があると言って家を飛び出したつきり帰ってきていないそうだ」

「そうか……。まあ束なら心配するだけ無駄だろうけど」

中学三年に上がった俺たちは三人とも同じクラスになった。というか束が何か細工を施したらいいんだが、詳しいことを聞いたとしてもはぐらかされるだけで明確な答えは返ってこなかった。

……担任の女の先生がガクガクと震えていた理由が是非とも知りたかったんだが。

だがそんな束も今や世界的な天才科学者。

ISの発表以降情報開示を求める各国の連絡は後を絶たず、篠ノ之道場にまで政府の人間が押し寄せるほどだ。

束は他人との関わりを嫌うのでほぼ柳韻さんが対応していた。

「つたく、どこいったんだか」

そんな天才が失踪してもう三週間になる。千冬が言うにはなにやらやることがあるらしくそのために色々と画策しているらしいが、一体何をしているのやら。

なんて思っていると。

不意に、教室に備え付けられたテレビの電源が点いた。

「なんだ……？」

訝しげに点灯した画面を見つめる俺と千冬。モニターは数秒の砂嵐の後、パツと画面が切り替わった。

「ッ!？」

「なあッ!？」

俺と千冬は驚愕と同時に目を見張る。

画面の先に、見知った顔が映っていたからだ。  
それと同時に俄に騒がしくなる教室内。

「……何してんだ、アイツは……」

画面に映っていたのは。

『やつほー。東さんだよー、かーくにちーちゃん、見てるー?』

失踪したはずの、篠ノ之東だった。

というか何故に校内放送に東が出てるんだ。

『あ、ちなみにこの映像は全世界に同時中継されてるよー』

マジかよ。

またハッキングしやがったな。

『今日は全世界に発表しなければならぬ重大なニュースがあるから、それを教えてあげようと思ってね』

ニュース? 一体なんだと言うんだ。つーかよく衛生の監視を掻い潜ってハッキングしたよな東。もう東の手腕を上回る国はないんじゃないだろうか。

「なんのことが知ってるか形無?」

「いんや。全く見当がつかない」

『当たり前だよーちゃん。だってまだ誰にも言っていないんだもん』

そんな俺たちの会話をまるで聞いているかのように、画面越しの束は俺たちの会話に割り込んできた。他の人がみてたらきつと意味不明だろうな。

『ふふーん。じゃあ発表しちゃうかな』

何やら得意げな束がピンツと人差し指を立てて。

『なんと!! あの「黒白事件」の黒執事が誰なのか判明したんだよ!!』

……………。

おい。まさかな、幾らなんでも……

『彼の名前は更識形無。世界初の男性IS操縦者!!』

「束ええええッ!!」

静まり返る教室で、俺は血の涙を流して咆哮した。

いかにも『してやったり』的な笑顔を浮かべる束。隣で啞然とする千冬。

一体何のつもりなんだ。俺の平穏をぶち壊して楽しいのか!?

……やめるクラスの皆こっちを見るんじゃない!!

ていうかまさかこんな事するために三週間も行方を晦ませてたのか。



愕然とする俺に与えられた『初の男性IS操縦者』という全くもって欲しくない称号。

しかも渾名は『黒執事』。

そして、この日俺の辞書から『平穩』という単語が消え失せた。

# 19 天災の失踪はその時点でフラグ（後書き）

次回

新世紀カタナシゲリオン

覚えのない入学

#20 IS学園への入学はその時点でフラグ（前書き）

## #20 IS学園への入学はその時点でフラグ

前回のあらすじ

俺の手から平穩が逃げていきました

「……………」

「……………（ジッ）」

「……………（ジッ）」

「……………（ジッ）」

どうしてこうなった。

俺が居る一年一組の教室。そこに居心地悪そうにして席に着く俺を、他のクラスメイトが食い入るように見つめているのが背中越しからも伝わってくる。

「……………はあ、」

最早お決まりになりつつある溜め息を一つ吐き、俺は天井を見上げた。

本当、どうしてこうなった。

時は少し遡り、例の男性IS操縦者発覚という全世界が驚くニュースを束が流したその日の夕方。俺と千冬は再び束の私室へと足を運んでいた。

腕を組んで無言で椅子にかけた俺の正面には、正座させられた状態の天災、篠ノ之束の姿。

「……で？ 何か言い残すことはあるか束」

「ちよっ！？ それこれから束さん殺されちゃうみたいな台詞だよかーくん！？」

「よく分かってるじゃないか」

「待って待ってかーくん！！ 確かに何も言わなかったのは謝るよ。」

でもこうするしか方法がなかったんだよ!!」

「……………どうということだ？」

俺が一応話を聞くようになったことで安心したのかしょんぼりしていたウサ耳（いつの間にか装着していた）がピーンツと勢いよく起き上がった。

「『黒白事件』の時、かーくんスーツ着てたでしょ？」

「ああ」

「それを見てた各国がああ体格は男じゃないかって疑問を持ち始めたの」

「……………、」

「でね、映像を解析された結果、『黒執事』は男性である可能性が非常に高いって」

俺は椅子に掛けたまま、ガックリと頂垂れた。そりゃそうだよな。スーツ着て仮面したくらいじゃ性別を誤魔化すなんて難しい。

大体千冬が乗ってた『白騎士』と噂されてる『黒執事』って見た目からして違いすぎるだろう。

「……………はあ、つまりそういうことか」

俺は束のあの発表の真意に辿り着いたが故の溜め息を一つ。

全く、俺のことを心配してくれてるってのは分かるけどもうちょ

つとこう穩便にやり過ぐすことはできなかったんだろうか。

……無理かな。

束がこうするしかなかったと言っんなら他に手立てはないだろうし。

「どういうことだ？」

意味がよく解っていないのか、今まで話を聞いていた千冬が問かける。

そんな千冬に俺は自嘲気味に微笑んで。

「どうもこうもない。束が俺を守るためにしたことなんだよ、コレは」

「？」

いまいち要領を得ない千冬。なにやら目の前のウサギさんは真意を知られたくないのかキョロキョロと左右に視線をさ迷わせているが、千冬ならば知っていてもいいだろう。

「束は、俺を守るために『黒執事』っていうISをでっち上げて俺を操縦者に仕立て上げたんだ」

思えば俺も輕率だった。全世界の目に晒されるということが分かっていながら、あの程度の変装しかしていなかったのだ。本来ならば顔全体を隠さなくてはならなかっただろうし、男だと判らないくらい体格の区別がつかないような服装をすべきだった。

だというのに、俺は口の出た仮面に黒スーツ。

これで性別を誤魔化せるといふほうがどうかしている。

つまるところ、俺の身元や性別がバレる一步手前まで来ていたのだろう。もしくは既にバレていたのかもしれない。

もし俺の正体がバレて男であるということが解った場合、ISに乗れるのは女性だけという定義に揺らぎが生じる（実際には俺はISに乗れはしないんだが）。

そして稀な男性IS操縦者の俺は間違いなく何処ぞの研究機関のモルモットにされるだろう。人体実験されるなんて笑えない冗談だ。

そんな折、束の全世界同時中継だ。

これによって各国政府しか知らなかった情報は全世界の人間に知れ渡ることとなり、裏で俺を捕らえようとする政府を牽制、動きを封じた。

そんな束の手腕によって俺は各国から追われるという最悪な事態は回避したわけだ。

したわけなんだが、その代償はなかなか大きかった。



あの発表から数日、うちの屋敷に早速日本政府からの通達があった。内容は言うまでもない、IS学園への入学要請についてだ。因みに拒否権というものはないらしい。

それを見た親父は俺が寮生活を強いられるために号泣していたが（姫無、簪も同様）なるべく帰ってくるということでした承を得た。

「まあ、確かに束には感謝するべきなんだろうが何故かなお前のその表情カオを見てると何か裏がありそうな気がしてならない」

「うえっ！？ 何言ってるのさーくん、束さんがそんな邪な考えを持ってるわけがないじゃない！！」

冷や汗だらだら流しながら言っても説得力ないぞ束。

「というか束、絶対俺をIS学園に入学させる気だっただろ。あの表情は絶対そうだ。畜生、俺まで道連れにしゃがって。」

というのも、実は束もIS学園への入学が決められているからだ。

もちろん最初束は猛反発。篠ノ之神社に足を運んでくる日本政府の役人を突っぱねていた。しかしそこは日本政府も引き下がれなかったんだろ。譲歩に譲歩を重ね、なんとか条件付きだが束をIS学園に入学させ一箇所に留まらせることに成功したのだ。

……一体どんな条件出したんだろコイツうな束は。

「ということはあれか。結局俺のこれまでの受験勉強は無駄だったってことか」

「まあそうなるね」

「へー。そうかそうか」

「えへへー……って痛い痛い！！  
蛭谷<sup>こめかみ</sup>グリグリしないでかーくん  
！！」

「やかましい。やり場のない怒りをちよつとは発散させてくれ」

「ギャー！！」

という事があったために、俺は全く本意ではないが千冬たちと三人揃ってIS学園へ入学することとなった。

長ったらしい入学式も終わり、クラス分けを見て自分の教室に入り（千冬、束とは同じクラス）、宛てがわれた自分の席についたと

ところで最初の場面へと戻るわけである。

(……後ろからの視線がなあ……)

運の悪いことに俺の席は真ん中最前列。この上ないバッドポジションだ。今日ほど名前順で『さ』だったことを恨めしく思った日はない。

千冬はなんだか機嫌悪そうにしているし、束に至っては早速消えやがった。どんだけ自由人なんだアイツは。

なにやら背後から『声かけてみなよ』やら『彼女さんとかいるのかな』やら女子生徒たちの声が聞こえてくるが、そこは気にしないほうがきつと身の為だろう。

因みにこのIS学園。第一期生となる俺たちは年齢の幅が十五歳から十七歳までとされており、学年は二、三年生は存在しない。来年度以降になれば別だろうが。チラッと周りを見た感じだと世界各国から生徒は集まっているようだがやはりまだISが発表されてから一年ちよつとしか経過していないということもあって専用機持ちは圧倒的に少ない。大体ISの数自体がまだ少ないのだから無理もないが、その数は俺が知る限りまだ0だ。

俺のことはカウントしていない。だってこれISじゃないし。

「はい席に着いてくださいーい」

ガラッと教室前方のドアが開き、教員らしき女性が入ってきた。あれ？　なんか見たことあるような顔してんなこの人。

「えー、今日から私がこのクラスの担任になる山田麻世です。みんなよろしくね」

……思いつきりやまやとおんなじ顔だ。てことは姉か何かかな。  
にしても似すぎだろ。そっくり過ぎて違うところなんてないんじゃない？  
……あ、あった。

この人、やまやと違って貧乳だ。

なにか物足りないと思っていた原因はコレか。いやあるのとないでこんなにも違うんだな。

「えーと更識くん？」

「はい？」

「君今なにかすごく私に失礼なこと考えてなかった？」

「いや全然？」

「……そう？」

「はい」

危ねえ。なんだこの人読心術でも修得してんのか？ やまやと違って鋭すぎるだろ。

「はい。じゃあまずは皆自己紹介といきましょうか。名前順で行く

から一番端のえーと、会田さん。お願いね」

「は、はい！」

クラス名簿と会田さんを交互に確認しながら自己紹介を促す山田先生。言われた会田さんはガタツと立ち上がって。

「あ、会田仁美です！ 国籍は日本で、バスケットやってます！ 趣味は……」

粛々と進められていく自己紹介。こんな時に思うのもなんなんだが、ISが世界に公表されて一年弱。この教師たちはISについてどこまで把握しているのだろうか。当然『白騎士』の正体が千冬だなんてことは知らないだろうし、ISの性能も完全には把握できていないんじゃないかと思う。

今現在、世界中に普及しているのは第一世代型だが束の中では既に第二世代型が完成しようとしている。各国がようやくISの性能を理解し始めたと思ったら束は遙か先を行っているのだ。本当に未恐ろしいよ。

「更識くん」

「はい？」

「次、君の番なんだけど」

どうやら考え事を取られて自分の番が回ってきたことに気がつかなかったみたいだ。時間を取らせるのは悪いと思ったので俺はいそいそと立ちあがり。

「えー。更識形無です。皆さんご存知の通り世界初のIS操縦者です。以上」

あまり長い自己紹介をする気もなかったので簡単に言っただけで席に座る。

これですぐ後ろの席の女子へと自己紹介が移るのかと思いきや。

「はいじゃあ更識くんになにか質問ある人ー？」

何故か担任の山田麻世……面倒だからやまよは質問を受付始めた。なんで俺の時だけ。

シュバツ!!

……ほぼ全員が挙手。

やばいこれ厄介なパターンだよ。一夏の時そっくりだよ。

「なんでISに乗れるんですか!？」

「ISがスーッってどういうこと!？」

「黒執事ってなんなんですか!？」

「もう一人とは何か関係あるんですか!？」

うわもう質問攻めだよ。

だけど、取り敢えずこの質問にだけは今すぐ答えておこう。

「もう一人とはなんの関係もないです」

もう一人、というのは俺の呼び名からも察しは付いただろう。

『世界初の男性IS操縦者』。

決して『世界唯一の男性IS操縦者』ではない。

居るんだ。このIS学園に。

世界で二番目の男性IS操縦者が。

#20 IS学園への入学はその時点でフラグ（後書き）

次回

新世紀カタナシゲリオン

残念、再び



#21 フラグを避ける考えはその時点でフラグ（前書き）

やっと入学できました。

これからどんどん進められるといいなあ。

## #21 フラグを避ける考えはその時点でフラグ

前回のあらすじ

やまやの姉は貧乳だった件について

『世界初の男性IS操縦者』。

これは俺の呼び名のようなものなんだが、“世界初”というところがこの名の肝だ。

世界で初めて、ということは当然その後も存在する可能性があるということだ。ISが発表されて一年余り、これほどの短期間では女尊男卑も原作ほどに極端ではなく、さらに男性IS操縦者の登場が早かったこともあった同等とはいかないまでも間違いなく男女平等に近付きつつある。

俺の呼び名が『世界唯一の男性IS操縦者』から『世界初の男性IS操縦者』に変わったのは、あの束の発表から一ヶ月ほど経ってからだった。

予兆などなく、突然沸いて出たかのように二人目となる男性IS操縦者が発見されたのだ。

これには流石に俺も驚いた。原作では当然一夏しか乗ることの出来なかったISを乗ることの出来る人間が存在したというのだから当然ながらこの第二の男性IS操縦者は俺のように束によって公表されたわけではない。  
名乗り出たのだ。自ら。

後に『世界で二番目の男性IS操縦者』と呼ばれることとなる男の名前は  
織村一華。

そう。あの織村だ。

幼稚園の頃からの知り合い（？）であるアイツとはかつて体育祭で二人三脚をした記憶が鮮烈に残っている。ほんとにあのバ……織村は何がしたかったのか今でも疑問だ。

そんな織村が本来ならば女性にしか動かせないはずのISを何故

起動させられたのか、実際の所まだ俺には解らない。まだ彼がISを動かしているところを生で見えていないからだ。

だが束が我が子のように可愛がるISをアイツが使えるなんて有り得ない、と言っていたように俺もなんだか腑に落ちない。

いや、俺が言うのもなんだけどISを動かせる男子なんて有り得ないんだぞ？ 主人公フラグでも建ってない限り。俺は例外としてもじゃあアイツは……ということになる。

一度束に本当にアイツがISを起動させられるのか調べてみれば、と進言したこともあったが「あんなのに関わるのは生理的に無理」と一蹴していたために、此处IS学園に入学した今でも詳細は分からないままなのである。

さて、なんだか前置きが長くなってしまったが、つまり俺が一体何を言いたいのかというのだ。

「俺は二人目とは一切合切何の関係ありません。あしからず」

こういうことだ。

確かに俺と織村がISを扱えるというニュースが全世界に流れたのは同時期でしかも同い年だが、それだけで関係があると思われるってしまうのは相手が相手だけに流石に心外だ。

……いや、それも無理のない話かな。

なんてったって俺と織村はこれまでの経歴だけ見れば幼稚園から中学校、そしてIS学園に至るまで全く同じ道を歩いてきているんだから。

こつちとしては織村を知ったのは中学に上がったころだし全くと言っていい程に関わりはない。いつだったか織村が俺に向けて『千冬束は俺の嫁』宣言してたけど俺からしたら『何故に俺?』という感じだった。

だから俺は瞳を輝かせてアイツとの関係を聞いてくるクラスメイトたちに言う。

「事実です」

何やらぶーたれるクラスメイトたちがいるが、事実は事実でしかないためにどうすることもできない。

「はい、他の質問あるかー?」

やまよさん。もういいんじゃないでしょうか。

ババツ!!

ほら。限界まで手を伸ばした方々が我先にと今にも立ち上がろうとしてるじゃないか。

「はい、じゃあそのえーと……リリイ＝スターライ」

やまよ。生徒の名前くらい覚えておけよ。

「『黒白事件』のについてお訊きたいのですが、」

リリイ「スターライと言う生徒が立ち上がりこちらを伺うようにして口を開く。綺麗な金髪だなあ。イギリス人かフランス人だろうか。俺は外国にあまり詳しくないから解らないが間違いない美人の部類に入と思う。」

「貴方の専用機だという『黒執事』にも色々とお尋ねしたいところですけど、先ず貴方と共闘した『白騎士』とは一体誰なんです？」

誰なんです？ と聞かれてもなあ。おいそれと『あそこの席に座ってる織斑千冬です』なんて言えるわけねーし。心無しか千冬が冷や汗を流しているような気がする。

ていうかそれ最重要国家機密に相当する情報だぞ。機密って言っても各国はもちろん当の日本政府でさえ白騎士の操縦者が誰なのか認知できていないんだけど。

理由は簡単、東の手腕のおかげだ。

東が情報封鎖したものを、俺の口からポロッと言えるわけがない。

だから俺は、

「それは俺にもわからない。共闘したのは確かだけど、俺は白騎士の正体は知らないんだ」

こう言っしかない。

怪しまれようがなんだろうが、こうシラを切るしかないのだ。

「あれだけ息のあったコンビネーションだったのに、あれは即興のものだったと？」

「ああ」

事実だ。だって千冬がISに乗ったのはあの時が初めてだったわけだし、二千発以上のミサイルが降ってきてるのにコンビネーションもなにもないだろう。

……なのにどうしてお前はちょっと嬉しそうなんだ千冬。ニヤニヤしながら窓の外を眺めるのやめろ。

「……そうですか。では最後に一つだけ」

まだあるんですかりリイ「スターライさん。

「あなたの『黒執事』。アレは一体何なんですか？」

瞬間。

俺の背中から嫌な汗が噴き出すのを感じた。

この少女。疑っている。

俺が本当はISに乗れないのではないかと。

「あの映像は見なかったのか？」

「もちろん拝見しました。だからこそです。ただの黒スーツ、執事服と言ったほうがいいのでしょうか。アレがISだということが私には信じられません」

鋭い眼光が俺に穴を開けるくらいにまっすぐに見つめてくる。  
まあ確かに。宇宙空間での活動を想定されたマルチフォーム・スーツであるISが黒スーツで執事服って何の冗談だって感じたよな。俺だって当人じゃなかったら絶対に信じないだろうし。

だから俺はリリイという少女の意見には全面的に肯定するよ。  
だけどそれはあくまでも俺の心の内だけの話だ。

東が折角こうして俺を守ろうとしてくれた以上、俺だって相応の対応をしなくてはならないだろ。

だから言う。

東のためにも。

俺は平気で嘘をつく。

「アレは篠ノ之博士の試作品だよ。通常じゃ見えないシールドがあるスーツ全体を覆ってる。まあ他のISと比べて見た目が特殊なのは認めるけど、元々は普通のISだったんだぜ？ アレ」

「貴方が起動させてあの姿になった、と？」

「そういうこと。何と言われようとそれが事実なんだからしょうがない」

「ですが……」

「なら、あの映像で俺はどうやってミサイルを迎撃していた？ ただのスーツを着たサラリーマンみたいな人間に、そんな常識はずれなこと君はできると思うのか？」



「そ、それは……」

言い淀むリリイ。彼女自身もまだその理由が説明できないみたいだ。いや、逆に説明されても困るけれども。俺が使ってるのは超能力であつてISを動かしているわけじゃない、なんて言われたら俺はその人を超能力者だと断定するぞ。

「リリイ」スターライ。もういいだろう」

このままでは埒が明かないと判断したのかやまよが俺たちの間に割って入る。

「更識も座りなさい」

言われて座つた俺たち。リリイはまだ不服そうだったが。そんな二人を見てやまよは自己紹介の続きを始める。

「えーと次は……篠ノ之束。いきなり休み？」

本来ならば俺の後ろの席に座っているはずの束の席は見事に空席。

束はほんとに興味のない人間と関わるのを嫌うからなあ。こんな空間には居たくないんだろう。

「しょうがないわね。じゃあ次の」

続けられる自己紹介をぼんやりと聞きながら、俺は遠目に窓の外に視線を移す。

今更ながらに信じられないという思いが込み上げてくる。

（ほんとに入学しちゃったんだなあ……、IS学園）

周囲が俄にざわめき立つのを感じる。無理もない。何せこの俺、織村一華が今から自己紹介を始めようとしているんだからな。

『世界で二番目の男性IS操縦者』

それが俺の肩書き。

二番目、というところがとてつもなく不満だが、所詮肩書きなんてもので俺の全てを表現出来るわけがないんだ。そんな些細なことを気にするほど俺は器の小さい人間じゃないからな。

「次、織村くん。自己紹介お願いね」

「はい」

言われて俺は立ち上がり、後ろに振り向く（因みに席位置は形無と同じ）。

「織村一華。みんな知ってるだろうけど世界で二人しかいないISに乗れる男だ。みんなヨロシクな」

まず手始めはこんなもんだ。掴みは大事だが行き過ぎたアピールはまだ早いだろうしな。

「質問ある子いるかな？」

俺がそう言つと何名かの女子が手を挙げた。そのうちの一人を指名する。

「織村くんはあの篠ノ之博士とは知り合いなんですか？ 隣のクラスの更識くんは篠ノ之博士と仲が良くて専用機まで持ってるみたいですけど」

更識？

…… ああ、あの馬野郎のことかよ。

あの野郎、きつと束に無理言つて専用機造らせたんだ。酷いことしやる。

「束とは懇意にさせてもらってるけど、あいつとは何の関係もないし親しくはないね」

「そつなんですか？ じゃあ織村くんもいずれ専用機を？」

「束がいつか作ってくれば、俺も専用機を持てる日が来るかもね」

一応、こういうことにしておこう。専用機。確かに欲しいかと聞かれれば要らないとは言わないだろうが、俺がこのIS学園にやってきた理由は、千冬や束と一秒でも長く同じ時間を過ごすためだ。

それを邪魔するような野郎（主に形無のこと）は、誰であろうと容赦しねえ。

俺の『<sup>ダークマター</sup>未元物質』に常識は通用しねえんだからな。

「……ふう、」

自己紹介が全員終わったところで一旦休憩となつて一年一組の教室。その一角で俺は机に突っ伏して小さく息を吐いた。ついさっきまでいろんな女子から質問攻めにされ、ようやく解放されたんだ。千冬に助けを求めても全く助けてくれないし、さっきまで嬉しそうにしてたのになんだこの機嫌の豹変は。

「なあ千冬。なんで機嫌悪そうにしてるんだよ」

「……悪そうじゃない。悪いんだ」

「さっきまであんなニヤニヤしてたのにか？」

「っ！？　べ、別にニヤニヤなどしていない！」

うん、説得力皆無だぜ千冬。

そんなワタワタしてたらいつものクールなイメージが一瞬で崩壊しそうだ。

「そうか？」

「そうだー！」

本人は断固として認めない気らしい。

「そ、そんなことよりもだ形無」

「ん？」

「どうするんだ」

「何を？」

そこまで言って、千冬は俺の耳元まで口を近づけて小声で呟く。

「（あのリリイとかいうイギリス人のことだ。彼女、間違いなく形無のことを疑っているぞ）」

ああ。そういうことか。

千冬まで心配してくれてるんだな。

「（心配してくれるのか？）」

「（む……。当然だろう。お前の正体がバレてしまえば冗談抜きで実験動物だぞ？）」

「（それは是非とも遠慮したいな。まあ大丈夫だ。そんな自分の正体バラすようなヘマはしないさ）」

「（形無なら心配は要らないとは思うが……。気を付けろよ？ 何時ボ口が出るかもわからんからな）」

「（おう）」

俺は千冬に対して頷いて言う。

俺のことを信頼し、心配してくれる友達が持てるなんて、俺はほんとに恵まれてるな。

「はい皆席につくー」

なんて思っていると前のドアから担任のやまよが教室内に入ってきた。いつの間にか休憩は終わっていたみたいだ。

やまよが入ってきたのを合図にして他の女子生徒たちも一斉に席に戻る。

全員が席についたのを確認して、やまよは切り出した。

「えー、みんな入学式のパンフには目を通したと思うけど、このI

S学園には幾つかの行事があります」

パンフをパラパラと捲りながら話を続けるやまよ。

「それでこの時期から一番近いのは『クラス対抗戦』<sup>リーグマッチ</sup>ね。これは各クラスで代表者を一人決めて戦うものなんだけど。今からそのクラス代表を決めたいと思います。あ、クラス代表ってことはこのクラスの顔になるわけだから、自薦・他薦は問わないけれど相応の覚悟を持ってね？」

クラス対抗戦か。

確か原作じゃ一夏と鈴が戦ったんだよな。途中で邪魔が入って決着はつかなかったけど。

まあこのクラスじゃ、千冬が一番適任なんじゃないか？ 皆は知らないだろうけどこのクラスの中じゃ唯一ISの搭乗時間が二時間以上あるし。

「はい」

すると、一人の少女が手を挙げた。

「私、立候補します」

先程俺に突っかかってきたイギリス人、リリィ・スターライだ。さっきも思ってたけどこの子絶対セシリアタイプだよ。女尊男卑を体現しようとしてるタイプの人だよ。

「他にはいないの？」

まあ彼女でもいいんじゃないか？

他にいないってんならやる気のある人がやるのが一番だろうし。

俺？ やだよ。クラス代表なんてやったらそれだけでフラグ余分に建てちゃいそうじゃないか。

「はい」

するともう一つ手が挙がった。そちらを向いてみれば、誰である千冬が手を挙げていた。

なんだ千冬もやる気なのか。

「織斑さん。あなたも立候補ということでもいいのね？」

「いいえ」

……挙手しといて否定しやがった。  
てことは必然的に……。

「私は更識形無を推薦します」

手遅れだった。

千冬さん。アナタは一体俺をどうしたいんだ……！！



## #21 フラグを避ける考えはその時点でフラグ（後書き）

次回

新世紀カナシゲリオン

乗れないIS、気づけば戦い

## #22 フラグ回避はその時点でフラグ（前書き）

前回、100万PVを記念してお知らせでアンケートを募集しましたが、たくさんの読者さまがアンケートにご協力してくださいました。

本当にありがとうございました。  
結果は以下になりました。

1・姫無&簪の学校生活、私生活 36票

2・束の日常 1票

3・親父奮闘記 3票

4・一華と五反田家の日常 4票

姫無&簪大勝利ww

というわけで次回は番外編になります。お楽しみに。

## #22 フラグ回避はその時点でフラグ

前回のあらすじ

フラグはいつの間にか建っている

「私は更識形無を推薦します」

拳手したままの姿勢を保ち、そんなことを言い出した千冬に俺は絶句。開いた口が塞がらないとは正にこのことか。

「ち、千冬さん……？」

「形無。何も私は適当に言っているわけではない。形無が適任だと思っっているから推薦しているのだ」

いやいやいや。

絶対俺なんかよりも千冬のほうが適任だろ。十人が十人そう言うって。

「ふむ。他にはいないの？」

黒板にスラスラと俺とリリィの名前を書き、クラスメイトに確認をとる。やばいこれ原作の一夏とセシリアパターンの臭いがぶんぶんするんだけど。

「はい。じゃあ他に候補者がいないみたいだからこの二人にクラス代表をやってもらうわね」

え？

ちよつと待て一旦落ち着こう落ち着くんだ俺。  
今やまよは何と言った？

『この二人にクラス代表をやってもらう』、だと……？

「ちよ、先生！？ クラス代表って一人じゃないんですか！？」

「あら。私はそんなこと一言も言っていないわよ？」

いや確かにそうだけど此処は普通クラス代表は一人 二人も要らない 決闘 俺が負けてリリィが代表って流れでしょうがアア！！  
そのフラグはへし折らなくてもよかったでしょうが！！

「先生、クラス代表は二人も必要ないと思います」

俺が血涙を流しているとリリィがそう言った。どうやら彼女も俺

とは違う理由だがクラス代表が二人であるということに不満があるらしい。

「お、俺も一人で充分だと思います」

俺もリリイの意見に同意する。そんな俺たちを見て、やまよは『はあ、』と溜め息を吐いたあと。

「いいですか君たち。君たちが今居る場所は一体どこですか、リリイ＝スターライ」

「IS学園です」

「はいではそのIS学園では一体何を学ぶのでしょうか更識形無」

「えーっと、ISの操縦？」

「はいではそのISの存在と価値が認められる起因となった『黒白事件』が起きたのはいつですか続けて更識形無」

「一年……半くらい前かな」

「正確には四九三日前です。そしてそれから今までにアラスカ条約を始めとする様々な条約や協定が各国で締結され、それに基づいて此処日本にIS学園が設立されたわけです」

ペラペラと語り出すやまよ。一体何が言いたいのかあまり分からないが、きつとここで口を挟んではいけないだろう。俺の第六感がそう告げている。

「……それとクラス代表が二人だということと、一体なんの関係があるというんですか？」

リリイも同じくあまり意味が理解出来ていないのだろう。訝しげな表情をしている。

「では質問を変えましょうかリリイ」スターライ。あなたのIS搭乗時間は？」

「……三十分未満です」

おそらく彼女は入試の時に用意されたISを起動させ、簡単な操作が出来るか動かしてみた程度なのだろう。千冬みたいな人間でもない限り、ほぼ全員のIS搭乗時間は三十分未満だ。

「更識形無。君は？」

「四十七時間です」

もちろん嘘だ。

ISに乗れない俺の搭乗時間は当然0。だが本当のことを言うわけにもいかなので口から出任せを言っただけ。

「流石は『黒執事』。搭乗時間は断トツですね」

「……先生、搭乗時間なんて女子はみんな似たようなものじゃないですか」

バカにされたと勘違いしたのかリリイは眉をひそめ、やまよを睨むようにして見つめていた。

「そうね」

あっさりとリリイを肯定するやまよにさらにリリイの眉間に寄せられた皺は深くなっていく。

「なら……」

「でもね」

リリイの言葉をやまよは遮って。

「それは私たち、教師たちにも言えることよ」

ああ。成程。

だからクラス代表は二人ね。てことはこの一年は教師たちもってことになるのか？

「……どういう意味ですか？」

「言葉の通りよ。私たち教師たちも今のアナタたちとさしてISの搭乗時間は変わらないわ」

俺はなんとなくだがやまよが一体何を言いたいのかを理解した。

ISが発表されてから一年以上経つ。しかし裏を返せば、“まだ”一年程度しか経っていないということにもなる。束が設計開発したこのインフィニット・ストラトスなるパワードスーツは彼女の天才的な頭脳あつてこそ誕生した代物。俺たちみたいな今まで普通に平凡な人生を生きてきた人間には、到底理解することのできないよなトンデモ理論の塊なのである。

つまり、教師も生徒もスタートラインはほぼ同じなのだ。

もちろんこのIS学園の教師に選ばれるような人間は相当の学者か工学分野が専門の人間たちだろうし、それなりの実績を有している者たちなのだろうが、きつとそれでも東には遠く及ばない。篠ノ之東という存在は人類の最先端の更に先を行く人間だ。そんな人間が開発したこのIS、現段階で扱いや操縦に長けた教師や生徒はまず存在しない。

だからこそ、クラス代表は二人にする必要がある。

IS搭乗時間皆無の人間がクラス代表になったところでその実力などたかが知れている。それはどこのクラスも同じだ。この学園ではISに関する様々なことを学ぶだろうから、何れは機体にも詳しくなるし扱いも慣れてくるだろう。

しかし今は違う。はっきりに言ってしまうえば素人もいいところだ。そんな人間がISに乗り、もし万が一にでもその人間がトラブルに陥ってしまった時、一人では間違いなく惨事になる。絶対防御があるのはそのISが稼働しているときだけだ。展開が解除されてしまえば身を守ってくれるものは何一つとしてない。

きつとこの事を考慮してクラス代表を二人にしたんだろう。

二人ならばどちらかがトラブルつてももう一人がカバーできる。当然始めのうちはそれすらもままならないかもしれないが、一人ではないという安心感は想像以上に大きいだろう。

しかも俺は『黒執事』として全世界にその名を知られてしまったIS操縦者だ。

やまよとしても俺がリリイをカバーすることが望ましいとでも考えているんじゃないだろうか。



「私たち教師陣もはつきり言ってISには詳しくない。持っている知識はアナタたちとさほど変わらないわ。クラス代表を一人にしてもし万が一トラブルに巻き込まれたとして、私たちに守ることができるとい保障はどこにもないのよ。もちろんそれはクラス代表だけに限った話ではないけれど。でもクラス代表はやはりISに乗る時間は他よりも大なり小なり大きくなる」

「……つまり、二人のほうがリスクが少ないということですか？」

「まあ他にも理由はあるけど、大筋としてはそういうことになるわね」

「……そういう理由があるというなら、分かりました」

リリイはそれを聞いて納得したようだ。うん、未だに睨まれてるところを見ると俺はまだ疑われてるみたいだけど、この際それはもういいや。それよりも大事なのはだ。

「先生？　俺がクラス代表になることは既に決定事項なんですか……？」

「そうよ？」

『今更何言ってるの？』的な返答をされて俺は返す言葉なくそのまま机に蹲った。

ああ、結局こういうことになるのか。

クラス代表が決定したことによるクラスメイトからの拍手を背中に受けながら、俺は魂まで抜け出しそうな大きな溜息をついた。

授業終了後、俺は校舎に隣接する寮へとやってきていた。原作ではいきなり男子操縦者が現れたことで部屋を確保できず幼馴染みである篤と相部屋、という半同棲生活を余儀なくされていたが。

「お、あつたあつた。ここが俺の部屋か」

俺の場合、IS学園が完成するギリギリ前に存在が発覚したために男子専用の寮（とは言っても一軒家に近い1DK）を別に用意してもらうことができた。大浴場などはないが一般家庭にあるようなバスルームは設けられており、ちよつとしたホテルのような感じの部屋だ。因みにこの部屋の場所は女子が住まう寮の隣である。

高級そうなカードキーを通し、ドアを開いて室内に足を踏み入れる。

そこに広がっていたのは。

「お帰りがーくん！！ ご飯にする？ お風呂にする？ それともわ・た・し？」

目を覆いたくなるような力オスだった。

ちよつと待て。確かこの部屋、ロック掛かってたよな？

何で？ 何でドアの先に裸エプロンの束が正座してこっち見てんの？

「……とりあえずだ」

「うん？」

「ちゃんとした服を着ろ」

「えー？ かーくん束さんのこんなえろえろな姿見てなんにも感じないのー？」

ゴンツ！！

「いったーい！！ かーくんの愛が痛い！！」

「追い出すぞ」

一瞬にしていつもの服に戻っていた。どんな早着替えだ。

というかなんで束がここに居る？ コイツ入学式や授業にも出てなかったのに。

「で？ 何の用？」

「かーくんに言い忘れてたことがあって」

言い忘れた？ なにか『黒執事』に関することだろうか。だとしたら俺の専用機の設定をすっかりさせてもらいたいんだけど。

「『黒執事』についての何か？」

「まあそれもあるんだけど、一応カーくんにも言わないといけないことがあったの忘れてたんだよね」

そう言う東はとびっきりの笑顔で。

「東さんは今日からこの部屋に住むからよろしくね、カーくん」

……………はい？

## #22 フラゲ回避はその時点でフラゲ（後書き）

次回

新世紀ヒメザシゲリオン

まごころを、兄に

#番外 彼女たちの日常（前書き）

お待たせして申し訳ありません；  
風邪にやられて寝込んでいました……

## #番外 彼女たちの日常

更識家。

一見して何処にでもあるような家系だが、その本質は暗部に対抗するための対暗部組織『更識』を有する一家だ。その大黒柱として君臨する更識家の主は十六代目当主、更識楯無。

母、更識瑞穂はおしとやかな大和撫子で家事全般をなんでもこなすパーフェクトな母親（性格、天然）であり、長男の更識形無は世界でたった二人しかいないISを操縦できる男子。

そして二人の妹。

長女の名は更識姫無。

次女の名は更識簪。

これは更識家の娘っ子二人のとある日の物語

。

「おはようー」

「ああおはよう姫無」

襖を開いて居間に入った私は、既に食卓に並べられた朝食を見て『今日は鮭かぁ』なんて思いながら席につく。一足先に居間にやって来ていた父さんは新聞を広げていた。

「姫無も今日から二年生か、早いもんだなあ……」

感慨深そうに父さんが新聞をたたんで呟く。そう、私、更識姫無は今日から小学校二年生になる。上級生になるのだ。

「学校は楽しいか!? 苛められてたりしないだろうな!？」

「大丈夫だってば」

まったく。この父は前々から思っていたけど少々……いやすごく過保護だと思う。

思い出されるのは去年の私の入学式。たまたま席が隣になった男の子とお喋りしていたら、教室の後ろで父さんが負のオーラ全開で腰に差した真剣を抜こうとしていた。

その場は母さんが父さんの襟首を引っ付かんで廊下のほうに連れ出してくれたから事なきを得たけど、男の子とお喋りしていたくらいで抜刀しようとするとかもう常識的に可笑しいんじゃないだろうか。

というか銃刀法違反なんじゃ……やめよう考えないほうがいい気がしてきた。

確か兄さんもそんなことを言ってたし。

「兄さん……、はあ……」

私は目の前に置かれた湯気の立つ味噌汁に視線を落として溜め息



を一つ。

この溜め息の原因は言うまでもない、私の兄さんである更識形無がこの家に居ないからだ。

それは兄さんがあのIS学園の寮に住むことになったからなんだけど、兄さんがあの『黒執事』だったなんて本当に驚いた。女性にしか動かせないISを兄さんが操縦できるんだから、妹の私としても鼻が高い。クラスの友達に自慢したほど。

……それはいいんだけど、問題は兄さんがIS学園の寮に入ってしまったってこと。

そう。会えないのだ。

兄さんに。毎日。

……………うわあああああああ！！

ほんとにイヤだ！！

兄さんに会えないなんて私はこれから一体どうやって毎日を過ごしていけばいいの！？

今までは夜中にこっそり兄さんの部屋に忍び込んで布団に潜り込み、一緒に朝を迎える（決して卑猥な意味ではない）のが日課だったのに、今ではそれが出来なくなってしまった。

これは私にとっての死活問題だ。

死ねる。というか最初の一週間くらいは本気で私もIS学園の寮に住もうと考えていたくらいだ。

兄さんの温かみのある布団だからこそ今まで気持ちよく眠れていたのであって、それがなくなれば私は間違いなく不眠症になる。というかなってしまっている。

毎晩兄さんの部屋で寝ているがやはり本人が居ないとダメ。一人で寝るのがこんなに寂しいなんて思ってもみなかった。

「はあ……」

「どうした姫無。元気がないぞ。……まさかやっぱり苛められて！？」

「違うから」

私の目の前で騒ぐ父さんも兄さんが家を出ると知ったときはそれはもう大変だった。

きっと兄さんもあなることが予想できていたからギリギリまで言い出せなかったんだろうなあ。母さんにはもう言ってあったみたいだけど、父さんに寮暮らしを告げたのはIS学園に入学する3日前のこと。

兄さんが『黒執事』の正体だって報道された時も父さんはそれはもうすごぶる暴れたけど、それがまだ可愛く思えてしまうほどの光景だった。

号泣。

そして暴走。

あの時の父さんの行動を分かりやすくかつ簡潔に表すのならまさにこれがぴったり。

居間に兄さんと父さん二人きりで入って行ってから数分後、私や簪が襖の近くで聞き耳を立てていると、いきなり大きな泣き声が聞こえてきた。

ギョツとする私や簪を尻目にその泣き声は段々と小さくなっていて、

ズバンッ！！

抜刀の風圧のせいか私の目の前の襖が横に真っ二つになった。

息子の家離れを認められない父親が起こしたのが真剣を振り回すって……。

どれだけ我が子好きなんだうちの父さんは。

結局、その場は父さんの部下数十人と最終的に投入された母さんによって兄さんの寮暮らしを本当に渋々認めた父さんだったけど、それからしばらくは魂が抜けたみたいに真っ白だった。

こんなんじゃない私の時も同じようなことになるんじゃないかという気がしてならない。

「姫無どうかしたか？ 箸が止まってるぞ」

「あ、なんでもない」

いつの間にか止まっていた箸を再び動かしながら、私は内心でこっそりと決めていたことをもう一度思い出す。

私も、IS学園に入学する。

これは兄さんがIS学園に入学すると知った時から心に決めていたことだ。

ISが発表されて約一年半。“基本的に”女性にしか動かせないISの授業は小学校からもう少しずつ取り入れられるようになり、私も兄さんの後を追いたいと思うようになったから。

となると私も当然IS学園に備え付けられた寮に住むことになるだろうから、今のところ父さんには絶対に秘密。

というか絶対に言いたくない。あんな惨事を巻き起こすのは御免だし。

将来IS学園に行くということを告げたあとの父さんの暴走っぷりが簡単に想像できてしまった私は、それを流し込むように味噌汁

をすすった。

「おふぁよう……」

「あらおはよう簪」

「おはよう」

「おはよー」

未だに意識が覚醒しないまま居間に入った私にお母さん、お父さん、そしてお姉ちゃんが声を掛ける。

此処でようやく、私は意識が覚醒することに。

理由は簡単。

『おはよう簪。相変わらず眠そうだなあ』

いつもこうやって声を掛けてくれるお兄ちゃんが、ここにいないから。

お兄ちゃんは『IS』とかいうものに乗れる数少ない人で、その

ための学校に行くために一人暮らしをするんだって。

……はつきり言って私はお兄ちゃんと離れたくない。

だから私はお兄ちゃんに、

『……私も、行く』

いつもはこんな我が儘は言わないけど、それでもお兄ちゃんとは離れたくなかったんだもん。

だけとお兄ちゃんは。

『ははっ。俺だって簪や姫無とは離れたくないさ。でもこれはあの糞ウサ……友人のためでもあるから』

『私も……行くっ……！』

『……簪？　なんで俺の制服の裾をしわくちやになるまで掴んでるのかな？』

『……いいって言つまで……、離さない……！』

『ちょ、母さああああん！？　我が妹の瞳からハイライトが消えるんですけどオオおおおッ！？』

『あらあら、それは大変ねえ』

『助けようという気が感じられない！！』

結局、お兄ちゃんについていくことはできなかった。うう、今日から小学校に通うから、ランドセル背負った姿とか見て欲しかった

のに。

でもまあ、これから先ずつと会えないってわけでもない。夏休みとかのお休みの長い時には家に帰ってくるってお兄ちゃん言ってる、ランドセル姿はそのときのお楽しみにとっておこう。

「ご馳走様。ほら簪、早くしないと学校遅れちゃうよ?」

「あ……、待って……!」

私よりもひと足先に朝ご飯を食べ終わったお姉ちゃんはそそくさと居間から出ていってしまった。

なんて薄情な姉なんだ。妹が食べ終わるのを待ってくれてもいいじゃないか。

「簪ー? 早く食べないと遅刻しちゃうわよー?」

お母さんにそう言われ、壁の時計に目をやれば。

「わ……、わわ……ッ」

遅刻ギリギリ。どうやらお姉ちゃんは待っていてくれてたみたいだけど間に合わないと思って私を切り捨てたみたい。……急がないと。

私はご飯を急いで完食し、丁寧に手を合わせた後、直ぐ様居間を飛び出した。

慌てて出てきた簪と一緒に登校した私は、なんとか遅刻することなく教室に入ることができた。

進級してそうそう遅刻なんてしたらクラスの皆に変に思われちゃいそうだし。

「姫無ちゃんおはよー」

「あ、紗季。おはよう」

「今日はなんだか遅かったねえ。寝坊でもした？」

「ううん。そういうわけじゃないんだけど」

全力ダッシュのせいで疲れきった私が机につつ伏していると、シ  
ョートカットの女の子が私に話しかけてきた。彼女の名前は椎名<sup>しいな</sup>紗<sup>さ</sup>  
季。この小学校に入学してから初めて出来た友達で、今では幼いな  
がらに親友といえる存在だ。因みに二年連続同じクラス。

「一時間目体育だよ。早く着替えなきゃ」

「あ、そうだったわね」

紗季に言われ私は机の横に引っ掛けてあった体操着袋を机上に置き、中から体操服と体操ズボンを取り出す。男女関係なく同じ場所  
で着替えるのはなんだか気に食わないけど（主に男子たちの存在が）  
、先生にそんな文句を言っても意味がないので私たちはそそくさと  
着替え、教室を後にしてグラウンドへと向かった。



「今日は鉄棒をします」

ジャージに着替えた担任の先生（女性）がホイッスルを吹いて私  
たちをグラウンド脇に設置してある鉄棒の前に集合させてそう言っ  
た。

「姫無ちゃん。鉄棒得意？」

「うーん、まあまあかな」

「私、得意なんだあ」

私の隣で体操座りした状態の紗季がはにかみながら言う。自信満  
々だなあ。紗季は運動得意だし、こういうところで存在感を示して  
るんだろう。

私は苦手じゃないけど、紗季みたいに一番大きな鉄棒で『大車輪』  
なんて出来ないから普通の部類に入と思う。……なんか間違っ  
てる気がするけど、まあいいや。

「はい、じゃあみんな鉄棒に手を付けてー」

先生の合図で、各々鉄棒に手を掛ける。

でも、こういうときの男子っていやに存在感を主張する生き物み  
たいで。

「おいそこ俺が使うんだからどけよ」

必ずこんなことを言い出す男子が出てくるのよねえ。他にも場所  
は沢山空いてるのに、どうして彼はこんな女子が密集した地帯に踏  
み込んでくるのかしら。

「ここは私たちが使ってるもん。大輝<sup>だいき</sup>くんは空いてるところを使えば

いいじゃない」

どけと言われた女の子は最もな正論を大輝とかいう男の子に言い放った。このクラスになつてから日が浅いから全員の性格とか立ち位置を知ってるわけじゃないけど、大輝はなんていうかガキ大将みたいな男の子だ。自分の思い通りにならないと癇癪を起こすような子供。ほんと幼稚だなあ。

「なんだと！？ いいから俺の言うこと聞けよ！！」

ああ、また癇癪。一体どんな育て方されたらこんな子供に育つんだよ。うちなら絶対こんな子供には育たないと思う。兄さんみたいな大人びた人間になるはず。

「きゃあ！」

ドンツ！！ という音がした後、地面になにかぶつかった音が響いた。

大輝が女の子を突き飛ばしたんだ。

「……それはやりすぎでしょうよ」

「ああ！？ なんだよお前なんか文句あんのかよ！！」

ボソツと呟いた私の声が聞こえていたみたいで、今度は私に突っかってきた。ほんとにジャイアンみたいな男の子ね。

「女の子突き飛ばすなんて男として恥ずかしくないの？」

「てめー！！」

大輝は私もさっきの女の子と同じように突き飛ばそうと腕を突き

出してきた。

でも、残念。

「おわッ!？」

大輝が素っ頓狂な声を上げる。理由は簡単。いつの間にか自分が地面の上に倒れていたから。

ほんとは『いっぱんじん』相手には使っなくなって父さんに言われてたけど、こういう時ならいいのかな？

「な、なにしゃがった!？」

「更識流よ」

「なんだよそれ!」

「さあねえ」

あんまり言っちゃいけないだろうからこれ以上は言わないでおこう。今のは相手の腕力を利用して相手を投げ飛ばす更識流の技の一つだ。小学校に上がったところから父さんに教わり初めて、二つくらいの技ならなんとか使えるようになった。父さんや兄さんと比べるとまだまだだけだね。

「なにしてるのアナタたち!？」

騒ぎを聞き付けた先生が私と大輝の前までやってきた。先生、出来ることならもう少し早く来てもらえたらよかったんですけど。

「更識さん、これはどういうこと?」

「あー、えーっと……」

どうしよう。

女の子を突き飛ばしたのが気に食わなかったので私が彼を突き飛ばしましたなんて言えないし。

突き飛ばされてた女の子とも仲が良いわけじゃないなあ。

一体どうこの先生を言いくるめようかと私が画策していると、

「……俺が鉄棒から落ちたんだ」

大輝がポツリと呟いた。鉄棒から落ちた？ 一体彼は何を言っているんだろうか。一部始終を見ていたクラスの間みんな首を傾げている。

「俺が鉄棒から落ちたところに、こいつが来てくれたんだよ」

私のほうを指差しながら俯き加減で言う大輝に先程までの威勢の良さは感じられない。なんかこう、しゅんとした感じになっていた。

「そうだったの。とりあえず、大輝君は保健室に行きましょう」

先生に言われてゆっくりと立ち上がった大輝は先生に連れられて保健室のほうへと歩いていく。

んん？ んんん？ なんだろう。大輝が執拗にこつちを見てくる。チラチラとかそんなレベルではなく、穴が開くくらいジーツと私のほうを見てくる。

なんだろう。まだ私に突っかってこようとしているのだろうか。

……なんだか顔が赤いな。熱でもあるんだろうか。

「おっ昼、おっ昼」

「……嬉しそう、だね」

「だってえ、待ちに待った給食だよお？」

「私、あんなに食べきれないから……」

「じゃあかんちゃんのプリン食べてもいいい？」

「それは……だめっ」

時間は四時間目が終わった後、つまりは給食。

此処一年一組の教室でも、クラスメイトたちが給食を前にざわざわと楽しそうにしている。

そんな教室内で私とお喋りしているのは袖がだぼだぼの服を着ているおっとりとした少女、布仏本音<sup>のほとけほんね</sup>。

私の幼馴染みであると同時に、専属メイドでもある少女だ。

もともと更識家と本音ちゃんの布仏家は主従の関係にあるみたいで、小学校に上がるのと同時に私にもこうして専属メイドがついたわけなんだけど。

「んっ。おいしいねえ」

はつきり言つてこの子がメイドとして働いているところは見たことがない。というか給食で焼魚や白米をぶつち無視していきなりプリンを食べるってどうなんだろうか。

お姉ちゃんの専属メイドは本音ちゃんのお姉ちゃんの虚さんで、あの人はとてもしっかりしているのに、この姉妹は何だか正反对だなあ。

「……かんちゃん」

「なに？」

「今なんだかすごく失礼なこと考えてなかったあ？」

「……全然」

「気になる。最初の間がすごく気になるよお」

いつものほんとしてるのにこついうところは敏感ってなんなんだろう。私は内心を悟られないようにご飯を口に運ぶ。

「ああそついえばあ、最近かたりんとはどんな感じなのお？」

かたりん、とは私のお兄ちゃんである更識形無のことだ。

本音ちゃんはお兄ちゃんによく遊んでもらっていたから、いつの間にかそんなあだ名でお兄ちゃんを呼ぶようになっていた。

「お兄ちゃんとは……この二週間くらい会ってない……」

「IS学園に入学って寮住まいだからねえ」

「……寂しいけど、仕方ない」

嘘だ。

仕方ない、なんて思ってない。出来ることなら直ぐにでもお兄ち

やんのところへ行つて遊んだりしたいし、同じ屋根の下で過ごしたい。

だけどそれはお兄ちゃんに迷惑をかけることになっちゃうし、やっぱり仕方ないのかな。

「かんちゃんは優しいなあ」

「え……？」

唐突にそう言った本音ちゃんのほうへ、いつの間にか下がっていた顔を上げて視線を移す。

「かんちゃんばかりに迷惑かけないようにそう言ってるんですよ」

「……どうして、そう思うの？」

「だってかんちゃん、今ものすごく寂しそうな顔してるよお？」

言い返せなかった。

ピンポイントで私の感情を当ててきた本音ちゃん。ほんと、いつもはあんなにやる気なさそうなのにこういつ時だけ彼女はすごくなるっていうか。

「ああ、当たってたあ？」

「どうして……分かったの？」

「分かるよお」

にへら、と本音ちゃんは屈託のない笑顔で。

「私は本音ちゃんの専属のメイドだからあ」

私はそれを聞いて口元が緩むを感じる。専属メイドっていうよりは親友っていうくくりのほうがしっくりくるような気がするけど、本音ちゃんだからなあ。

「本音ちゃん……」

「なあにかんちゃん？」

「ありがとう」

「えへへえ、どういたしまして」

私たちは笑い合って、給食の続きを楽し

、

あれ。

私のプリンがない。

チラッ（私が本音ちゃんを見る）

テヘッ（本音ちゃんテヘペロ発動）

本音ちゃんの机には、空になったプリンの容器が二つ（・・）。。

……絶交、しようかな。



「ただいまー」

「あらお帰り姫無。今日は早かったのね」

「うん。五時間目までしかなかったから」

私は脱いだ靴を丁寧に並べて廊下を歩いていく。あの体育の時間以降、大輝がなにかにつけてこっちをジロジロ見てくるのが気になって仕方がなかった。根に持っているんだろうか。そんな男の子はモテないだろうに。

私はランドセルを自分の部屋に放り込んで、とある部屋へと早足で向かう。

「ただいま、兄さん」

やって来たのは兄、更識形無の私室。私がいつも寝ている部屋だ。最近兄さんが居なくても躊躇なくこの襖を開けることが出来るようになってきた。

今となってはここが私の私室と言っても間違いいではないような気さえする。少しずつ私物も持ち込んできているし。

私は軽く周りを見回して、兄さんの勉強机の上に置かれた写真立てを手取る。

写真には笑顔で写る更識家の面々に父さんの部下たち。総勢五十人にも上る大人数の中心に、私や簪、そして兄さんが居る。

「……はあ、」

会いたいなあ。

出きるなら、今すぐにも会いに行きたい。

電話とかならいつでも出来るじゃないか、とか思うかもしれないけどそれも実際は難しい。なんと言っても兄さんは世界に今のところたった二人しかいないISを操縦できる男性。しかもあの『黒執事』だ。世界各国からしてみれば喉から手が出るほど欲しい人材に違いない。

もちろん日本政府としてもそういった各国からの圧力に屈すると兄さんを何処ぞに取られちゃうわけだから、兄さんの周囲にはとてつもなく厳重な情報規制とかがされているみたい。それは家族からの電話一つとつてみても例外はないらしく、たった一回の電話のために幾つもの仲介が入ってしまつて凄く時間がかかる。

だから、滅多に電話なんて出来ないんだよね。

「あ……」

「あら簪、こんなところにどうしたの？」

不意に開いた襖の先に立っていたのは我が妹である簪。向こうもここに私が居ると思っていなかったのか少しばかり驚いているみたいだ。

「……お姉ちゃんこそ、ここになにしてるの……？」

「何って、特になにも」

「じゃあ、その手に持つてる写真はなに……」

「あの時撮った写真よ、ほら」

なにやら不機嫌になりつつある簪へ私は持っていた写真立ての写真を見せる。

「はあん。どうやら簪も兄さん成分をここに摂取しにきたみたい。写真を見た途端に頬が緩んでいくのがわかる。」

「お兄ちゃん……早く帰ってこないかな……」

「夏休みには帰ってくるって言ってたじゃない」

「そんなに、待てない……」

同感。夏休みまでまだ三ヶ月以上もあるわけだし、それまで兄さんに会えないのは苦行以外のなにものでもない。簪も耐えられないのか、若干涙目になっているようにも見えた。

「簪」

「……なに」

「そんな顔じゃあ兄さんに笑われちゃうわよ？」

「！？」

「泣いた顔見たって兄さんは喜んじゃくれないと思うけど」

「……な、泣いてなんか、いないもん……！」

ぐしぐしと目元を擦りながら言われても説得力ないなあ。全く、可愛いやつめ。

「ほら」

「え……」

「もうすぐ母さんが夕飯の準備始めるわ。手伝いに行きましょう」

兄さんに会えないのはもちろん寂しいけど、なにも一生会えないわけじゃないし。取り敢えず今はこの泣き虫な妹を一人前にするところが私の仕事かな。更識流もこの子はまだまだ会得できそうな感じじゃないし。

「簪。お姉ちゃん頑張るよ」

「……なにを……？」

「色々っ！」

そう言って私は簪の手を取り、母さんが居るであろう台所へと駆け出した。

#番外 彼女たちの日常（後書き）

次回

新世紀カタナシゲリオン

知らぬうちにたつもの

寝癖

噂

旗

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2621y/>

---

双六で人生を変えられた男

2011年12月19日14時37分発行